人狼と雷狼竜

ナナシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人狼と雷狼竜

【Ｎコード】
Ｎ６００４Ｔ

【作者名】
ナナシ

【あらすじ】
あての無い旅を続ける一人のハンター。
旅先にて故郷の村からの召集要請をギルドの連絡掲示板にて見つけた彼は、幼くして放れた故郷へと向かう。
彼は異端の武器と闘法を身に付けた凄腕として、人狼の名でハンター間で知られていた。
そんな彼が故郷で遭遇した雷狼竜。物語はここから始まる。

登場人物紹介（設定変わるかも）　スリーサイズは如何します？（笑）

ヴォルフ・ストラディスタ
性別：男
身長：１８４？
体重：７７？
年齢：１８
血液型：Ｂ型
出身地：ユクモ
好物：食べ物。長くて自由な睡眠時間。
嫌物：蚊（特に就寝時）。腐った食べ物。
趣味：自己鍛錬。読書。
特技：剣術。体術。
大切な物：愛用の刀（無銘）。剣術指南書。
服装：ユクモ（以前はイャンガルルガだったが破損した）
髪色：金（肩に届く位のセミロング）
瞳色：碧
性格：無口で無愛想
長所：忍耐力が強い
短所：口が悪い
職業：上級ハンター
家族構成：天涯孤独
得意な事：戦術考案。小道具作成。
苦手な事：人間関係。人付き合い。喋る事（口下手）
使用する武器：打ち刀（片手剣より長く、太刀より短い刀）
戦闘スタイル：居合い抜きを主力とした古流剣術。
通り名：人狼
備考：
　ユクモ出身だが、母親の死と同時に父と共に村から出て、色々あ

ってハンターとなった青年。
十歳にして独立したハンターとして活動し始め、その頃には既に荒削りながらも固有の剣術を習得しておりギルド間であっという間に有名人となっていた。
数々の武功を重ね上級ハンターとして名を上げるも、育った環境ゆえか人付き合いが致命的に苦手で単独行動をしがち。
性格上誤解を与えやすく、周囲からはあまり好かれなかったようだ。
食べ物に眼がない。
世界中を旅して、その土地の文化（食文化）を見て回りつつ、ハンターとしての日々を送っていた矢先に、ギルドから故郷からの召集文書が届いていると伝えられ、故郷のユクモへと戻り今に至る。
過去にとあるモンスターと因縁があり、今もまだ決着が付いていないのだとか。そんな噂がギルドの中で流れている。
それがハンター数十人にも及ぶ部隊が全滅し、彼一人が生き残ったという事件が元となっているのだとか何とか。

四季上（しきがみ）　神無（かんな）
性別：女
身長：１５９？
体重：４３？
年齢：１８
血液型：Ａ型
出身地：ユクモ
好物：みんなの笑顔。温泉
嫌物：みんなの悲しみ・苦しみ
趣味：料理。長湯
特技：料理

大切な物：家族とユクモのみんな
服装：和服　戦闘時はジャギィの剣士装備一式に更新
髪色：赤茶色（背中まで伸びたロング）
瞳色：茶色
性格：世話焼きなしっかり者
長所：よく気が付く器量良し
短所：自分の事ではドジを踏みがち
職業：初級ハンター
家族構成：姉と妹の三姉妹で暮らしている
得意な事：料理関係全般。運動。
苦手な事：悪い事
使用する武器：片手剣と盾
戦闘スタイル：一般的な片手剣の流派。守りも攻めも出来る万能ハンター
通り名：無し
備考：

ユクモで初級ハンターとして生活する少女。
四季上の次女で、マイペース過ぎる姉と妹に振り回されながらも、楽しく幸せに生きている。
人を影ながら支える事が出来る、よく出来た器量よし。
姉共々ハンターになるには優し過ぎる性格をしていたが、生き別れた幼馴染のヴォルフの上級ハンター入りを聞いた事がきっかけで志願し今に至る。
幼少期に両親をモンスターによって失い、その事は少なからずトラウマになっているようだ。そのせいか最初はモンスターと戦う事が全く出来なかったが、いつかあるかも知れない再会を願って剣を取るに至った。
基本戦術は、火砲（本小説ではヘヴィボウガンは火砲。ライトボウガンは小銃と分けさせて頂きます。全然ボウガンじゃないし）を持った姉の夏空を中心に置き、彼女を守りつつ、二刀使いで遊撃要

因の小冬を援護する、片手剣使いらしい戦い方をする。
再会したヴォルフと上手くやって生きたいと『一番』奮闘する事になる。
特に半ば野生化している上に人間関係を苦手としているヴォルフを、まずは文明人に戻す事に苦労する羽目になる。

四季上（しきがみ）　夏空（そら）
性別：女
身長：１６６？
体重：４９？
年齢：２０
血液型：Ｏ型
出身地：ユクモ
好物：お菓子　長湯
嫌物：辛い物
趣味：村伝統の舞　入浴
特技：舞。細腕なのに力持ち（無自覚）
大切な物：家族と舞姫の衣装。
服装：和服。戦闘時はアシラ一式のガンナータイプに更新。
髪色：黒（もみあげより後が膝まで届くベリーロング、あとはセミロング）
瞳色：黒
性格：おっとりしていて呑気。天然。
長所：非常に気が長くて優しい。
短所：甘やかしすぎる。
職業：初級ハンター。舞姫。
家族構成：妹二人と三人で暮らしている。
得意な事：舞。人の意表を付く事（無自覚）

苦手な事：人に厳しく接する事。お酒（嫌いではない。すぐに酔いつぶれる）
使用する武器：ヘヴィボウガン
戦闘スタイル：狙撃及び援護射撃、制圧射撃（射撃系はほぼ全般）
通り名：無し
備考：
ユクモで初級ハンターとして生活する少女。
四季上の長女でおっとりのほほんとした非常にマイペースな性格。
長女らしく妹達の事をよく見ており、両親が亡くなってからは村長達大人に家事を教わりながら数年でこれをマスターする。
ハンターを志すつい数年前までは、村の農場で働きながら村伝統の舞姫として抜擢されるなど、村では有名人だった。
ハンターとしては不向きな正確だと思われていたが、有事の際に自分自身を切り替えられる為、寧ろ向いていた事が判明する。
しっかり者だがどこか抜けてる神無よりも、実は失敗などが少ない。普段がおっとりした天然なので、とてもそうは見えないのだが……
火砲（ヘヴィボウガン）を使用する。簡単に折れそうな細腕とは不釣合いなほど力持ちである。
主にこれを用いた狙撃や援護射撃など、射撃の技は多義に渡る。
幼少期のヴォルフを知る人物で彼を弟のように思っている。
甘やかしすぎる反面教師だが意外にも押しが強く、ヴォルフはそんな彼女に苦手意識を持つに至るまで時間は掛からなかった。

四季上（しきがみ）　小冬（こふゆ）
性別：女
身長：１５０？

体重：３９？
年齢：１５
血液型：Ｏ型
出身地：ユクモ
好物：本。悪戯。温泉
嫌物：人に借りを作ること
趣味：読書。入浴。
特技：身軽な事。機転が利く。
大切な物：無い（と言い張ってるが家族）
服装：洋服（フリフリ）　戦闘時はブナハに更新
髪色：黒（ツインテール）
瞳色：茶色
性格：無口で無愛想、素直じゃないようで素直
長所：自分の事はしっかりやる
短所：短気な上に天邪鬼（のように見えて……素直）
職業：初級ハンター
家族構成：姉二人と暮らしている
得意な事：運動。早読み。
苦手な事：素直な感情表現
使用する武器：二刀流
戦闘スタイル：二刀流と素早い動きを用いた陽動と攪乱。
通り名：無し
備考：

ユクモで初級ハンターとして生活する少女。
四季上の三女で無口で無表情な無愛想な性格。人見知りする。
一歳の頃に両親を失い、物心付く前なので両親の事は殆ど覚えていない為、実質的には夏空が親代わり。
本が好きで村にある書物を片っ端から読み耽り、今ではユクモに来る湯治客や行商人が持っている本を買い取って読んでいる始末。
そのせいで小さな書斎が出来上がったとか何とか。

悪戯好きな困った一面があり、時折本で得た知識を試そうとする。
（被害者は専ら自称門番）
ハンターになった切っ掛けは、同じユクモ村出身のヴォルフが史上最年少で上級ハンター入りを果たしたという、ギルドからの情報を得た事。
負けず嫌いな性格故か、周囲の反対を聞きもせずにハンターへの道を進み始め、その結果姉二人が付いてくることになる。
実際本の虫だった彼女は当初体力がまったく無く、一人では見習いハンターとして生き残るのもかなり難しかったらしい。
決して口には出さないが二人の姉が大好きで、姉に粉を掛けようとする男達は皆、彼女の悪戯の餌食となった（中にはモンスターに襲われて命の危機に陥った者も）。
小柄だが素早い身のこなしを得意としており、それをフルに生かす為の二刀流を武器とする。

白百合（しらゆり）　梓（あずさ）
性別：女
身長：１５２？
体重：４１？
年齢：１８
血液型：Ａ型
出身地：サイガ（ユクモのある山の麓にある村）
好物：清潔なもの。規律。宝石や貴金属
嫌物：だらしのない人間。不潔な人間。お調子者。
趣味：整理整頓。買い物
特技：弓術

大切な物：椿。家族
服装：着物　戦闘時はジャギィガンナー
髪色：黒（背中より少し長めのロングヘアー）
瞳色：黒
性格：真面目で融通が利かない（委員長タイプ）気が強い。
長所：何事にも正しく考え判断する。
短所：融通が利かない
職業：初級ハンター
家族構成：ギルドで会計士をしている両親と祖父母
得意な事：集中すること。
苦手な事：ジメジメした所。汚い所
使用する武器：弓
戦闘スタイル：主に曲射を用いた援護射撃
通り名：無し
備考：
　主にユクモへの湯治客の護衛などで生活している初級ハンター。幼馴染兼親友の椿とコンビを組んでいる。
　神無達三姉妹とも顔見知りで、五人で出撃することもあった。司令塔である。
　真面目で融通が利かず、気が強い上に頑固者であり、お調子者の小野寺とは何かと衝突していたようだ。
　計算が得意だが、会計士にはなりたくなかったのでハンターを志そうとした椿を見て、ハンターになるに至った。
　弓は昔からやっているようで、それなりの腕前。止まっている物などただの的と言ってのけるほど。
　相棒の椿の突拍子も無い行動に苦労している。その上やたらと単独行動を優先するヴォルフまで加わってしまい、頭を悩ませることになる。
　出るとこ出ている相棒と四季上姉妹の上二人をみて、自分の発育の悪い身体に付いて悩むこともあるようだ。因みに三女とは大して

変わらない。

滝峰（たきみね）　椿（つばき）
性別：女
身長：１６０？
体重：４７？
年齢：１８
血液型：Ｂ型
出身地：サイガ（ユクモのある山の麓にある村）
好物：花
嫌物：特に無し
趣味：ボーっとする事
特技：怪力（気にしてる）
大切な物：梓。家族
服装：洋服（ワンピース）
髪色：茶色
瞳色：茶
性格：大人しくぼんやりしている
長所：プレッシャーに異常に強い
短所：空気が読めない
職業：初級ハンター
家族構成：両親と妹
得意な事：力技
苦手な事：細かい事
使用する武器：ハンマー

戦闘スタイル：ハンマーでの力技。突貫。
通り名：無し
備考：
初級ハンター。梓の幼馴染兼親友。
夏空とはまた違った意味でマイペースな性格で、突拍子もないことをやらかしてはトラブルを起こす一面がある。空気が読めず、余計なことを言っては梓に叩かれている。
梓のミスのトバッチリを受けることも多いが、そんな梓を助けるのも良いと思っている。
過去、アオアシラと遭遇時に正面きってハンマーを片手に挑もうとした反面、細腕なのに怪力・握力超という事実を気にしている。
（明らかに自分より大きい岩を持ち上げたりする。大樽爆弾をボールのように投げられる）
無口であまり自己主張しないがやる事成す事そつが無いが、手先は不器用。
梓いわく『私より頭が良いんだけどね』「けどね」の辺りが気になる所である。

始まりの遭遇（前書き）

この物語は私の独断と偏見の入ったモンスターハンターの世界での物語です。
ギルドのランクの上位・下位のランクの括りが違います。
ゲーム的なモノは殆ど含みません。気刃ゲージや鬼人化の要素も無いですし、防具から与えられる特殊スキルも存在しません。
防具はあくまで防具。ただ、頑丈さや、素材の元となったモンスターの能力が武器に付属する程度です。
登場人物が無惨に捕食されるシーンを書く可能性が高いです。ギギネブラ辺りに。
ただ、主人公は古流剣技の使い手です。どこぞの古代武将もビックリなくらい強いです。
戦い方もかなり変則的です。

気に入っていただけると嬉しいです。

始まりの遭遇

白い霧に覆われた山道。見渡す限りが白く濁って見える世界。
道なりに生える木々すらも霞み、遠くにあるかのごとく錯覚してしまうだろう。
木々の反対側は断崖絶壁。気を抜いてしまえば谷底へと真っ逆さまだ。ただ、微かに見える高い山は霧のお陰で何処か幻想的な雰囲気を醸し出している。
そんな山道を一人、歩き続ける者がいた。
黒塗りの藁(わら)で編んだ編み笠を被り、黒の外套を纏った人物だ。
編み笠の中からは肩に届く位の金糸のような髪が伸び、何処か猛禽類の類を思わせる鋭い眼が編み笠越しに道を視界に入れている。
その眼は常に周囲を見渡している。まるで領地を巡回する獣のように。
不意に重量物が、しかし軽快に転がり回るようなけたたましい音が、その人物の後方より響き渡ってきた。
その人物は徐に背中へと手を伸ばし、外套の中から伸びた棒状の物を握りながら流れるような動作で振り返る。
霧の彼方から音と共に現れたのは、ガーグァと呼ばれる飛べない鳥竜種に引かれた荷車だった。
「……」
その人物は手にかけていた棒状の物から手を離すと、荷車に道を譲るように木々の方へと身体をそらした。
すると荷車は速度を落としていき、停車した。手綱を付けられたガーグァがその人物の方を向いて鳴き、荷車から小さな影が姿を見せた。
「あんたさん。ユクモ村を目指してるのかニャ？」
アイルーと呼ばれる獣人種だ。人語を理解し、世界の広範囲で生息している。中には人間と主従の関係を結ぶ者や、人間顔負けの商

売をするもの者もいる。
「ああ。あんたもか？」
その声を掛けられた人物は、静かに答えた。
「そうかニャ！　なら後に乗っていくと良いニャ！　生憎と荷物が多くて乗り心地は悪いかもニャけど、もうすぐ大雨が降るニャ！雨の中ユクモまで行くのは大変だニャ！」
「助かる。雨の匂いはこの地でも間違いではなかったか……」
その人物は灰色の空を眺めて呟くように小さな声で言った。
「この地？　もしかして、海を渡って来たかニャ？」
「ああ。お言葉に甘えて乗車させて頂く。話は道中にでも聞いてくれ」
そう言って軽く跳ぶような動作で、その人物は荷車へと乗り込んだ。微かな音と共に揺れる荷車。手綱を握るアイルーは、その動作に眼を見開いた。
「ニャ！？　速い！」
「出してくれ。匂いが強くなってきた」
「おっと！　了解だニャア！」
その指摘に我に返ったアイルーは手綱を握りなおして、ガーグァに発進を命じた。
ガーグァはその命令に答えて走り出す。僅かとはいえ土煙を巻き上げて走るそれは、この道に慣れきった者の動きだった。
ただひとつ問題があるとすれば、荷車の立てる轟音のせいでお互いの声が全く聞こえない事だった。
荷車が走り出して数分。背負っていた細長い棒状の物を抱えて静かに座るその人物は、編み笠を軽く叩き続ける感触に僅かに顔を上げた。
「……振ってきたか」
振り注ぐ雨粒は大きく、それに比例して雨音は非常に大きい。まるでバケツをひっくり返したような大雨だ。
雨雫が陣笠を伝い大きな水滴となって外套へと落ちて行く。これ

では半身はほぼずぶ濡れになること間違いなかった。
「ニャ〜！」
アイルーが心底嫌そうな声を上げる。体毛が水浸しになる事が嫌で仕方が無いようだった。
その時、天上にて雷鳴が走り、大地に響くような轟音が鳴り響き、空を見ていた人物は反射的に、音源を見た。
天高く、幾つもの巴を描いた無数の雲が文字通り大渦を形作っていた。それはまさに嵐そのものが形になったようだ。
「……あれは……まさか、古龍（いにしえりゅう）か？」
渦の中心。渦の中に僅かに見え隠れする、白く細長い？何か？……それはまさしく龍だった。
あまりにも距離がありすぎて詳細は掴めないが、嵐の中を悠然と泳ぐように飛び続けるその姿は、他に類を見ない。まさに生態系の外にある種のあり方といえる。
その人物はその光景に半ば呆然と見入っていた。
なんと幻想的な事か。なんと神々しく、美しい事か！　だが……
そんな感慨に囚われていた人物の五感が、新たな何かの存在を感じ取ったのと、道を駆け抜けるガーグァが金切り声を上げて無茶な方向転換を行ったのは同時だった。
ガーグァは良くても荷車はそうは行かない。無茶な動きに付いていけずにバランスを崩し、中身の半分近くを投げ出す事になった。しかし、その時には既にその人物は動いていた。投げ出される直前に荷台を蹴って空中へと躍り出ていたのだ。
問題は着地した後だった。跳んだまでは良かった……何もせずに投げ出されて地面に激突、怪我人一人出来上がり……な事にはならずに済んだからだ。
だが、着地した場所が非常に拙かった。その人物の足場は岩のような硬質さが靴越しにも伝わりながらも弾力持ち、更には熱を含んでいるのが立ち上がる水蒸気で理解できる。
加えて、その人物の予想よりも着地のタイミングが早かった事に

違和感を覚えると共に、視線が普段の自分よりもずっと高い所にあることに更なる違和感を覚えた事で、思考が一瞬硬直したのが拙かった。
そして周囲を見渡すまでも無く理解する。自分は今、人に慣れたガーグァが一目見て恐慌に陥った程のモノの上に居るのだと。見れば、巨獣が空を……天の渦を睨んでいるのが後姿ながら嫌でも目に付く。
そして、首を僅かに曲げて後ろを見たソレと、目が合ってしまった。
振り落とされる前には跳んでいた。着地と同時に手にしたものの柄に手をかけた。
ソレは刀と呼ばれる武器だ。左手で鞘を握り、いつでも鯉口を切れるように曲げた親指を鍔に添える。
目の前のその巨獣は強靭な四肢を持ち、頭から天を突くような鋭い角が二本伸び、その眼は射抜くような鋭い眼光を放ち、碧い鱗と白い体毛にに彩られた全身からは、何かが弾けるような鋭い音が鳴り始めていた。
その姿から溢れ出る、雄雄しさ。力強さ。それはまさしく竜の眷属のものだった。
互いに睨み合い、双方共に動かない。人間は刀を構えたまま、竜は人間を睨み据えたまま……ただ、吹き荒ぶ雨の音だけが、世界を支配していた。
不意に閃光が走ったその瞬間、二つの影が交差した。
落雷の如く轟音と共に、竜の右前足が地面を打ち砕いた。
その破壊力は破砕音と共に凄まじく、人間が立っていた岩場その物を粉砕し、破片を宙へと舞い上がらせていた。
人間の姿は無い。竜の一撃で土くれの如く粉砕されたか……
竜が反対側へと振り返った。その視線の先には脱兎の如く走り去る荷車があった。先程自分に衝突しそうになっていた、アレだ。
その荷台に、先程の人間が乗っている事を目にした。竜が前足を

振り上げたあの一瞬を、あの人間は撤退の機会に生かしたのだ。
人間が逃げたのか、竜が生き延びたのか……それは果たして……
竜が咆哮を上げる。
何処か哀しげな……それでも孤高の誇りを含んだ咆哮を、荷車にて息を整えていた人間は、聞き届けていた。

「まぁ、それは大変でしたわね？」
「その通りだが得るものはあった」
「まぁ、それは頼もしいですわ！」
「……余計な期待はしないことだ。落胆せずに済む」
目の前の糸目が特徴的な竜人族の女性……妙は期待を抱きつつある糸目の村長を前にして、俺はこう答えるのがやっとだった。
俺の名はヴォルフ・ストラディスタ。しがないハンターの一人だ。
あの後ユクモに辿り着いた俺は、こうしてユクモの最高責任者に挨拶に行った。事務所は蛻(もぬけ)の殻で探すのに苦労した。
まさか、外の売店で茶と団子で優雅なひと時を過ごしていらっしゃるとは思いもしなかった。
「まぁ。あの可愛らしったヴォル君がこんなに無愛想になってしまいまして……少し悲しいですわ」
「そんな昔の事、覚えていない」
俺はこの村……ユクモ生まれで、物心付く前はこの村にいた……らしい。
何分、三つの時に母が急死してからは元々流れ者だったらしい親父と共に旅に出ていた為に、この村の事など何一つ覚えていないのだ。
俺の最初の記憶は狩りの最中の記憶だ。親父と共に色んな所を旅して回った。それは、六つの時に親父が４０人以上を動員した絶対強者討伐作戦での負傷が原因で死亡してからも、一人でアテの無い

旅を続けてきた。
　ついこの間まではこの大陸の……丁度このユクモの反対側に居たのだ。もっとも、街に安宿を荷物置き場として借りただけで、専らモンスターと巣窟である高原で過ごしていた訳だったが。
「まったくもう！　お顔は女の子みたいにお綺麗ですのに……本当に男の子？」
「……」
「小さい頃、一緒に風呂に入った事覚えてる？」なんて出会って早々に仰ったのは何処の誰だ？　反論などしても無駄だ。話を逸らすとしよう。
「で、何で俺をワザワザ呼び寄せたんだ？」
　本来は敬語を遣わねばならない相手であり最初は礼を持って接したのだが、本人が他人行儀みたいで嫌だと言ったので素で喋らせてもらう事になった。もっとも、最早直す気は起きないがな。
「聞いてますわよ？　イャンガルルガにグラビモスやモノブロス、他にも色々とお一人で倒されたとか。貴方は立派な上級ハンターですわ！」

　上級ハンター……脅威度の高いモンスターを単独で撃破した者が認められる位だ。
　ハンターは位に分けられて依頼を受ける。
　初心者はまず、単独で野営をする。持って行けるのはナイフと服と教本だけ。食料・道具その他諸々は全て現地調達。様々な事柄を身体に叩き込む所から始まる。この時点で脱落者は多い。特に都会暮らしの温室育ち。
　因みに依頼内容とは違ったとしても、モンスターの餌食にされて帰らぬ人となっても、運悪く大型種に出くわして逃げられなかったとしても、現場の事は全て本人が悪いとされる。
　責任者はあくまで自分自身。嫌なら最初からハンターなんて志すべきではないのだ。

初心者はこれを一年やり遂げて駆け出しハンターとして認められる。
例外があるなら、この期間で……例えば草食種の1頭でも狩って見せたならだ。
草食種……アプノトスやアプケロスにしても、人間とは力の差が比較にならないほど強く、足が速い。初心者がこれを一人で倒せれば本当に大した物だ。

甲虫種は例外として省く。特にブナハブラやランゴスタの巣は、全身を覆う専用装備でも無ければ近付かない方が懸命だと言う事をまずは思い知らせなければならない。何せ鳥竜種でも危険視する類だからな。

チャチャブーに関しても省く。原住民には近付かない方が良い。友好的な者なんて僅かだ。

一人前のハンターになってようやく小型鳥竜種狩りの依頼を受けられる。
人と大して変わらない大きさだからと誤解しがちだが、鳥竜種は頭が良い。自然界の掟を本能で理解しているからこそ頭が回る。小さいの一頭でも草食種と互角。肉食で攻撃的な分だけこっちの方が危険ではあるが。
ドスの名を与えられる群れの長を、切り札兼指揮官として一個の部隊として動く奴らの連携は、なりたてのハンターではまずは手も足も出ないだろう。
ドスの名を持つ群れのボスを複数頭・複数種類、小型の甲殻類、コンガ等の小型牙獣種とブルファンゴを討伐してようやく一人前のハンターとして認められ、次のランクの依頼を受けられる。

次がイャンクックやババコンガ、クルペッコ、ドスガレオス、陸

のロアルドロスのような類だ。
位の上昇はこんな具合に進んでいく。
それ以上のモンスターとなれば単独行動をするような奴や滅多に居ないだろう。俺も例外ではない。敗北した経験もある。生き残ってきただけであってだ。
ディアブロスの時など酷いものだった。指揮系統が滅茶苦茶だったとは言え、18人で挑んで生き残ったのが6人だけという有様だ。
「確かにその通りだが、何故こんな静かな村に俺を？」
「それがですねぇ。最近山頂付近や森の奥に居るモンスターたちが、降りてきているのですわ」
「山の……奥？」
先程遭遇した、あの碧い竜を思い出す。あれは並みのハンターじゃ手に負えない。
「翼を持たない、四肢を大地につけた碧い竜か？」
俺の言葉に、村長が糸目を見開いて驚く。
「……ジンオウガと、遭遇なされたのですわね？」
「ジンオウガというのか」
「ええ。山奥の特に険しい地帯にお住みになる牙竜種ですわ」
牙竜種？　珍しいな。
「雷狼竜と呼ばれ、雷を自在に操ると言います。火竜を除けば……この地方の頂点に立つ竜ですわ」
火竜を除けば？　事実上食物連鎖の頂点に立つということか。そんな奴が降りてきているのか？
「アレを俺に片付けろと？」
やってみなければ分からないが……アイツ、とんでもなく強い。
「いえ、追い払うだけで良いのですわ」
何とかなるレベルでもないな。何にせよ、この地方のモンスター全てを頭に入れた上で策を練らなければならない。
どう策を練っても結局は戦わねばならないな。
「だが急には無理だ。俺はこの土地の土地勘が無い。まずはこの地

に慣れてからだ。でなければ中型鳥竜種にですらやられる可能性がある」
どんな上級ハンターでもいえることだが、土地勘という物は非常に重要だ。あの時撤退したのも土地勘の無い戦いなど無謀すぎるからだ。
例えば、迅竜を倒した凄腕ハンターが居たとしよう。ソイツは一度倒すことが出来たのならば二度目など多少は楽だと、調子に乗って愚かな考えに陥ってしまった。
そしてソイツは見知らぬ土地で戦って、目当てのモンスターどころか格下と見下していたランポスの群れの餌になってしまった。
そいつの敗因は土地勘の欠落。対してランポスの群れは土地勘がある上に集団という利点がある。壁を背にするまで追い込まれてしまったのだろう。
俺もそうならない為に、ここの土地勘を得なければならない。
「左様でございますか？　では気長にお待ちしますわ。ところでヴォル君も如何ですか？　ご馳走しますわよ？」
む、桃と白と緑の串団子か。地方の名産品らしい食料には興味がある。何せ、狩りの現場で食べられる物といえば持ち込んだ携帯食料か、現地調達した物しかない。
「では馳走に……」
皿に乗った上手そうな菓子に手を伸ばし……
「大変ニャー！」
……たところで邪魔が入ってくれた。樽に乗ったアイルーだ。陣笠に外套を着ている。……俺と似たような格好をしているな。
「まぁ、そんなに慌てて。どうかなさいましたの？」
「カンナさん達から救援要請ニャ！　赤紫の狼煙が上がったニャ！」
赤紫の狼煙……救援、増援の要請の合図だ。
「案内してくれ」
俺は愛刀を手にしてアイルーに話しかける。
「行って下さるんですの？」

「他に誰かが居るんなら任せても言いが、コイツがいつ頃に救助要請を受けたか分からん。それからここまで来るのにどれだけ掛かっているのかもだ。なら、今聞いた俺が行った方が早い」
俺の言葉に村長は満足そうに頷く。
「頼むぞ。たった今来たばかりだ。俺には土地勘が無い。全力で走れ。足の早さには自信がある」
「任せるニャ！」
アイルーはそう言って樽の上に乗って脱兎の如く走り出した。
「では行って来る」
村長の言葉を待たずに樽アイルーを追いかける。救援が間に合えばいいんだがな。

「お気を……本当に速いですわ……」
お気をつけて……と言おうとした所で、あの青年ハンター、ヴォルフ・ストラディスタは既に見えなくなっていた。
あのアイルーは宅配・郵便担当で、速さと正確さを売りにしていた。足の速さでは定評のあるアイルー達の中でも指折りに速い。それは人間が追いつける速さでは無い。だが、あの男はそれに容易に追いつけるのではないのか？
「……異端の剣でしたわね。その担い手ならば……」
村長は彼の持っていた刀を思い出した。
片手剣にしては長く、太刀にしては短い。
その特徴的な刀を手に、獣染みた俊敏性と変幻自在の体術。その担い手の動きは最早、人間業ではないとすら言われている。
僅かながらも幼少期を知っている村長としては、何が彼を強くしたのか気になるところではあったが、今は救援を要請した者達の無事を祈るばかりであった。

始まりの遭遇（後書き）

始まりはこんな所です。如何でしたか？
ご感想をお待ちしております。

出会いと再会は一方通行。（前書き）

第二話です。
他の登場人物が登場します。
色々至らない所がありますが、宜しくお願いします。

出会いと再会は一方通行。

雲が近い山奥の渓流。

ここは水源が近く、常に湧き出している水によって支配されているといっても過言では無い世界だ。

歪な形の大岩が無造作に転がって出来た川には無数の魚が泳ぎ、高くまで伸びた樹齢数百年とも言える木々が乱立し、地面には草と苔が生い茂り、陽の当たらない湿った土には茸が生えている。

水の流れる河川の音。風と風にお煽られて舞うように散っていく花びらや木の葉の音。それだけが支配している静かな地。

だが、それは今では無かったようだ。

重く鈍いくぐもった音が大地に響いた。音は山々に響き渡り山彦となって乱反射する。

その音の正体は、爆炎と共に弾丸を吐き出す火砲の砲声だった。

黒く塗装された太い砲身を持った火砲を手にしているのは、まだ少女の面影が残った若い女性だった。

その少女の膝まで伸びた長く艶やかな黒い髪を赤い紐で襟足で縛り、動きやすさを重視した服を着ている。

彼女と背中合わせで立っているのは右手に鉈のような剣、左手には爪を模した突起の付いた鉄板で補強された丈夫そうな木の盾を持ち、赤みがかった長髪を背中まで伸ばした少女だ。背中合わせの女性と同じく動きやすさ重視の軽装だ。

そんな彼女達は今、ジャギィと呼ばれる小型鳥竜種の群れに囲まれてしまっていた。

剣からは赤い血が滴り、火砲は既に砲身その物から白煙が立ち昇っており、彼女達自身も血塗れで今までの戦闘の凄まじさを物語っていた。

対するジャギィの群れは、かなりの数を失っていた。地面に転がる死体、傷を負って動けなくなった者達の数は十を優に超えている。

死んだ個体は身体に大穴を開けているか頭部を失っている物が殆どで、焦げたり焼けたりした傷口から明らかに火砲を持って倒されていた。
対して動けなくなっている者達は、弾が身体を掠めて肉を抉られた者や剣で切り付けられ、傷を負った者達だ。
ジャギィ達はそんな二人を警戒しているのか、威嚇しつつも距離をとって迂闊には近付こうとしないが、それでも徐々に距離を詰めている。
「……困りましたねえ」
「何が？」
火砲を持った女性が徐に……しかし、呑気に呟き、剣を持った少女がジャギィ達への警戒を緩めずに尋ねる。
「弾が、残り少ないです」
「え〝……」
明らかに動揺した言葉を呻くように漏らす少女。その隙を彼女に面したジャギィ達が逃すはずも無く、あるものは飛び掛りあるものは肉薄を試みて突進する。
「わ！」
だが、そんな少女の反対側にいた女性が少女と前後を入れ替えるように反転し、ジャギィ達が到達する前に引き金を引き搾った。
至近距離から放たれた弾丸は正面に居た突進してくるジャギィの胴を貫いて後方へと抜け、反動で持ち上げられた砲身は跳躍してきたジャギイの胴を加熱された砲口で見事に打ち据え、続いてゼロ距離で砲弾を放って吹き飛ばす。
対して少々間の抜けた声で強引に反転させられた少女は、今ので女性の砲の薬室に弾が無い事を瞬時に理解して、砲身が次弾装填の為に中折れした所で反転して位置を入れ替え、後続のジャギィの先頭を反転の勢いを持った盾殴りで弾き飛ばす。
ここで、ジャギィ達の動きがまた止まった。彼等の攻撃の抑止力となっているのは、この二人の背中合わせの連携によるものだ。

火砲の破壊力と、再装填の隙を埋める剣と盾のコンビネーション。これが彼等に攻撃を躊躇わせている。
小柄で体重が軽く力がそこまで強くない彼等の得意とする集団戦も、これでは不利というものだ。更には、彼等にはメスであるが大型のジャギィノスや群れのボス兼指揮官である更に身体の大きいドスジャギィが不在だ。
まだ若くて身体も小さく、経験不足な彼等では膠着状態を作るのがやっとともいえた。
だが、背中合わせの二人にも限界が近付いていた。体力と、予備の弾薬だ。特に火砲に至っては弾が尽きればただのデッドウェイトでしかなく、剣の方も血糊や度重なる酷使で切れ味が鈍ってきている。
「お姉ちゃん。今ので後幾つ？」
赤みがかった髪の、剣を持った少女が尋ねる。
「通常弾があと六、散弾はゼロですね～。」
姉と呼ばれた、火砲を持った女性は緊張感が全くこもっていない、呑気な声で答えた。
「どど、どう考えても足りないじゃない……」
少女の顔には明らかな焦燥が浮かんでいる。手持ちの武器と小道具では最早この状況を打開する事が恐ろしく困難となってしまっていた事を認識してしまったのだ。
火砲の弾が完全に尽きれば、姉の武器は小道具としてのナイフだけとなってしまう。これでは身を守る事すら難しい。リーチのある木の棒の方がまだマシなくらいだ。
「せめて小冬が居れば……」
「あの子なら大丈夫だとは思いますよ～」
「だから早く戻ってきて欲しいの！」
少女が姉の的外れな発言に涙目になりながら全力でツッこむ。
だがそれが致命的な隙となり、周囲を囲んだジャギィが一斉に動き出した。

『！！』
二人は自分達の迂闊さを呪ったがそれは既に手遅れだった。
例外があるとすれば、ジャギィ達が逆に奇襲を掛けられた場合だ。
そしてそれは現実となる。
少女が全力で姉にツッコミを入れた時、放物線を描いて瓶のようなものが二人の頭上へと飛来してきたのだ。
くぐもった音と共に周囲が眩い閃光で支配される。
『ギュエアぁッ！！』
二人の周囲を囲んでいた全てのジャギィ達はそれをマトモにくらい、視界を喪失してパニックに陥った。
『え？』
閃光を直視しなかったので無事だったものの、突然の出来事に状況把握が出来ていない二人が呆然と呟く。
その直後、ジャギィ達から血飛沫が舞った。一瞬で何頭ものジャギィ達が斬り捨てられる。
振るわれるのは白刃。それを振るうのは一人の人間だった。
その動作は美しくも力強く、白刃と血で無数の弧を描くソレは剣舞と呼ぶに相応しいものだった。
最後の一頭が逆風に切り上げられた刃にて頭を左右に両断された。突然の介入者はゆっくりと残心しつつ、刀をふるって血糊を払い落とし鞘に収めた。
「間に合ったようだな。怪我は無いか？」
その人物はそう言って被っている陣笠を持ち上げつつ、未だに呆然としている二人に話しかけた。
青年だ。肩に届く位の長さの金色の髪、湖のような透き通ったその顔は女性と見紛うほどの中性的な顔立ちだったが、背は二人よりも頭一つ分は大きかった。身体も細身とは言え引き締まって筋肉質であり、何処か野生の獣のような雰囲気すら放っている。

「あ……助かりました！　ありがとうございます！」
ようやく正気に戻った少女が剣を勢いよく頭を下げる。
「気にしなくて良い。それよりも顔を拭いたらどうだ？　二人共、血塗れだぞ」
「あ……」
少女が慌てて腰の後の鞄から手拭いを取り出して顔を拭き始める。余程慌てていたのか武器である剣と盾を落としてしまっている。
「まずは水に浸した方が良い。……どうかしたのか？」
駆け付けた青年……ヴォルフ・ストラディスタは、乾いた手拭いで血を拭っている少女に注意したところで、もう一人の女性が自分を見て目を見開いて呆然としている事に気付いた。
「……もしかして、ヴォルちゃん？　ヴォルフ・ストラディスタちゃんですか？」
「……ちゃん？」
ヴォルフは予想もしなかった呼ばれ方に一瞬硬直したが、顳？（こめかみ）を指で軽く叩いて気を取り直した。
「確かに俺はヴォルフ・ストラディスタだ。俺を知っているのか？」
ヴォルフの言葉に女性は花咲いたような満面の笑みを浮かべ、顔を拭いていた少女は驚いたような顔でヴォルフを見た。
「やっぱりヴォルちゃんなんですね！？」
女性が笑顔のままヴォルフに近付くが、ヴォルフは反射的に一歩後に下がる。彼女は自分の姿をすっかり忘れているようだ。殆ど全身に血化粧が施され、生臭い臭いが立ち上がっている。
加えてそんな血塗れの顔で、無邪気な笑顔を浮かべられたら逆に恐怖感を抱いても不思議は無いだろう。鏡で見せてやりたいくらいだ。
幸か不幸か今現在、ヴォルフは鏡を持っていない。持っていると色々便利なのでこれからは携帯しようと、ヴォルフが心に誓ったのはここだけの話だ。
「何故下がるんですか？」

「お姉ちゃん。血塗れだよ？」
ヴォルフが下がった事に小首を傾げながら疑問を口にした女性は、濡らした手拭いで改めて顔を拭いていた少女の指摘に、女性はポンと手を打って自分の状態を理解する。
「ああ、気付きませんでした。すみません」
「いや……」
女性の言葉にヴォルフが肩を竦めながら答えと、そこへ何かが転がってくるような音と共に近付いてきた。
「カンナさん、ソラさん無事でしたニャー！？」
音と共に現れたのは樽に乗ったアイルーだった。ヴォルフをここまで案内する役目を受けていたあのアイルーだ。
「あ、トラちゃん。そっか、トラちゃんがヴォル君呼んでくれたんだ」
「にゃあ。でもあっしも参戦する予定でだったんですがにゃあ……新顔さん。速いですニャ。あっし、樽の速さには自信あったんですニャア……」
トラと呼ばれたアイルーが樽をそのままの勢いのままで立ち上がらせる。一旦ジャンプして乗り直すことで完全に止めてしまう辺り器用だ。
その口調は速さで自分が負けてしまった事で落ち込んでいるのか溜息交じりだったが、蓋を開けて応急薬や弾丸を取り出していく。
「え？　ヴォル君トラちゃんより速かったんですかぁ？」
「そうなんでやんすよ。この辺りに入った途端、血と火薬の匂いがするとか言って一人でさっさと行っちゃいましてね。ところでコフユさんはどうしたのかにゃあ？」
トラの言葉にヴォルフは眉根を寄せ、ソラとカンナと呼ばれた二人が目を見開いた。
「そうだ！　小冬！」
少女が慌てて地面に置いてあった剣と盾を拾い上げる。
「あんた達、三人だったのか？」

その様子に
「はい。小冬ちゃんって言って私達姉妹の末っ子なんですが……」
「さっき一人でドスジャギィを追っかけて行っちゃって！」
それでこの二人は戦力不足で窮地に陥っていたのだ。
「どっちに向かった？」
「あっち！　川の上流！　急がないと！」
「トラ、二人の傷の手当と弾薬や道具を補充しておけ」
ヴォルフは少女が指差した方向へ向かいつつトラに有無を言わさない口調で命じた。
「は、はいニャ！」
「え？　ヴォルちゃん？」
「先に行くぞ……終ったらついて来い」
ヴォルフは言い終わると共に駆け出した。その速さは凄まじく、山中に転がる石や倒木による段差など存在しないかのように走っていった。
「え？　もう見えなくなっちゃった……」
「速いですねえ……」
「あんな調子であっしを追い抜いていったんですニャ。とにかく、さっさと澄ましょうニャ」
トラがヴォルフが走っていった方向を呆然と見ている二人を促す。
「あ、うん」
「速く追いつかないと行けませんしねぇ」
二人はそう言いつつ、トラの用意した道具で剣の応急手当、予備弾薬の装備をしていく。トラはそれを手伝いつつ周囲を見渡す。周りにはジャギィの死体が死屍累々と転がっていた。
幾つかは彼女達の手による物だが、殆どがあの男の刃による傷が死因だ。全てが一太刀で始末されている。
これだけの事をこんな短時間でやってのけたのだから、自分達が付く頃には全て終ってるんじゃないか？　とトラは漠然と思った。

鞭のように撓(しな)る小指ほどの太さの棘の生えた尾が振るわれる。その一撃は重く、直撃を被れば棘が身体に刺さるどころか、まだ止まらない勢いが棘を引っ張って傷を抉るように拡大させるだろう。

それを理解しているからこそ少女はソレをバックステップで躱(かわ)す。頭の両サイドで結ばれた長い黒髪が遅れて引っ張られるも、振るわれる尾に巻き込まれる事は無かった。

少女が対するのは大きなエリマキが特徴の、ジャギィ達の群れのボスであるドスジャギィと呼ばれる鳥竜種のモンスターだ。群れのボスというだけあって体格も通常のジャギィとは比較にならないほど大きい。

その力は当然ジャギィ達の比較にはならない。特に対峙している少女では致命的だ。軽装な上に小柄、更には単独行動で味方も無し。

今の所ドスジャギィは単独だが、少しでも追い詰められるとダメージ覚悟で仲間を呼ぶ。そうなったら勝ち目が無い。

今更になって置いて来てしまった姉二人を思い出す。普段なら三人で行動し、弱点を補い合って目的を達成する。なのに、今は一人。自分一人が功を焦って突出したせいだ。

このドスジャギィとは何度も遭遇している。その度に自分達など相手にするまでも無い……とでも言いた気に手下を嗾(けしか)けるだけして奥に下がっていく。

今回こそは、今まで倒せなかった群れのボスを倒す好機と思っていた。

だが、ドスジャギィは想像以上に強かった。多少の傷ではビクともしないタフさが何よりも厄介だった。

両手に持った、十手を思わせる一対の小剣の切れ味も鈍ってきているのもまた、少女の危機感をあおらせている。

不意にドスジャギィが腰を落とした。

少女が反射的に身構えると、ドスジャギィは自身の身長の三倍ほど高く跳んだ。

「くっ！？」
少女は危険を察知すると咄嗟に前方へ全身を投げ出すように跳ぶ。
ドスジャギィが先程まで少女がいた場所に、重い音を立てて着地する。跳んでいなかったら踏み潰されていた所だ。
対する少女は地面に身体をしたたかに打ちつけていた。そこ自体は土だったが、乾いて硬くなっていた為にその衝撃は思いのほか強かった。
そこへ無情にもドスジャギィの追撃が迫る。近付いてその大きな足で踏みつけようと足を持ち上げる。
少女は肩越しにそれを見て咄嗟に転がって躱し、すぐに起き上がって反撃に出た。
しかし、ドスジャギィはそれを見越していたようで、姿勢を低くして横へと強く一歩踏み出した。丁度、剣を構えて反撃してくる少女の正面だ。
「へぶっ！？」
突然の事に攻撃も回避も間に合わない。ドスジャギイが文字通り壁となって衝突し、跳ね返された。見事なカウンターである。
吹き飛んだ少女は一度バウンドしてから地面に転がった。
「うう……くぅ……」
激痛に呻きながらも立ち上がる。だが、両手に握っていた剣が無い事に愕然とする。
剣はすぐ目の前の地面に一本。もう一本もそのすぐ側にある。だが、そのすぐ後にはドスジャギィが迫って来ていた。
拾っている暇は無い。試みた時には奴に止めを刺されている。少女はそれを理解して、予備のナイフを抜く。雑用で使う物で武器としての使用には向いてない物だ。無いよりはマシではあるが……
ドスジャギィが腰を落とし、ゆっくりと間合いを詰めてくる。
こんなナイフで何が出来る？　少女は自問するが答えはナニモデキナイという無情なものだった。
「……私には無理……か」

自嘲気に呟きながら力なく笑った。
「ギャエッ！」
目の前のドスジャギィが突然悲鳴を上げて顔を逸らした。
「え？」
その右目には掌に収まるほどの小さなナイフが刺さっている。
「今だ！　来い！」
男の声が聞こえた。声のした方向には一人の男がこちらに歩いてくるのが目に入った。
ユクモでよく見られる動きやすさを重視した服と陣笠を着用している。
少女は落ちていた武器を素早く拾い、男の方へ駆け出した。
「下がっていろ」
「え？」
男は少女とすれ違う際に呟くように言うと、ドスジャギィに向かって歩いていく。その後姿が語っていた？俺一人で充分だ？と。
少女は呆然とその背中を見送った。
ドスジャギィが痛みを堪えて男へ向き直った。ナイフが深々と刺さった左目は完全に光を失っている。完全に怒り狂っているようだ。
空に向かって吠えた。ドスジャギィが群れの配下達を援軍に呼び出す際の合図である咆哮。しかし、ジャギィもジャギィノスも姿を見せない。それは既に群れはこのボス以外全滅している事を意味していた。
ドスジャギィは唸り声を上げて、男を睨み付ける。対する男はゆっくりとこちらに歩いてくるだけだ。
「キエエアアアアアアア！！」
ドスジャギィが咆哮を上げて男に突進する。繰り出される一回転の遠心力を受けた尾の薙ぎ払い。狙うは首だ。直撃を被れば首は皮一枚で繋がるかどうかも怪しい必殺の一撃だ。
しかし、それは男が一気に姿勢を低くした為に空振りに終った。
男が繰り出すは水面蹴り。尾での薙ぎ払いを渾身で放っているジ

ャギィの体制は足元への攻撃にあまりにも弱かった。
片足が払われて体勢を崩した。回転の勢いもあってバランスなど保ちようが無い。脆くもドスジャギィは倒れこんだ。
その直後、鍔鳴りの音と共に白刃が弧を描いた。
男の水面蹴りから繋げた切り上げの軌道で居合い抜きが繰り出され、倒れこむドスジャギィの首を一刀の元で断ち切った。
ドスジャギィの体が地面に倒れこむのと、首が地面へと転がるのは同時だった。
刀身に付着した鮮血を払い落とし、刀を鞘へ納める。首から上だけになったドスジャギィが苦しげに声を上げていたが、すぐに沈黙する。
それを見届けた男が少女へと近付いて行った。

強い。少女はそう思った。何の飾りもいらない。この男は強い。自分とは比べるまでも無いくらいに。
「あんたが小冬か？」
「！？」
呆然としていた少女が弾かれたように、男と視線を合わせる。
「……あんたが小冬か？」
男の問いに少女はただ、頷く事しか出来なかった。
「姉二人が心配していた。あんたの行動は誉められたものじゃない。反省しろ」
「……分かってる……けど、言われるまでもない」
「そうか。取り敢えず応急手当を……いや、後にした方が良いな」
「え？」
男が後方を振り返ると、少女――――――――小雪もその方向を見る。後方１００メートル程の獣道。そこには、青い毛皮と両前足にびっしりと並んだ大きな棘が印象的の牙獣――アオアシラがこちらへと歩いてきていた。

出会いと再会は一方通行。（後書き）

如何でしたか？

次の更新と同時に登場人物紹介を別枠で用意しようかと思いますが、如何でしょうか？

ご感想お待ちしております。

ユクモ村にて自己紹介と……

「こっち！？」
「はいニャ！」
「急ぎましょ～」
森の中を走る。走り続ける二人と一匹。
手当ては傷を負ってすらいないのだから必要は無かった。必要だったのは武器の応急整備だ。
空腹でスタミナが切れ掛かっているが、携帯食料が無いので却下だ。ここで調理するか食料を調達している時間的余裕は無い。
ヴォルフは単独で救助へ向かった。自分達二人を救助した時に見た彼の剣は凄まじく、一人でも大丈夫だとは思ったが万一の事がある。
事が終った所で新手が出現するのはよくある事なのだ。特にこの渓流にはユクモの人々には馴染みの深い牙獣が生息している。騒ぎを聞きつけて現れるのは日常茶飯事だ。
今回だって火砲の音を聞きつけて現れるのではないかと心配していた位だった。
「あ、あれは……」
少女が、前方に人の後姿を見つけた。見覚えのある、両側頭部で結ばれた長い黒髪を。
「小冬ちゃん！」
女性が呼び掛けるも、呼ばれた少女――――小冬は聞こえていないのか振り返らない。
「小冬さん！」
共に走るアイルーのトラが先に彼女へと駆け寄って呼び掛け……ようとして、トラも小冬の見ている方向を凝視し始めた。
二人はお互いに顔を見合わせて、小冬とトラの元へと駆け寄り……その原因に目を奪われた。

アオアシラがいた。棘が並ぶ甲殻に覆われた前足の先にある爪の一撃は細い木など一撃で圧し折る程の威力と、意外なほどの速度を持っており、単調ではあっても体の大きさ故に間合いの中で躱すのは困難だ。

だが、対するヴォルフはその危険な間合いで掠りもせずに回避し続けている。その動きは風の中で舞う花弁のようだった。

連撃の後の振り上げを反転させて、両前足を用いた挟み込むような一撃は予測していたかのように後方へ下がって回避する。

距離を取ると共に、ヴォルフは地面に転がる石を蹴り上げて掴み取り軽く投げ付ける。石はアオアシラの鼻面へと吸い込まれるように当たるも、軽くバウンドして地面に落ちる。

あからさまな挑発だ。

最初、このアオアシラは負傷している小冬の方を見ていたが、すぐに立ちはだかるヴォルフに注意を向けた。そこでヴォルフは万一、矛先を負傷している小冬に向けられる可能性を警戒して同じように石を投げて挑発したのだ。

当然ながら石をぶつけられたアオアシラは怒ってヴォルフに襲い掛かった。その暴挙ともいえる行為に小冬は唖然としていたが、これで彼女に注意が向く事も無くなった。

そして今に至る。

二度も同じ暴挙を受けて黙っていられるアオアシラではなかった。後ろ足の二本で立ち上がり、両前足を広げて大きく吠える。

そこへ三度目の投石。全く力の篭っていない、明らかに馬鹿にした行為。

アオアシラは鋭い咆哮と共に突進しつつ、両前足を大きく持ち上げた。全力の一撃だ。人間など腐った果実のように潰れてしまうだろう。

「……氷柱（つらら）の一刺は大地を穿つ」

ヴォルフが厳かに呟くと共に、迫る即死の爪は躱された。彼は下がっても側面に逸れてすらいない。縦に、垂直に跳んで回避したの

だ。その結果、爪は虚しく空を切る。
その跳躍は一息に直立したアオアシラよりも高く軽く跳んでいた。
鍔鳴りと共に抜き放たれる白刃。刀身を下にして振り被り――――降下と共にアオアシラの頭に突き立てられた。
鈍い、湿った音が奇妙にも響き渡り、一瞬送れてアオアシラが崩れ落ちる。その時には既に、ヴォルフは事切れた牙獣の体を足場に跳び着地していた。
頭に突き立てられた刃は頭蓋を貫き、顎の下にまで達していた。アオアシラは何が起こったのか分かってすらいなかっただろう。
「待たせたな」
ヴォルフが刀を振るって血を払い鞘に収めながら言った。

どんな牙獣かと思ったが、力だけの木偶のような奴だったな。だが、これでも非戦闘員や人里には充分に脅威とはいえるな。始末したのは正解だったか。
さて、小冬……だったか？　怪我の手当てをするか。そう思った所で視界に入る見覚えのある二人と一匹が増えていた。
「速かったな」
あの二人、どうやら怪我はしていなかったようだな。無事で何よりだ。
「傷を見せろ。それとも連れ二人に任せるか？」
三人と一匹に近付きながら尋ねた。
「……アンタ、誰？」
二刀使いの少女に問われた。……小さいな。幾つだ？
「ヴォルフ・ストラディスタ。ユクモ村村長の召喚に応じ馳せ参じた。ギルドの規定によって俺はユクモからモンスターの脅威を排除する任を与えられた」
要救助者を三人。無事に確保した事もあって、改めて自己紹介をする。あの細目村長は『まぁ！　畏まってしまいまして！？』等と

大袈裟に、且つ斜め上の反応をしてくれたが。
「あらあら！　ヴォルちゃんってばナイト様みたいです！　カッコイイです！　ポーズとって言ってくれませんか？　『この剣に掛けて誓います』って！」
……見事に裏切られた。この女性もあの村長と同類か。思考がずれているのか、何と表せば良いのやら……。
「お姉ちゃん！　困らせちゃダメだよぅ！　ゴメンねヴォル君！　お姉ちゃんも悪気は無いんだよ？　ただね、久しぶりに会えたから嬉しいの。私もね」
久しぶり？　俺は彼女達に会った事があるのか？
「何処かで会った事があるか？」
俺の言葉に、二人は一瞬驚いたような顔をし、すぐに凄く悲しそうな顔をした。一方で小さいのは俺を睨み続けている。早速拙い事になったか。
「覚えて……いないの？」
「私たちのこと忘れちゃったんですか！？　あんなに一緒だったのに……」
「……」
呆然と力の無い言葉。ショックで泣きそうな雰囲気の言葉。刺々しい無言の視線。……針の筵（むしろ）とはこういうものか。息苦しくなってきた。
「取り敢えず回収班を呼ぶニャ！　狼煙を上げるから、そっちは後で宜しくニャ！」
トラとか呼ばれたアイルーが耐えられなくなったのか、枯れ木を集めつつ薬瓶を取り出した。
仕留めた獲物を回収する専門の連中を呼ぶ為の薬だ。焚き火の薪にあの薬品を塗って燃やすと蒼い煙が出る。これが回収の合図であり、これが上がればモンスターの体を乗せる為のリヤカーを引っ張った連中がそこへ駆けつけるようになっている。
問題を後回しにしているだけだが、少なくともこんな所でするよ

うな話ではない。トラからはそんな心遣いが感じられた。
話は後回しにして、俺達は仕留めたアオアシラとドスジャギィをリアカーに乗せて、ユクモへと戻った。その道中は無言であり、気まずい物があった。

「やい！　何だお前は？」
村に着くなり変な奴に絡まれた。
焦げた茶色の上を刈り込んだ男だ。金属の鎧を着ている辺りハンターなのだろう。その証拠に、背中には見覚えのある太刀を背負っている。アレはハンター達が用いる一般的な太刀だ。
「……」
「何とか言ったらどうだ？」
男がドスを効かせた声で言いつつ睨みを利かせた顔で見上げてくる。
「正太郎さん。この人は……」
「姫さんは黙っててくれや！　おうおう。何なんだお前？」
「ばか」
剣の少女が諌めようとするも男は聞きもせずに俺に突っかかるのを辞めない。それを小冬が小さい声で罵倒する。
「村長から聞いてないのか？　俺は……」
「名を名乗るのなら自分から名乗れと！？　おうよ！　名乗ってやろう！　俺の名は……」
鬱陶しい。斬り捨ててやろうか？
「この村の村長の従姉弟にしてこの村の門番！　ユクモに無双の刃ありといわれた男！　小野寺（おのでら）　正太郎（しょうたろう）だ！」
大袈裟な名乗りを上げる男を前に俺はどう対応していいのか分からず後にいある三人の少女達に視線を移す。
微笑ましく見ている者。困ったなぁ……と言わんばかりに苦笑し

ている者。眼中に無いと溜息混じりに明後日の方向を見る者。
どうやらこの男の奇行は日常茶飯事らしい。面倒な奴だ。
「さあ！　名を名乗れ！」
「……」
無性に、名前を言いたくない。そんな気持ちが俺を支配する。この殺意にも似た感情は何だろう？　最早関わり合いになりたくない。故に告げる言葉は一つ。
「退け」
「なにぃ？」
俺の言葉に男は大袈裟なほどに目を見開いて言った。
「もう一度言う。退け」
「ちょ、ちょっとヴォル君！」
剣の少女が前に出て来る。
「か、神無嬢！　いけねえ！　コイツは……」
「正太郎さんは黙ってて！　ヴォル君。ここは私達が言って置くから、村長さんの所へ行って。ね？」
俺はそんなに殺気立っていたか？　そう思わせるほどに、神無と言われた少女の言葉は必死だった。
彼女の背後に居る男に視線を向けると、奴は何処か悔しそうな顔で俺を見ていた。そんなに俺を庇われたのが気に入らないのか？
「まぁまぁ。正太郎さんも落ち着いて下さい。ヴォルちゃんもここはお姉さん達に任せて下さいね～」
「夏空さんまで！？　てめぇ！　一体何も……ふもっ！？」
火砲を持った女性まで神無に同意したのでいよいよ持って声を荒げようとした途端、奇声を発して崩れ落ちた。
男の背後には小冬が立っていた。木の棒を脇に放って居る辺りアレで奴を殴ったのだろう。
「行くわよ。時間の無駄」
小冬が辛辣な言葉を吐くと神無の腕を取って村へ入っていき、神無はされるがままに村へ入って行く。

夏空はそんな光景を全く気にしていないのか、妹二人を追って村に入っていく。どうやら見慣れた光景のようだ。
男は両手で股間を押さえて蹲り、呻き声を上げている。どうやらあの木の棒は股間を殴ったようだ。同情する気にもならんが。
俺もすぐにその男への興味は無かったので、村に上がる事にした。

「まぁ。早速腕の見せ所でしたわね？」
例の如く、売店前で団子と茶を喰っていた村長に、ヴォルフは事の次第を報告した。
救助要請を出した三人が無事に戻った時はホッと息を吐いていたものだが、すぐに報告という事に相成った。
「もう聞いていらっしゃると思いますが、ヴォル君がギルドから召喚したハンターですわ。今回の件は彼に一任する事になっていますが、貴女達も彼の力になって頂けると嬉しいですわ」
「勿論ですよ！」
「はい！」
「……」
三人がそれぞれ賛成する。小冬は頷いただけだったが。
「でも……」
夏空が顔を曇らせる。
「何か問題でも？」
「ヴォルちゃん、私達ノ事覚えてないらしいんですよぅ～。それがとても悲しくて……」
「うん」
「あらあら。ヴォルフさん。流石それはどうかと思いましてよ？まだ生まれてなかった小冬さんはとにかく、夏空さんと神無さんは貴方が小さい頃は家族ぐるみの付き合いで、ずっと一緒でしたのよ？」

糸目の村長が目を開いて、ヴォルフ諭すようにに語り掛けた。
「お母様が亡くなられてすぐに旅立ったときの貴方は三歳でしたわね？　無理もないとは思いますが、それでもこの子達のことは思い出して上げて下さい」
「ああ。努力する」
「そうですか。それでは、貴女達は一度着替えていらっしゃい。私はまだお話する事がありますし、貴女達は加工屋のおじじ様がお待ちでは無いですか？」
「あ、そういえば」
村長の言葉に、神無がポンと手を打った。
「倒したのはヴォルフさんですが、あれらは貴女達に所有権が移っていますからねえ。加工注文をしないといけませんわよ？」
「わかりました。ではまた後で～。ヴォルちゃん？　また後でね～」
「……またあとでね、ヴォル君」
「……」
「ああ」
三者三様にこの場を去っていく。内二人は血を浴びてしまっている為、身体を洗うのに時間が必要だという事はヴォルフにでも分かった。
「さて、ここからが本題でもあります。ハンターとしての貴方故人には関係ありませんが、ヴォルフ・ストラディスタとしては関係のあることですわ」
村長が不意に声を落としてヴォルフに話しかけてくる。先程の諭すような雰囲気よりも、今の彼女が纏う雰囲気は重苦しかった。
重要な話をすることを理解したヴォルフは、改めて村長に向き直った。
「実はあの娘たちは、両親を失っているのです」
村長から唐突に告げられた言葉に、ヴォルフは眉根を寄せた。
モンスターによって命を落とす者など珍しくは無い。それは誰であろうと例外は無い。

だが、先程出会ったばかりの者……正確にはこの村の出身者だろうが、長い事村を離れていたのだから余所者同然である……そんな話を聞かせる事に、ヴォルフは訝しんだ。
「貴方がこの村を、お父様に連れられて出て行ってから三年が経った頃の事ですわ。ちょうど小冬が一歳になるかどうかの頃ですわね。あの日の夜、救助信号の狼煙が上がりましてハンター数人が救助に駆けつけましたが、間に合いませんでした」
その間に合わなかった犠牲者が彼女達の両親なのだろう。
「現場は巨大な何かが暴れたかのような無残な有様で、犠牲者の遺体は手首と足首が片方ずつしか残っていませんでした」
ヴォルフは、その無残な事態は今更ながら見慣れていた。特に酷かったのはティガレックスの顎（あぎと）の餌食になった者や、フルフルに丸呑みにされながら消化途中に吐き出された者だ。小型鳥竜種の群れに喰われた方がまだマシなくらいだ。あの三姉妹の両親を襲ったのもそういう凶暴且つ凶悪な類なのだろう。
自分自身は生き残ってきたものの生き残れなかった者はその運命を辿る。遅いか早いかの違いでしかない。
「ただ、その場の近くでジンオウガの咆哮を聞いた者がいるのです」
ヴォルフの脳裏にあの碧の牙竜の姿がよぎった。あの誇り高い孤高の咆哮の持ち主……確かにアレとやり合えば死体なんて残る方が奇跡だろう。
「つまり、それはジンオウガの仕業だと？」
「確証はありませんが恐らくは……」
村長はそこでお茶を飲んで会話を止める。そして、ヴォルフにも別の湯飲みにお茶を注ぎ、先程食べられなかった薄桃、白、緑の三色団子を二本勧めてくる。
「それからあの娘達は三人で協力し合って生きてきました。村の者達も事情を理解しているので力になってきましたが……それでも、あの娘達の心を完全に癒すことなど出来なかったでしょう」
ヴォルフは団子の一個目を食べながら聞く。質素な甘さの有る独

特の甘味だと素直に思ったが、村長の話が正直言って重かった。
「そこへ数年前に届いた情報……風の知らせとでも言うのでしょうか……ギルドでこの村出身のハンターが史上最年少で上級ハンターの仲間入りを果たしたとの吉報が入りましてね」
そう言って村長はヴォルフをいつもの糸目ではなく、開いた……夜空のような澄んだ目で見た。
「貴方のことですよヴォルフ。その時のあの二人……夏空と神無の喜びようは見ているこっちが嬉しくなりましたわ。彼女達の喜びは貴方が上級ハンターになったからではなく、行方知れずとなっていた貴方の無事が確認出来た事に対する喜びですわ」
ヴォルフは急に理解した。あの時の彼女達が見せた喜びの意味……そして、自分が彼女達を覚えていなかった事に対する落胆の意味を。
生き残ることに必死すぎて前しか見ていなかった自分に対して、あの二人は両親を失いつつも自分の身を案じてくれていたのだ。
「貴方が旅立った当時、まだ生まれていなかった小冬は貴方の事を聞きハンターへの道を志しました。あの娘は対抗意識がお強いですからね。同じこの村出身の貴方に対抗して見たかったのでしょう。今まで一緒に生きてきた姉二人もまた、同じくハンターを志しました」
村長の言葉にヴォルフはお茶を飲みながら聞き続ける。猫舌の彼には少し熱かったが、飲めないほどではなかった。
「それで、俺にあの姉妹をどうして欲しいんだ？　鍛えろと？」
「あの時のように接して下されば幸いですわ」
村長は笑顔で答えた。ヴォルフは見かけに反して考えや人の気持ちが理解しきれていない部分が多分にある事を既に見抜いていた。これからあの三人やこの村の住人と接する事で、それらを身に付ければ良いと踏んでいた。
「覚えてもいない事をどうしろと？」
「家族として、少なくとも友人として接して頂ければ……」

そんな簡単に出来る物かとヴォルフは心の中で思ったが、口にはしない。生来口下手な自分には会話は不得手だ。余計な籔は突かないに限る。
「善処するとしよう」
「はい。宜しくお願い致しますわ」
村長はヴォルフの言葉にニッコリと笑った。
「そうそう。貴方の寝床の件はもう暫くお待ちくださいませ。手違いで手配が遅れてしまいまして……」
「最悪野宿で構わんよ。いつもの事だ」
ヴォルフはそう言うと最後の団子を食べ始めた。

「改めて自己紹介するね。私は四季上神無（しきがみかんな）。宜しくねヴォル君！」
服を普段着らしい黄色の着物に着替えた、茶色の髪を背中まで伸ばした少女が、満面の笑顔でヴォルフに自己紹介する。
普通の男なら『綺麗な娘』だな……と思うだろうが、生憎とヴォルフはその辺にとことん疎い。マトモな人付き合いなど皆無だった彼にとって他人など皆同じ顔に見えてしまう。個人の識別が可能なくらいだ。
「神無ちゃんの姉の夏空（そら）です。宜しくお願いしますね～ヴォルちゃん」
膝まで届く襟足の黒髪を、襟足で結んだ女性がおっとりした性格を思わせる、実にのんびりとして口調で自己紹介する。彼女もまた普段着らしい桃色の着物に着替えている。
姉というだけあって神無に似ているが、神無以上に物腰が穏やかそうな雰囲気だ。虫も殺せなさそうな感じだ。
「……三女の小冬（こふゆ）。宜しく」
腰まで届く柔らかそうな黒髪を両側頭部で縛った小柄な少女が自己紹介する。彼女は姉二人と違って着物ではない。フリルの付いた

柔らかそうな黒い服とスカートを着ている。
この少女も美人ではあるが、姉二人のように柔らかな雰囲気は無い。寧ろ硬質な雰囲気を持っている。
「ヴォルフ・ストラディスタだ。宜しく」
ヴォルフ自身は慣れていないので多少ぎこちなかったが、自己紹介する。
簡潔ではあったが、うち二人は嬉しかったのかニッコリと微笑み、後の一人は特に感慨が無いのか無表情だ。
村長のいた売店前で一旦別れたヴォルフたちは旅館前に集合していた。何でも、彼女達がこれから道案内してくれるらしい。
「えっと、まずはここね。温泉旅館。旅行や湯治目的に訪れるお客さんが泊まる場所なんだけど、ハンターギルドの集会場でもあるんだよ」
神無が目の前の大きな建物を指して言った。
ユクモは温泉による湯治を名物としている村だ。
神無の言葉通り、この建物は村長が女将を勤める温泉宿であり、ここがハンター達の集いの場である集会場も兼ねている。そこを中心として、雑貨屋や武器屋に加工屋、食料等を売る商店街が存在し、それらを囲むように住宅街が存在する。
村というよりは町と読んだ方が良い位の広さだ。
そんな説明を受けながら、四人は町を歩く。行く先々ですれ違う人々がヴォルフを珍しそうに見る。この村の住人たちと同じような服装はしていても、見覚えの無い顔は目に付くようだ。
そんな時に、威勢の良い老人の声が聞こえた。
「あう！　アオアシラにドスジャギィを倒すとはお前さん達も腕を上げたのう！」
子供程の背丈の、小柄な竜人と思わしき老人だ。大きな金槌を肩に担いでいる。その金槌は大の男が持てば様にはなるだろうが。こんな小柄な老人が持つには不釣合いだ。だが、彼はそれを掌の上で玩んでいた。恐ろしいほどの怪力だ。

「いえいえ。これは私達ではなく、ヴォルちゃんがやってくれた事で……」
「うん？」
老人は夏空の隣に立っていたヴォルフを見上げる。
「ほ！　これが件の上級ハンターかぃ！　あのちっこい小僧っ子がようもまぁでっかくなりよってからに！」
老人はそう嬉しそうにケラケラと笑ってみせる。ヴォルフの事を知っているようだ。
「アンタも俺を知っているのか？」
「あう！　お前さんたぁ話したこたぁ無ぇが、親父とならなぁ！　お前さん見てくれは母親似だが髪の色とかぁ背丈とかぁ親父に似たんだなぁ！」
老人そう言っては何処か遠くを見始める。過去を思い出しているんだろう。
「そういやぁお前さんはぁ今まで仕留めて来た獲物はどうしたん？」
要するに武器とか鎧に加工はしなかったのか？　と聞いているのだ。
「腕の良い加工やなんざそうそうお目に掛かれんよ。一応あるにはあったが破損して使い物にならなくなった」
「……なにやら相当まじぃモンとやりあったようだなぁ？」
老人は察したらしく、急に鋭くなった目でヴォルフを見る。上級ハンターのヴォルフが鎧を失ったほどの相手が如何なる者かを探っているような目だ。
周囲の三人娘は二人の間に生じた張り詰めた雰囲気に口を出せないようだ。
「しかしお前さん。変わった得物ぉ持っとるのぉ？」
会話がヴォルフが背負った刀に移った。ヴォルフの過去話には興味をなくしたのではなく、話さないだろうと察した為に話題を変えたのだ。
「片手剣でも太刀でもないなぁ？　太刀にしちゃあ刀身も柄も短す

ぎるし、片手剣にしちゃあ刀身が少しばかり長く柄も少しばかり長い。そりゃあ両手でも片手でも振るえるように作られとるのぉ。それはお前さんの異端剣術のためかのぉ？」
「……」
ヴォルフは無言で背負っていた刀を手に取り老人に差し出した。
老人は差し出された刀を恭しく受け取って鯉口を切った。
現れた刀身は老人の背丈よりも若干短い位だ。鏡のように磨き上げられた刀身は茜色の光を反射して老人の顔を照らしている。
刀身に描かれた刃紋は流麗。切っ先付近から鍔元近くまで彫られた溝は、寸分の狂いも無く見事に刀身の反りに合わせられている。
「見事な一振りよ。ワシもこれ程の物にお目に掛かるのは初めてじゃわい。良い物をもっとるじゃないかい。さぞや高名な鍛冶師が打ったのだろうな」
老人は刀を納めてヴォルフに差し出した。
「いや、これは古代遺跡で発掘したものだ。詳しくは話せんが、これは錆びる事も無く残っていたそうだ」
「古代遺跡？」
「ああ。親父が最後に探索した所だ。既に崩れてしまってどうにもならないそうだ」
「俺がハンターになった時に……親父は既に死んでいたが、親父が懇意にしていた鍛冶師がここまで仕上げてくれた。刀身だけだったらしくてな」
つまり、最初は柄も鍔も鞘も何も無かったのだ。
「ふむ。お前さんはその刀を大事にしておるようじゃなぁ。有名になっても慢心しておらん良い証拠になったわい！」
そう言って老人は満足そうにニヤリと笑う。
「その刀を打ち直すときはそれ相応のモンを持ってくるようになぁ！　ハンパなもんは逆に刀を鈍にするぞぃ」
ヴォルフはそんな事は百も承知と肩を竦めた。
「そういえば、俺が仕留めた奴はここにあるのか？」

「当然じゃ」
「あれで彼女達の武器防具を新調・改良してやってくれ。これから必要になる」
ヴォルフの言葉に三人は驚きの表情を浮かべ、老人はニンマリと笑う。
「その言葉を待っとったよぅ？　オオイ！　修理入っとったモンが改良に変わったぞい！」
老人が工房の中にいるらしい助手に大きな声で言い、工房からは複数の猫の声が響いた。どうやら助手はアイルー達のようだ。
「これも男の甲斐性かいぃ？」
「売却よりはマシな使い道だ」
対するヴォルフは老人の笑みに気づいた風も無くそっけなく答えた。
「では任せた」
ヴォルフはそう言って神無達に向かい合う……前に雑貨屋が視界に入ったらしく、そちらの品揃えを確かめに行った。
「前途多難よのォ？　しっかりせいや？」
老人はいやらしい笑みを浮かべて神無達三人に問いかけた。
「あらあらまあまあ」
と呑気に頬に手を当てるのは夏空。
「ちょっ！？　おじいちゃん！？」
急に話題を振られてあわてるのは神無。
「ふん」
興味無さ気に言いつつもヴォルフを横目で見るのは小冬。
三者三様の反応に、老人は愉快愉快と言わんばかりに笑い出した。
当の本人であるヴォルフはそんな事には気付かずに商品を見定めていた。

ユクモ村にて自己紹介と……（後書き）

いやはや長かった。活動報告にもありますが、余計なアクシデントは人の思考回路や精神に多大な負担を掛けるものです。

次回はもう少し早く更新出来ると良いなぁ……

ご感想お待ちしております。

人狼の忌み名

「やいやい！　見つけたぞお前！」
三人に村を案内してもらっている最中に、聞き覚えのある……忘れていたかった怒声が俺の耳に入った。あの小野寺とか言う鬱陶しい奴だ。
声のした方向を向くと金属の鎧を着た男が一人、俺の方へと荒々しい歩調で歩いてくる。周りの人達は驚いて道を開ける。
「さっきはよくもやってくれたな！？」
やったのは俺じゃないんだがな。
「今度は何の用だ？」
正直相手にもしたくなかったが、無視したら無視したであとが面倒な事になりそうだ。面倒事は早めに解決しておくに限る。
「俺はこの村の門番だ！　門番である以上、この村に知らん奴を入れる訳にはいかんのだ！　とりわけお前のような卑怯者はなぁ！」
……成る程、どうやら俺について理解させれば話は早いと言う訳か。ついでに誤解も解いておこうか。この村に滞在する以上、余計なトラブルは避けよう。
「ヴォルフ・ストラディスタ。ユクモ村村長の召喚に応じ馳せ参じた。ギルドの規定によって俺はユクモからモンスターの脅威を排除する任を与えられている」
「何ぃ！？」
俺が名乗ると小野寺は大袈裟に驚いてみせる。妙なリアクションをする男だ。
「ね？　正太郎さん。ヴォル君は怪しい人でも何でもないでしょ？」
先程まで加工屋の老人と話していた神無がやってきて正太郎に言う。加工屋の老人は老人で肩を竦めつつ、呆れたように首を振っている。
「しかし、神無嬢……」

「もぅ。ヴォルちゃんを困らせちゃあダメですよう？　ユクモには今日来たばかりなんですから。お姉さん、メッ！　てしちゃいますよ？」
　夏空が全く迫力のない声で言う。まるで子供をしつけているようだ。
「夏空さん……一応俺の方が年上なんだが……」
　成る程、要するにこの男は子供のように見られているわけか。
「フッ」
　俺の背後にいた小冬が鼻で笑う。明らかに馬鹿にした笑い方だ。
「あっ！？　てめぇ今鼻で笑いやがったな！？」
　そして俺は濡れ衣を着せられる。前回、奴が股間を木の棒で殴られた時と同じような状況だな。さて、どうするべきか？
「勝負してみれば？」
　俺が答える前に小冬が正太郎に言った。果たして吉と出るか凶と出るか……。
「勝負？　一体どんな方法で？」
　そこへすかさず食いつく正太郎。簡単に人の意見に耳を貸すこの男は一体何がしたいのだろうか？　事態が良い方向に向くなら俺はそれで構わんが、ややこしくなるのは勘弁して貰いたい。
「そう。アンタとヴォルフが一対一で勝負する。剣でね？　ただし、勝っても負けても遺恨なしよ」
　小冬はそんな事を挑発的な笑みを浮かべて正太郎に言った。
「ちょっ！？　小冬！？　そんな危な……」
「乗ったぜ小冬嬢！」
　神無が制止しようとするが、小冬にあっさりと乗せられた正太郎の大声がそれを遮ってしまう。
「さあ来い！　上級ハンターとやら！　今から決戦場に案内してやるわ！　臆病風吹かせて逃げても文句は言わんぜ？」
　正太郎が思い切り馬鹿にしたような顔付きで俺に言った。アイツ、事の事態を理解しているのか？

「ふっ」
小冬が俺を見てニヤリと笑う。明らかに楽しんでいるな……。
「ヴォル君……」
神無が心配そうな顔付きで話しかけてくる。
「安心しろ。怪我をするつもりも、させるつもりもない」
「ヴォルちゃん。ファイトですよ」
それを聞いた夏空がニッコリと笑って言う。
「気を付けてね？」
神無は相変わらず心配そうだったが、言われた以上は気を付けるとしよう。
さて、トラブルの代償はお前のプライドといこうか。ガラスのように砕いてやろう。

正太郎が案内した決戦場とは、ハンター達が普段訓練場として使っている広場だった。
周囲には山が広がり矢や銃弾、砲弾を放っても問題無い様な作りだ。ただし、『火気厳禁』の看板が立てられており、火矢と火炎弾や爆薬などの使用は禁止されているようだ。山火事を防止する為だ。
休憩場兼詰め所には怪我人の治療や武器の応急修理が出来るようになっており、今現在使用中のハンター達の武器が壁に立て掛けられている。
ヴォルフが来た時には見物人が十数人とおり、広場の中央には呼び出した当の本人が太刀を背負った背中を向けて仁王立ちしていた。
「良くぞ逃げなかったな！　その心意気だけは褒めてやる！」
そう言いながら振り返る正太郎の言葉を聞きながら、ヴォルフは彼の前に立つ。
ちょうど、正太郎の太刀の切っ先一尺の間合いの中だ。ヴォルフの刀では明らかに間合いが足りていないが、ヴォルフ自身には大し

た問題ではない。
「上級ハンターだか何だか知らんが、それがここでも通用すると思ったら大間違いだ！　お前の腐った性根はここで叩き直してくれる！」
言われも無い侮辱を聞き流しながら、ヴォルフは徐に口を開いた。
「目の敵にするのは結構だが、この勝負には全てを掛ける事だ。小冬の言葉、忘れたか？」
「ふん！　お前に言われるまでもないわ！　勝っても負けても遺恨なし！」
そう言って正太郎は背負っていた太刀を抜いた。彼の背丈よりも長い刀身は、夕日を反射して凶暴な光を放っている。
対するヴォルフは背負っていた刀を鞘に収めたまま左手で腰に固定し、左半身を引いて右手を柄に触れるか触れないかの位置に添えるように構える。居合いの構えだ。
「何だその構えは？　馬鹿にしているのか！？」
「怖気付いたか？」
「……っ！」
ヴォルフの挑発に耐えるくらいの我慢強さはあったようだ。周りに聞こえるくらいに大きな歯軋りをしながらも、見物人の一人を睨むように見た。
「号令を上げろ！」
怒声で命じられた男は肩を竦めつつ銅鑼の傍に行き、思い切り叩いた。
「いざ！　尋常に！　勝負！」
正太郎がそう言い終わって刀を最上段に振り上げ――――――た時にはヴォルフは彼の背後に立っていた。
僅かな鞘鳴りの音が響いた。
「な！？」
「遅い一太刀だ。その間俺は……」
刀を背負い直すヴォルフの言葉と共に僅かな金属音が響き――――

「五回は斬れる」
正太郎の太刀、兜、鎧、篭手、下穿きに切れ目が走り、それらは全て一斉に崩れ落ちた。
「あ……あ！？」
正太郎が鍔元から『斬られた』太刀を凝視して絞るような声を出す。
「……見えたか？」
「いや、何が起きたのかすら……」
数秒の後、周囲は爆発が起きたかのような歓声に包まれ、その中でインナーだけとなった正太郎は気を失って鎧の破片の中に崩れ落ち、ヴォルフは正太郎には一瞥すらせずにその場から立ち去った。
「……」
「嘘……」
「凄ぉいです～」
呆然とするのは小冬、愕然と声を漏らすことしか出来ないのは神無、何処かズレているのか単純に感心するのは夏空。
そんな三人に、ヴォルフは近づいて言った。
「待たせたな」
「あ、うん」
気後れした神無が返事をする。
「ヴォルちゃん。どうやったんですか？」
「切っただけだ」
「あんなに速く？　凄いです～」
相変わらず夏空は感心するだけだ。
「金属を切った？　なんて非常識」
「人を焚きつけておいて、それだけか？」
「あんたの実力が見たかった」
小冬がそっぽを向いて言った。ヴォルフはそれを聞いて軽く溜め息を吐いた。
「何よ？」

「ヴォル君。溜め息なんて吐いちゃダメだよ。幸せが逃げちゃうよ？」
溜め息を吐くヴォルフに神無が嗜めるように言う。
「そうなのか？」
「うん」
「気を付けよう」
ヴォルフのその言葉に神無は嬉しそうに微笑み、無視された小冬はヴォルフの方を向いた。
「何か文句があるの？」
「多過ぎるな……」
ヴォルフの言葉に小冬はムッとした顔になる。
そんな様子を夏空は微笑ましく見詰めていた。
「平和ですねぇ～。あ、そうそうヴォルちゃん？」
「ん？」
夏空が思い出したようにヴォルフに話しかけた。
「案内したいところがあるんです。一緒に来て下さい」
「ああ」
ヴォルフとしてはこれから特に用も無かったので、夏空の提案には乗ることにする。ただ、それ以上に夏空の言葉には有無を言わさない何かがあるのをヴォルフは感じ取っていた。断った所で無駄だと言う事も。

夏空に案内されたのは村の外れ……訓練所とは正反対の位置にある広い所だった。広いのだ。建物を建てるとしたら、一般的な民家なら何軒も立つだろう。だが、それだけの場所には何も無い。
否、何も無いということはない。周囲は木で囲まれ地面には苔が生い茂っており、井戸もある。
そして、石造りの小さな柱が無造作に何本も建てられていた。

「……ここは？」
「墓地です。ここには、この村で亡くなった方々のお墓があるんです」
夏空がそう言って先を歩いていき、振り返った。
「勿論、ヴォルちゃんのお母さんのお墓もありますよ」
その言葉を聴いたヴォルフは、頭を重い何かで殴られたような衝撃を受けた。
自分も人間なのだから母親がいるのは当然だ。だが、それは『知識として知っている』ような物だった。それが今、彼にとって得体の知れない感情となって胸の奥に重く圧し掛かってきた。
「さ、お母さんに挨拶しましょう？」
夏空がそう言って先に歩いていく。
「……ほら、行きなさいよ」
後ろに立っていた小冬が、しかし優しくヴォルフの背中を押した。そんな彼女の手には、いつの間にか色とりどりの花束が握られている。紙で包まれてはいない。ここに来るまでの道中で少しずつ集めたようだった。
「行こう？」
神無がヴォルフの前に出て振り返る。
その先では夏空が立ち止まってヴォルフを待っていた。
ヴォルフは何とも言いがたい感情に囚われた。今まで、母親の事を思ったことがあっただろうか？　町で小さな子供とその両親を見た時は、自分にもこんな時があっただろうか？　と思うことすらなかった。
両親……そう、父親の件もそうだ。父親が死亡した地が故郷ではなかった為に、その墓は狩人たちの共同墓地だ。その墓には父親が埋葬された時にしか行っていなかった事を今になって思い出した。
その事を思うと、何かが胸の奥に突き刺さる。この感情は一体何なのか……
いつの間にか、一つの墓石の前に立っていた。

神無が桶に入れた井戸水を柄杓で掬ってゆっくりと墓石に掛け、小冬が花を墓の左右に植えていた。
墓石には綾乃守陽真理（あやのかみひまり）と記されている。ヴォルフをそれを黙ってみていることしか出来なかった。
知らない名前だ。父親は母の事は話さなかった。話す事はいつも狩りの事ばかりだった。母が何故死んだのかすら知らないし、興味も沸かなかった。
「さ、ヴォルちゃん？」
「……」
ヴォルフは動かない。いや、動けないのだ。墓参りなどしたことが無い。父親が埋葬される時も、ただ立っていただけだ。
「……おばさま。ヴォルちゃんは、立派になって戻ってきましたよ。最年少の上級ハンターです。お母さんの願いとは違ったかもしれませんが、これからもヴォルちゃんを見守ってあげて下さい」
夏空が囁くように言って、両手を合わせる。彼女はヴォルフの母親のことを覚えているのだろう。同じく掌を合わせている神無も同じように覚えているのだろう。
当時まだ生まれていなかった小冬ですら、掌を合わせている。
その行為の意味が分からないから、ヴォルフにはそれが出来なかった。理解出来たのは自分の母親の名前。ただ、それだけだった。
ヴォルフは、墓の前で掌を合わせる三人の姿とその光景を、ただ見ている事しか出来なかった。

墓地から戻って来たヴォルフ達は、無言で村の道を歩いていた。
三人は何か言いたそうだったが、ヴォルフの出す雰囲気に押され

口を開くことが出来なかった。
「……少し外す」
「え？　ヴォルく……」
神無が、徐に告げられた言葉の意味を問い質す前に、ヴォルフは跳んでいた。一足で建物の屋根に上がると更に跳び、あっという間に姿をくらました。
「……何？」
「お姉ちゃん。もしかして、何か不味い事しちゃった？」
小首を傾げる小冬をよそに、神無が夏空に問いかける。
「……ヴォルちゃんには意味が無かったのかも知れません」
夏空が節目がちに言う。
「え？」
対する神無はその言葉の意味が分からなかったようだ。
「何となく雰囲気で分かりました。ヴォルちゃんは、ここが自分の居場所じゃないって思っているんだと」
「……どういう意味？」
「それは……」
「彼の忌み名に因る物でしょう」
小冬の問いに、夏空が言い辛そうに口を開いたが、その言葉は違うところから来た。すぐ傍にあった店から出てきた村長だ。何かを包んだ包み紙を抱えている。
「忌み名？」
「人狼。それが彼に付けられた物です。特定の縄張りを持たず、風のように雲のように流れ行くもの。そしてその先々で災厄を齎(もたら)す。あくまで噂程度ですが、彼はそれを自覚しているんでしょう」
「どういう意味なんですか！？」
「彼が行く先々で、強力なモンスターが現れるのですわ。そしてそれを退治するのも彼です」
現れるのは偶然だとしても、それは英雄ともいえる行動ではないのか？

「ですが、その度に多くの死傷者を出しているのですわ。そして彼だけが無傷か軽傷で済んでいるのです」
確かにそれは問題になる。他人を囮にしていると思われてもおかしくない。
「それはアイツの戦術に他人が付いて行けないんじゃない？　私もアイツに背中を任せる……なんて言われる自信が無い」
小冬の言葉は尤もだった。
「ええ。彼に付いていけるのは同格の上級ハンターでもやっとだと聞きます」
村長のその言葉に三人が一斉に村長を見る。皆一様に驚きを隠せない。
「獣染みた俊敏性。あまりに鋭すぎる太刀筋。それらを見た者の誰かが仰ったのですわ。『アイツは人間じゃない。獣……人狼だ』……と」
その強さの一端は彼女たち三姉妹は目撃している。
「そんな……」
「酷いです。ヴォルちゃんは優しい子なのに……」
神無と夏空は今にも泣きそうな顔になっている。
「嫉妬からくるその他諸々の余計なモノね。そこから来るモノがヴォルフに対する先入観となって、アイツの人格を見ようとしないのよ」
「その通りですわ」
小冬の言葉を村長が肯定する。
「確かにヴォルフさんはお強いですわ。ですがその強さの代償に他人との触れ合い方を学ばずに育ってしまったのでしょう。ですから、人に自分の心を見せられない。他人の心が理解出来ない。ヴォルフさんも自分を理解して貰おうとしなかったのでしょう」
故に人狼。人でありながら人ではない何か。理解する者も無く、自身の居場所も持たず、あても無くただ彷徨い刃を振るう者。
「ですが私は今回の件は、他でもないヴォルフ・ストラディスタに

依頼しました。それはこの村出身の彼にこの村を救って貰いたいのではありません。彼の居場所はここにある。そう、彼に伝えたいのです」

村長の言葉に、三人は俯いていた顔を上げた。

「ですから、皆でヴォルフさんを受け入れてあげましょう。あの子も戸惑うかもしれませんが、このユクモはあの子の故郷であり居場所なのだと教えてあげましょう」

村長はそう言って三人を見て微笑む。それを見た三人は大きく頷いた。

「なら、ヴォルフさんが帰って来るのをお待ちしましょう。彼の寝床の件も何とかなりそうですし。ね、夏空さん？」

急に話を振られた夏空は最初、目をパチクリとしていたが、村長の言葉の意味が分かったのかニッコリと満面の笑みを浮かべた。

「はい！」

『？』

二人のやり取りが理解出来ない神無と小冬は揃って小首を傾げた。

ヴォルフが姿を消してから数時間が経ち、更には黄昏が訪れて時が経っていた。もう数刻もすれば空には星が光り始め、月と共に地上を照らすだろう。だが、ヴォルフはまだ戻ってきてはいなかった。

ユクモ村の人々は既に、今日の終わりを迎える為に夕食など各々の準備を始めていた。神無も、普段ならば彼らと同じように夕食の準備をしている頃だ。

だが、今日は違った。外すと言って姿を眩ましたヴォルフがまだ戻ってきていないのだ。それで村の出入り口で彼の帰りを待っている。

しかし、村に入って来るのは薪を集めた樵（きこり）や行商人、湯治の客ばかりだった。

夏空は村長と何やら準備する為に、村長と共に村の何処かへと行った。小冬は読み掛けの本があるといって自宅に戻って行った。
あれから何時間が経ったのか、最早分からなくなってきている。大人しく夕御飯を作っておくべきだったか……様々な想いが彼女の頭の中を過ぎっていく。
今、彼を探しに森の中へ行くわけにはいかない。彼女たち三人は全ての武器防具を加工屋に預けてしまっているのだ。丸腰でモンスターの巣窟に行くなどとんでもない。言語道断だ。
「あれ？　神無じゃない。何やってるの？」
「の～？」
「え？」
モヤモヤと考え事をしているところで自分を呼ぶ声に我に返る。
そこには二人の少女がいた。
一人はカチューシャを付け、腰近くまで伸ばされた黒髪が印象的な小柄な少女だ。そのアーモンド形の瞳には強い光が宿っており、いかにも気の強そうな雰囲気を出している。
もう一人は彼女より少し背の高い少女だ。大きな丸眼鏡を掛けており、肩に付くくらいの長さの色素の抜けた綺麗な髪と、後頭部で結ばれた桃色のリボンが印象的だ。相方に比べておっとりした雰囲気をまとっている。
「梓に椿。戻ったの？」
神無の顔が、華が咲いたような笑顔になる。
「ええ。……戻って来たというよりは、また来たの方が正しいんだけどね」
カチューシャを付けた少女が答える。
「あ、そうだったね。今回はどうしたの梓？」
「湯治客の護衛でね。でも、しばらくはここでお世話になるかな？街まで降りた所ですぐに仕事が来るわけじゃないし」
カチューシャの少女が答える。梓というらしい。
「それで、ユクモで仕事を請けるのー」

眼鏡の少女が答える。こちらの少女が椿というらしい。
「そうなんだ。良かったらまた皆で行こうね」
「ええ。寧ろお願いしたいくらいよ。初級二人じゃ頼りないしね」
「私達もまだ初級なんだけど……」
梓が肩を竦めつつ言った言葉に苦笑しつつ、神無が答える。
「戦いは数だよー。二人だと追い返すので手一杯だもん」
椿がのんびりとした口調で言う。間延びした話し方は実に性格が現れている。
「五人もいればアオアシラでも何とかなると思うし……そういえば小野寺はどうしたの？　出くわす度に聞きたくも無い暑苦しい謳い文句を綴り上げるのに」
梓は本人がいないのを良い事に辛辣に話す。……普段からこうなのかもしれない。
「あはは。正太郎さんなら今伸びてるよ」
「伸び……？　え？　お餅みたいになっちゃたのー？」
神無が苦笑しつつ答えると、椿は的外れしまくった答えを口にする。脳裏で正太郎の五体が軟体のように伸びまくった姿を想像したのだろうか。
「違うわよ椿。気絶しちゃったって事よ」
「……残念」
そんなに文字通り『伸びてしまった』正太郎が見たかったのだろうか。椿は非常に残念そうな顔をする。
「今度はファンゴに頭突きでもされたの？　前回はお尻をどつかれたって聞いてるけど」
どうやら正太郎は以前、ファンゴに尻をどつかれて酷い目に遭ったらしく、それは今でも笑い種になっているらしい。その時の様子を思い出したのか、梓と椿が笑う。
「実はね……あっ！？」
尻に少しでも衝撃が伝わらないように前屈みになって歩く正太郎の姿を思い出したのか、神無が笑いをこらえながら答えようとして、

自分が何故ここに立っていたかを思い出す。
既に空は暗くなり始めている。悠長に話などしている場合ではない。神無は久しぶりに友人に会えた事で今の状況を見失うという、自分の迂闊さに真っ青になった。
「……ヴォル君！」
「！？　ちょっと神無落ち着いて！　着物のままで外に出ちゃ駄目よ！」
焦燥も露にそのまま村の外へ走り出そうとする神無を、梓は彼女の腰にしがみ付いて止める。
「放して！　ヴォル君が！」
「だったらまずは落ち着きなさいよ！　じゃないと出来る事も出来ないわよ！？」
「出来ないの～」
しがみ付く梓と前に出て道を塞いだ椿の言葉に、神無は我に返った。
「実はね……」
神無は幼馴染がユクモに戻って来た事と、彼が何かを気にして村を出たきり戻らないという事を二人に簡単に話した。
「……無謀ね。夜の山道は拙(まず)いってのに」
梓が既に黒いシルエットになりつつある森の入り口を睨みながら言う。
「で、あんた達は皆、装備を全て預けちゃったって？」
「うん」
「無理無茶無謀の三セット～あうっ！？」
「今から村のハンター……すぐに動ける人だけをを集めて。探しに行くのはそれからよ！」
呑気に言う椿にデコピンをしながら梓が答えた。隣で額を抑えて涙目になっている椿は無視するし知らない。
「うん！」
それを聞いた神無が嬉しそうに答えると集会場に向かって走り出

す。
「それと目的達成の号令信号も忘れないで！」
神無が振り向いて了解のサインを出すのを見届けた梓は、背負っていた武器を降ろし調子を確かめる。弓だ。矢の数や、液体の入った小瓶の中身も確かめる。
それを見た椿も背負っていた自分の武器を降ろした。鉄の塊に木の棒を差し込んだだけのそれは狩猟用ハンマーだ。突起部分を軽く小突いて確かめる。
「うん。大丈夫ぅー」
「こっちもよ。それにしても、一体何なのかしらね？　無理無茶無謀の三点セットを地でやってのけるお馬鹿さんは……」
「正太郎さんでもやらないー」
「あの人は口先の割には臆病だものね。でも……」
夜……モンスターが昼間より危険になる事は、朝になれば日が昇る事と同義な程の常識だ。それすら分からない者が生き残れる訳が無い。
だが、それを分かっていながらも自ら……それも単独でモンスターの巣窟に入り込む者とは一体何なのか……梓には想像も付かなかった。
「わぁ、綺麗なお月様ぁ～」
椿の言葉に釣られて空を見る。そこには見事すぎる真円を描いた満月があった。
「嫌な予感がするわね……何も無ければ良いんだけど……」
そう言いつつ、行動可能なハンター達十数人を率いて、自身も借りたのか予備なのかは不明だが、この村伝統の戦闘服を着た神無が戻ってくるの見た梓は、一人独白しながら弓を背負った。
隣で呑気に月を眺めている相方の楽観的過ぎる性格が、今は羨ましかった。

人狼の忌み名（後書き）

ようやく更新できました。
ヴォルフのあり方の描写を一体何度書き直したか……それでも上手く書けているかどうかは、正直言って自信がありませんが、如何でしたでしょうか？
また増えた登場人物。また女の子！？　何故に！？　ヴォルフと対を成せる男キャラも出したいのにぃ～。……当分先になりそう。

ご感想お待ちしております。

真夜中の遭遇。紅い曳光

夜の森は暗い。昼間ですら多くの木々が日光を遮り光を通さないのだから尚更だ。

月は雲に隠れ、僅かな光しか地上に齎(もたら)さない。しかし、そこには確固たる強い光があった。

炎だ。無造作に集められた木々が燃えてパチパチと爆ぜる音と共に、宙へ細かい火の粉が舞う。周囲を支配しているのはこの音と、焼ける肉の香ばしい匂いだ。

日も沈み夜となった山の中では、普通ならありえない光景だが、彼にとってはそうでもないらしい。

適当な石を椅子にして、ヴォルフは携帯用の肉焼きセットで肉を焼いていた。傍には頭を失ったガーグァが倒れ、片足を?(も)ぎ取られている。焼かれている肉はこれだろう。

この辺りには、ガーグァが多く生息している。家畜として人に飼われているものも多く、こうして食材にされることも多々ある。

場違いだが、ヴォルフの傍には黄金に輝く両手で抱えるほどの卵があった。これはガーグァが産んだ卵だ。

このガーグァ狩る際にその隣にいたガーグァが、首を失って倒れる同族に驚いて産み落としたのだ。通常の卵でもそれなりに栄養価があるというが、黄金だと更に上らしい。荷物にはなるが捨てるのもアレなのでヴォルフは持っている事にしたのだ。

今、ヴォルフが陣取ったのは木々が余り密集していない広場のような地帯で、昼間は日光が直接あたっているようで苔の類は生えておらず乾いた土が剥き出しになっている場所だ。

こういった開けた場所は、モンスターの襲撃があっても対処しやすい。森林を住処とするモンスターは、自身の姿を隠す遮蔽物である木々の合間から奇襲を仕掛けて来るものが殆どだからだ。

不意にヴォルフの鼻腔が僅かに動く。肉の焼ける物以外の臭いを

感じ取ったのだ。臭いの方向に目をやる。
炎の明かりに照らされた岩場には数匹の獣人がおり、ヴォルフの方へ近付いて来ていた。
アイルーの亜種であるメラルーだ。好奇心が旺盛なのは共通だがアイルーと違って手癖が悪く、旅人やハンターの荷物を掠め取るという悪癖がある。
それはヴォルフも理解しているので殺気を込めた視線を送る。それを感じ取ったのか、メラルー達の動きが変わった。硬直したと思うと、すぐさま脱兎の如く走り去って行く。関わったら怪我では済まないと本能が感じ取ったのだろう。
ヴォルフはそれを確認すると、肉焼き機のクランクハンドルを回す。何やら呑気な音楽が聞こえて来そうな雰囲気だ。
再び、ヴォルフがメラルーの臭いを捕らえる。臭いの方向には、一匹のメラルーがいた。その視線はヴォルフが焼いている肉と、調理中のヴォルフを交互に捉えている。
「……」
ヴォルフはたった今焼き上がった肉を肉焼き機から外すと、メラルーに差し出した。
肉を差し出されたメラルーは驚いてヴォルフをじっと見詰めていたが、少しずつゆっくりと近付いて肉に触れ、受け取る。
自分の四分の一に近いサイズの肉を両前足で器用に持ったメラルーは、後ろ足だけで歩いてその場を去った。その姿からヴォルフが視線を外したところで……
「上手に焼けましたにゃー」
と、メラルーが言葉を残して行った。
「……」
褒められたのかどうなのかイマイチ真意が理解出来なかったヴォルフは、ガーグァのもう片方の足を引き千切り、表面を短刀で簡単に処理してから肉焼き機に乗せて火に掛ける。
綾乃守陽真理（あやのかみひまり）……自分の母親の名前、墓地で手を合わせる神無た

ち、それらが頭の中から放れなかった。
あの三人の行為に何の意味も見出せない。自分と彼女達の間にある溝を意識せずにはいられない。
そんな自分があの村にいて良いのか？　自分にとっては故郷だがユクモは何も覚えていない見知らぬ土地だ。自分が覚えていないのに、他の人は自分を覚えている……幼少期の自分をだ。
自分があの頃の自分とは最早別人であることは言うまでも無いだろう。もしユクモから旅に出る事が無かったら、自分もあの場にいたのだろう。
同じユクモ村の人間として……。
それが今はどうだ？
死んだ父親が遺した古文書の剣技。独力での修練に明け暮れて数年を過ごした。
場所はこの大陸ではない山岳地帯だった。人里など皆無であり、モンスターは山ほどいた。最初の内は満足に刀を振るえず、逃げ回るのがやっとだったのを今も覚えている。
十歳を過ぎた頃には大体の剣技を身に付け、人里に下りてギルドに加わった。どうやら行方不明で死亡扱いだったらしい。ハンター間では良くあることだった。
そうして人々は目にする。あどけなさを残した少年が、大の大人ですら苦戦するモンスターを難なく斬り捨ててしまう光景を。少年はすぐに上級ハンターへと昇格した。
それは最初は人々を狂喜させた。だが、人々は次第に少年を疎んで行った。彼の強さに畏怖を抱いた者が出始め、それが次第に広がったからだ。
彼は居辛くなったその地を離れ、世界各地を彷徨(さまよ)った。だが何処に行っても変わらなかった。
行く先々で大型モンスターと遭遇し、これを掃討する。人々はこれに歓喜するものの、徐々に疎み始めていく。
それはヴォルフが強さを得た反動というべきか、他人とのコミュ

ニケーションに興味を持てなかった所が原因といえるだろう。
大勢が狩りに参加する中でヴォルフ自身は単独行動。話し掛けたと思えば、小さな指示をするだけだった。
それでも救援を聞けば必ず駆けつけたし、犠牲を最小にすべく常に最善を尽くしてきた。
それでも他人はヴォルフを疎んで行った。
強力なモンスターを狩れば狩るほど、そのモンスターを天敵、もしくは仇敵としていた別のモンスターが姿を現し、最悪の場合、別の地からもモンスターが現れる。
運の悪い事にそれが相次いだ。
決定打となったのは敗北した件だろう。
角竜と言われる飛竜種、ディアブロスとの戦いでヴォルフは敗北した。
原因はヴォルフではなかった。討伐に参加したハンター達がヴォルフを貶めようと、事前の打ち合わせにヴォルフを参加させた上で、打ち合わせ通りに動かなかったのだ。
そのハンター達は事もあろうに、ヴォルフを一人で戦わせディアブロスに殺させ、最悪相討ちにしようとしたのだ。
だが、ヴォルフは過去にディアブロスの亜種ともいえるモノブロスを単独で撃破したことがあった。
この時は遭遇した場所が遮蔽物が殆ど無い完全な平地だったので、遮蔽物の多い場所に誘導すべく仕切り直しを試みたのだ。
そして、引くことに成功した後に誘い込む場所を検討していたところで、ディアブロス特有の甲高い咆哮を耳にしたのだ。
まさかと思って駆けつけた先で目にしたのは、散らばる無数の死体と、逃げ回るのがやっとなハンター達。そして、怒り狂った番(つがい)のディアブロスだった。
ヴォルフが撤退して数分も経たない内に、ハンター達はよりにもよってディアブロスに見付かったのだ……事前情報には無かったもう一頭のディアブロスに。

片方は黒色の固体だった。繁殖期に入って凶暴化した雌のディアブロスは、警告色として自身の身体を黒色に変色させる。
繁殖期の番の縄張りに入り、怒りを買ったものの末路など哀れなものだった。
ある者は種を象徴する猛々しい二本の角に、胴を鎧ごと貫かれた上で両断されて血と内臓をばら撒き、ある者はその棘付き鈍器のような尾を叩き付けられて着用していた鎧に身体を破壊され、ある者は踏み付けられてその身を粉砕され……などなどと、二目と見られない無残な死に方をした。
それを見たヴォルフの決断は早かった。角笛を吹いて二頭のディアブロスの注意を引き付けた上で閃光弾で視界を遮断し、その隙に乗じて生き残りと共に撤退したのだ。
そして、生き残り組は何とか一人の脱落者も出さずに撤退には成功したものの、彼らはヴォルフに牙を剥いたのだ。
自分達でヴォルフを罠に嵌めようとして自滅も同然の醜態を晒し、そこをヴォルフに助けられたというのに、彼らは事の全ての責任をヴォルフに押し付けたのだ。
それはギルドでも問題となり、ギルドの上役や依頼主側から意見等よりギルドからの追放すら検討され始めた。
そんな中、ヴォルフを罠に嵌めた者達の中に居ながらも、彼に命を救われた事に恩義を感じていた者の一人が罪悪感から真実を公表したのだ。
ヴォルフ自身の身の潔白は証明されたわけだが、今度は彼らが追放処分を受けた。
その結果、彼等は真実を公表したハンターを裏切り者として報復に出た。しかし、ギルドの上役の一人がこの状況を見越し、ヴォルフに進言していたのだ。ギルドは警察ではない。警察組織である憲兵隊は事が起こらなければ動けないが故に。
そして待ち構えていたヴォルフに、彼らは一人残らず斬り捨てられた。

この件は彼らにこそ非があったとして、ヴォルフ自身は何の罪にも問われなかった。だが、これを期にますますヴォルフには嫌な噂が付き纏った。

人でありながら災厄を齎す者。それがヴォルフに付き纏った噂だった。

それはその後も続いた。

特に最後に味わった敗北は殊更に酷く、生き残ったのは撤退の邪魔になった鎧を棄てたヴォルフだけという有様だった。その原因となったモンスターはすぐに姿を消したようだが、ヴォルフに付いた噂はより酷い物となった。

いかなる災厄からも自分だけが生き残る。血に飢えた獣。関わったものは必ずその牙に身を砕かれる。

ヴォルフ・ストラディスタは人間じゃない。人の姿をしたモンスター……人狼だ。と仕舞いにはそう言われるほどになった。

人間でありながら人間を狩るモンスターとして……そしてモンスターでありながらモンスターを狩る者として『人狼』の忌み名を付けられ、烙印を押されたのだ。正真正銘の異端である。

この状況下でヴォルフは他人と接することを厭うようになっていった。一体何が自分をここまで貶めるのかが理解できなかった。

ヴォルフはそうしてモンスターの生息する危険地帯で生活するようになっていった。一人で剣を磨いていた幼少期に逆戻りしただけともいえたが。

そんな中、気まぐれで久々にギルドへ訪れたヴォルフには、覚えても居ない故郷からの召喚状が届いていた。

頼られたからには行くしかない、という考えはあったものの『生まれ故郷』という物に何処か引かれるものがあったのも事実だった。

そこで出会った幼少の自分を知る人物、幼馴染を名乗る二人の少女とその妹、そして、存在を今まで考えもしなかった母親とその墓。

墓に花を添え、膝を突いて手を合わせることの意味、その意味が理解できなかった。

それは、生物は死ねば土に返るという認識しかない自分が、知らない世界だった。それを見て思ったのだ。自分は結局、異端なのだと。

そんな自分が、あの村に居て良いのだろうか……それが分からないからこそ、ヴォルフはここに居る。このまま山中で生活し、仕事が入ったときのみ信号か何かで呼び出して貰うのも手だ。現に以前はそうしていた。

ただ、この地にはまだ慣れていない故により慎重さを求められる……

「？」

不意にヴォルフの嗅覚がこの地に似つかわしくない匂いを捕らえた。どこか暖かみを感じさせる物だ。

「ヴォル君！」

声と共に、神無が森の奥から見慣れない二人の少女を連れて姿を見せた。その内の一人、眼鏡を掛けた少女が炎が灯った松明を手にしている。

神無の服装は別れる前に着ていた着物でなく、サイズが少し小さいらしい防具と、使っていたものとは違う剣と盾を持っていた。

「ここに居たんだ。心配したんだよ？」

「……」

安堵の溜息混じりに話す神無に、ヴォルフは何を言うべきか分からなかった。

「ねぇ」

ヴォルフが黙っていると神無の後ろに居た、カチューシャを付けた少女が話しかけてくる。

「貴方、何をしているの？　言うべき事があるんじゃないの？」

少女はかなり怒っているようだ。今のヴォルフの行動がヴォルフ自身だけじゃなく、彼女達も危険に晒しているのだと糾弾している。

「……村に戻れ。俺はここでいい」

ヴォルフはそう言って調理中の肉に視線を移した。

「ちょっと！　質問に答えなさいよ！？」
カチューシャの少女、梓が苛立ちを隠しもせずに大きな声で言う。
「言葉通りの意味だ。用がある時には狼煙を上げてくれ。その時は村へ向かう」
「……それって、ここで生活するって事？」
「野宿はいつものことだ。村に戻れ神無」
ヴォルフがそう言うと、肉焼き機に土が掛けられ肉を焼いていた火が消される。ヴォルフの正面に立った梓の仕業だ。
「……何のつもりだ？」
「貴方こそ何のつもり？　人と話す時は相手に顔を見なさい。神無を見て話しなさいよ！」
顔を上げたヴォルフに梓が怒声を上げる。彼女の顔には隠しようの無い怒りが宿っていた。
梓の行為に苛立ちを覚えたヴォルフだが一理あったので、言われたとおりに神無を見ると、神無は悲しそうな顔でヴォルフを見ていた。
「私達ヴォル君に何かしちゃった？　だったら……」
「何もしていない」
「なら……何がダメなの？　どうして村にいられないの？」
「俺は人と触れ合えるようには出来ていない」
「何ソレ？　貴方、自分が何を言っているのか理解できているの？人は一人では生きていけないのよ？」
ヴォルフの言葉に、梓が呆れたような声を上げる。
「お墓参りの時に……何かあったんだね？」
神無の言葉にヴォルフは顔を顰（しか）めた。
「やっぱり、そうなんだ」
神無の言葉に、ヴォルフは何も言えなかった。
「……ヴォル君は、お墓参りの意味って知ってる？」
神無はややあって問いかけた。それは人を侮辱するには十分な言葉ともいえたが、彼女は聞かざるを得なかった。

「何の意味がある？　死ねば土に返るそれだけだ」
「なっ！？　アンタねえ！　人の命を何だと思ってるのよ！？」
ヴォルフの言葉に梓が今にも掴み掛からんばかりの勢いで声を荒げる。
「アンタは生まれてきた事に、自分のご先祖様に何の感謝もないの！？」
梓は更にヴォルフの外套の胸元の掴み上げて糾弾する。
「先祖に、感謝？　何だそれは？」
「……え？」
ヴォルフの言葉に、梓は力なく手を放した。今の言葉にショックを隠せないのか、愕然としている。
「神無ぁ？　この人って……」
椿が動揺して神無に尋ねようとするが、その言葉は途中で止まった。神無の表情が、今にも泣きそうなものだったからだ。
「ヴォル君、それは駄目だよ……悲しいよ。何が、どうしてヴォル君はそんな悲しい事を言うようになっちゃったの？　どうして……人狼なんて……」
『っ！？』
神無の言葉に梓だけでなく、神無の後ろで黙って話を聞いていた椿ですら目を見開いて驚愕を表情を浮かべる。
「えぇ！？」
「じん、ろう？」
二人はその言葉の意味を知っていたようだ。人狼の忌み名はここまで知れ渡っている事は、その悪評も付いて回っていることも意味する。
ヴォルフは相変わらず表情を変えない。あくまでいつもどおり感情を見せず、無表情に彼女達を見ていた。
「話が早い。俺に関わらん方が身の為だ」
それは、ヴォルフの今まで経験から言える言葉だった。
彼に関わった殆どの人物が命を落とすか、それに類する経験をし

ているのは紛れも無い事実だからだ。
「関係無いよ、ヴォル君」
その言葉を聴いたヴォルフは、神無を見た。悲しげな……しかし、優しい笑顔だった。
「人狼とか、そういうのは関係無いよ。ヴォル君はヴォル君だもん。だから……ユクモに帰ろう？　ヴォル君の故郷はユクモなんだよ？」
神無が言いながらヴォルフに右手を伸ばした。だが、ヴォルフは彼女の手を取らなかった。
「生まれた所は確かにユクモなのだろう。だが……最早俺に故郷など無い」
それは、自分には居場所が無いと言う事を意味する言葉だ。
「それは違うよ。故郷はね、ヴォル君が思ってるような悲しいものじゃないよ。故郷は、帰りを待ってる人がいるところの事なの。お姉ちゃんも小冬も村長さんも村の皆も、ヴォル君の帰りを待ってるよ。ヴォル君の居場所はユクモにちゃんとあるんだよ」
神無の言葉にヴォルフは言葉に詰まった。今までこんな言葉を言われた事があっただろうか？　否だ。
「私も皆も？今のヴォル君？の事は何も知らないよ。だから、これから分かり合えば良いの」
「……分かり、合う？」
神無の言葉がヴォルフの胸の奥に広がっていくのが、ヴォルフには何となく分かった。それは……ただ暖かかった。
「うん。そして助け合う。人はね、助け合って生きていくものなの。ヴォル君は強いから誰かに助けられることなんて無かったかもしれないけど、これからはユクモの皆がヴォル君を助けるよ」
神無のその言葉で、胸の奥にあった何かが消えていくのをヴォルフは感じ取っていた。
「俺を助ける……か」
ヴォルフがそう言いながら立ち上がり……梓を椿の方へ突き飛ばし、不意のことに梓は反応出来ずに椿諸共倒れ込み、ヴォルフは更

に神無を地面に押し倒した。
「ふえっ！？」
神無が間の抜けた声を上げる中、四人が立っていた所を大きな黒い影が猛烈な速さで通過し、突風じみた風が周囲の砂等を宙に巻き上げていく。
ヴォルフはすぐさま神無の上から、梓とぶつかった際に落としたらしい椿の松明を拾い上げて影が飛んでいった方向へと投じる。しかし投じられた松明はその影に弾かれて炎を失い、地面に叩き付けられた。
「っ痛ぅ……ちょっと貴方！　一体何を考えているのよ！？」
「……痛かったのは私だけど」
梓が立ち上がるなりヴォルフに怒鳴り、椿は小さく文句を言う。
「ヴォル君……何を……っ！？」
神無が起き上がりながら戸惑いを露にも問いただそうと声を掛けるが、ヴォルフの表情を見て言葉を失った。危機感を露にしているのだ。
「真っ二つにされなかっただけ運が良かったと思え」
「え？」
ヴォルフが呟くような言葉と共に、神無はそれを見た。椿と梓も確認したようだ。暗がりで輝く二つの紅い光を……
それは何かが動く音と共に尾を引いて怪しく輝いていた。
雲が動き月がその姿を露にすると共に、ヴォルフ達の前に存在する者の姿も月光によってその姿を晒していく。
「ひっ！」
「え……」
「そんな……」
その姿を目に捉えて怯えた声を上げるのは梓、唖然と声を出すのは椿、戦慄したのは神無……
「驚いた。この地は大物揃いだな」
ヴォルフは一人、その場で腰の刀に手を掛ける。

唸り声を上げていたそれが咆えた。獰猛さと凶悪さがその咆哮からも伝わってくる。アイルーなどの鳴き声に獣人に似てはいたが、声量も質も何もかもが桁違いの声は地面を小さく揺らしていた。
何処かアイルーに似た顔はしかし、鋭さを持った嘴（クチバシ）を持ち、その目は尾を引く紅い光を炎のように滾（たぎ）らせ、地に付いた四肢の前肢は前足と翼を兼ねている他、その側面には剣呑な黒光りする輝きを放つ刃が備わっていた。
「……ナルガクルガ」
椿が、呆然と目の前のモンスターの名を告げた。
森林地帯の飛竜種の代表格と言える危険極まりないモンスターだ。
ヴォルフが彼女達を些か乱暴な方法で地面に倒したのは、この迅竜とも呼ばれる森の死神から命を守る為だったのだ。
「下がっていろ」
ヴォルフが呟くように言いながら前に出ると、左手で持った鞘に納まったままの刀を腰の左側で固定して右半身を前に出しつつ右手を柄に添えるように構え、それに反応したナルガクルガがヴォルフに視線を定めて体を丸めた上で姿勢を低く構える。
ヴォルフはそれを見て大きく踏み込んだ。地響きでも起きたかのような音が周囲に響き渡ったと神無達が思った頃には、ヴォルフはナルガクルガに向けて疾走していた。音の正体はヴォルフが踏み込んだ際の音だ。その音からも表される爆発的な突進力を持って敵に迫る。
対するナルガクルガは真上に大きく跳ぶことでヴォルフを回避する。ヴォルフの行動から下した狩猟者としての判断だ。ヴォルフは急な事に行動を切り替えられず対処が遅れる。そこへ返す刀のように、急降下したナルガクルガの尾が轟音と共にヴォルフに叩き付けられた。大地が砕け、石や砂埃が宙を舞う。
「ヴォル君っ！？」
神無が声を上げるが、返事は無い。
しかし、ナルガクルガがその場からすぐに飛び退き、そこを白刃

の煌きが通過した。
ナルガクルガが尾を振り下ろすあの一瞬、ヴォルフは強引に倒れこんで地面に掌を当てて掌打を放ち、その反動で尾の範囲から逃れていたのだ。
刀をゆっくりと切っ先を前に向けた八双に構えるヴォルフをナルガクルガは静かに睨み続け、不意にその瞳の輝きが、より凶悪な光を発した。
軋むような音と共に尾の先端付近が開き、殺気を交えた咆哮を上げた。そしてナルガクルガは尾を天に向けると素早く振り払う。尾から何かが放たれた。
ヴォルフはそれを大きなバックステップで躱す。飛来したそれらが直撃した地面は周囲の土を巻き上げ、続いて放たれたものはヴォルフが付けた編み笠の半分を切断した上、後方の樹木の幹には深々と突き刺さった。
それは幼子の手ほどの大きさの、ナルガクルガの鱗が変化した鱗だった。その威力はまるで弾丸だ。直撃を被れば人の胴などトンネルが空いてしまう。
第三波が放たれるもヴォルフは紙一重で躱して一気に距離を詰め、その顔を目掛けて袈裟切りに斬り付ける。
『ギャウッ！？』
苦悶の声を上げつつも、ナルガクルガは鋭い犬歯がズラリと並んだ口を大きく開けるとヴォルフ目掛けて、その顎（あぎと）の餌食にせんと喰らい付く。しかしヴォルフは既に距離を開けていた為に空振りに終わった乾いた音が響き渡る。
ナルガクルガを斬り付ける際、あのまま更に距離を詰めて渾身の一撃を放ったところで致命傷を与えることが不可能と踏んだヴォルフは、敢えて浅く斬り付けていた。その結果次の行動へ移る際の隙が大きく軽減され、回避行動に移れたのだ。
切りつけられたナルガクルガの顔には斜めに走った傷があり、そこから血が鼻を伝って地面に流れ落ちていく。その目には傷を付け

られた事に対する怒りを語るかのように、紅い輝きが更に増していた。

「……嘘でしょ？」
「すごい……」
「……ヴォル君」
目の前の激闘。それは三人が知る狩りではなかった。
三人が知るものとは複数体、または単体のモンスターを何人もの人間が組織だって行うもので、何種類もの武器や罠、小道具などを多数用いるものだ。その様相はまさしく？狩り？である。
しかし、目の前で行われているそれは狩りなどではない。喩えるならば……戦いだ。
ナルガクルガの速さはとても人間が捉えられる速さとは思えなかった。常人にはその速さは残像しか捕らえられず反応できるかどうかも怪しいくらいだ。更に言えば、その双眸が放つ紅い光を見た時には既に命が無いと悟るだろう。
だがヴォルフは違った。ナルガクルガを五感を用いて常に捉え、その速さにも対応して戦っている。
上級ハンターの中でも異端とされ人狼と呼ばれるに至った者の実力とは、飛竜に引けも取らないほどの物なのか……。
梓は目の前の光景が信じられず、椿は純粋に双方の戦いに目を奪われ、神無は改めて見せ付けられるヴォルフの強さとそれを手にするに至った道筋に悲しんでいた。
ナルガクルガは未知の敵に対し戸惑いを隠せないようだった。最大の武器である速さと、主力である刃の翼を生かすことが出来ないのだから。

体格差による力は確実にこの飛竜が上回っているのは事実が、その体格差が仇となって人間業とは思えないほどの俊敏性を持っていて尚、小回りが利いて動きを捉えにくい目の前の敵に対し、有効打を決める事が出来ないのだから。

他にいる三人の人間を狙うのは愚策だ。それは同時にこの敵に背を向けることを意味するのだ。それを罠として必殺の機会を狙うのもありだが、能力が未知数の相手にこの不意打ちはリスクが大きいこともあるのだから。

しかし、焦っているのはヴォルフの方だった。

ナルガクルガとの遭遇は始めてである事もあるが、この飛竜の最大の武器である？速さ？に表面上はヴォルフは付いていっているように見えるかもしれないだろうが、如何にヴォルフといえど所詮は人間。スタミナ、体格差、力、行動範囲、等々、飛竜とはスペック差がありすぎるのだ。

今はナルガクルガが戸惑っていることに付け込んでいるに過ぎない。

更に言えば、決定打を打ち込む隙が無い。

特に厄介なのはあの翼と一体化した刃だ。あの刃の存在その物が邪魔で迂闊に近付くことが出来ない。まさに攻防一体といえる。

そしてこの飛竜が持つ飛び道具。性質上、そう何度も使用する事は出来ないだろうが、一度の発射で複数の矢が飛来するのは実に厄介だ。

適当に放っても数があれば当たる時は当たる上に、その威力は人間ならば即死級。どう足掻いても消耗戦で不利になっていくのはヴォルフなのだ。

それ以前に、ナルガクルガにこちらの動きを見切られたら確実に敗北する。この場合の敗北とは？死？を意味する。

「シャァァァァッ！」

ナルガクルガが犬歯を剥き出しにしつつ、後方へと飛び退いた。

更に置き土産とばかり尾から矢を放つことも忘れていない。

ヴォルフはそれらを回避しつつもナルガクルガを視界から外さない。姿勢を低くして躱した状態から目にした飛竜は、後方にある大樹を地面に見立てて後ろ足で？着地？するとヴォルフの死角となる別の木の影へと跳んだ。

「なにっ！？」

視界からナルガクルガを喪失したヴォルフは、あの黒い飛竜が動くことで鳴り続ける木々が軋んで揺れる音と葉が飛び散る音を頼りにその位置を探る。

「……」

ヴォルフは役立たずとなった編み笠の紐を解いて放り捨てた。金糸のような髪が風に煽られて流れた。

刀を鞘に収めて自身の五感に集中する。針が布を刺す音すらも聞き逃さないとばかりに。

不意に何かを強く叩く音が耳に入った。九時の方向の上方からだ。

「っ！？」

しかし、飛来したのは無数の木の枝だ。それでも一つ一つの体積が人の半身ほどと大きい。直撃を被ればダメージは負うし、下手をすれば体に突き刺さる無視出来ない物だ。何より服に引っ掛かって邪魔になるのが一番の問題だ。

続いて正面である十二時方向から大きな破砕音が響く。根元近くから切断された樹木がヴォルフ目掛けて倒壊してきた。樹齢百年単位の大きな木で幅はヴォルフ五人分よりも太い。下敷きになれば人間など潰れてしまう。

波状攻撃だ。無数の木の枝で行動範囲の制限を狙い、倒壊する木での直接打撃は木の枝を確実に当てる為の物だ。

「くっ！」

倒木に潰される前にヴォルフは倒れてくる木の範囲から下がり、身に着けていた外套を宙へ放って落ちてくる木の枝を少しでも減らす。

「ギィアアアアア！」

その直後、獰猛な咆哮と共に、ヴォルフの真上にナルガクルガが姿を現した。ヴォルフは尾を引く紅い一対の光を宿した飛竜が、その右翼の刃を振りかぶって急降下してくるのを視界に捉えた。
月光を反射して黒光りする刃がヴォルフを切り裂かんと風を切って迫る。
それはまさに森の死神と恐れられる者の所業だ。獲物の身体を容易に切り裂き命を奪い、その血で雨を降らせるもの。
ナルガクルガの翼が鋭い金属音を発して何かを切り裂いたことを周囲に伝える。その威力はその対象ごと大地を切り裂き周囲の塵などを宙へと撒き散らしたかに見えた。
だが、ナルガクルガの刃はヴォルフを捕らえてはいなかった。
直前に抜刀してナルガクルガの刃と自身の刀を交差させて、軌道を僅かに逸らす事で受け流したのだ。
それを見て、続けざまに放たれるナルガクルガの追撃は、無数の棘状の鱗が逆立って乱立し純粋な凶器と化した尾による薙ぎ払いだ。
「逆月、祖は血を注ぎし杯なり」
ヴォルフはそれを自身を旋回させるように跳んで躱し、尾と自分が交差する際にその刃を振るった。
月光を反射して描かれたその軌道は美しい弧を描き、刃によって描かれた弧は上半分を覆われた三日月……即ち逆月だった。
迸った血飛沫が宙を舞ってから落ちる様は、まさに逆月によって描かれた杯に注がれていくような光景だった。
「ギェアアアアン！」
尾を深々と切り裂かれたナルガクルガが苦悶の叫びを上げて地面に倒れ伏す。
尾はまだ切断されてはいなかったが、切り口からは夥しい量の血が流れ落ちている。
着地したヴォルフは追い討ちを放つ事無く、油断無く刀を構えてナルガクルガを見ている。
ややあってナルガクルガが起き上がった。ヴォルフが追撃を放っ

てこない事を理解したのだ。唸り声を上げながらヴォルフを睨むのは不意打ちに掛からなかった事に対する苛立ちゆえか……。
再び仕切り直しとなり、対峙する双方。疲労が見えてきたヴォルフと手傷を負ったナルガクルガ。果たして不利なのはどちらか……。

「ヴォル君……あれ？」
固唾を飲んで双方の戦いを見ていた神無だが、周囲の景色に違和感を覚えて声を漏らした。
「どうしたの神無？」
同じく、目の前の戦いに目を逸らせない梓が神無に話しかける。
「何か、変じゃない？」
「変って何が？　あのハンターの事？　それともナルガクルガ？」
「違うよ。何か、周りの雰囲気というか風景というか……」
「風景？」
神無の言葉に反応したのは椿だ。彼女は周囲を忙(せわ)しなく見回し……
「わぁ～綺麗ぃ～」
と、深刻な空気をぶち壊しにするような呑気な声を上げた。
「何がよ椿？」
加勢に出ても足を引っ張る危機感を覚え、かといってヴォルフを置いて帰ることも出来ずに苛立っていた梓はついつい声を荒げてしまう。
「ホラ。雷光虫が沢山」
椿はそう言ってウットリと周囲を見渡している。
彼女の言葉通り、無数の雷光虫が木々に、草むらに、花に、数える事を放棄したくなる程の数が集まっていた。
雷光虫とは、文字通り光る虫である。体内で電気を起こす性質を

持ち、集合して大きな一個の電球となったそれは稀に人間に襲い掛かることがあるという。絶縁体の嘴を持つガーグァが天敵とされる。
それが何の前兆も無く大量に出現した。森の景色を一変させるほどの数だ。
「……嫌な予感がする」
梓はその光景に目を奪われるどころか、背筋に寒気が走るほどの不吉な予感を覚えていた。

不意にナルガクルガが動きを止めて周囲を大きく見渡し始めた。その瞳は周りの景色……というより、無数の雷光虫を確認しているようだった。
「ギッ！」
ナルガクルガが小さく声を上げた。
その直後だった。
明滅する光を発しながら静止するか浮遊していた雷光虫が一斉に飛び上がった。
風のように舞う無数の雷光虫……その光景は幻想的で、神々しかった。
「……」
ヴォルフはその光景をナルガクルガへの警戒を弱めずに見ていた。
こんな光景は初めてだった。無数の雷光虫が大挙して宙を舞うなど、聞いたことが無かった。
突然ナルガクルガが屈んで姿勢を低くした途端に高く跳躍した。
「！？」

ヴォルフはナルガクルガが尾を叩き付けてきたあの一撃を思い出して身構えるが、ナルガクルガの姿は遠く、翼を広げて空を滑空して何処かへと姿を消した。
ヴォルフはその光景に違和感を覚えた。戦いはまだこれからだと言わんばかりに唸り声を上げていたナルガクルガが、急に戦線離脱するという事態。あまりにも唐突過ぎるこの状況が何を意味するのか……
それは、あのナルガクルガが速やかなる撤退を選択するほどの……
「くっ！？」
ヴォルフは刀を油断無く構えた。
それは即ち？天敵？の出現に他ならない。
雷光虫が一点に集中して始める。その光景は一言で言えば美しかった――――――大きな、重くて力強い足音が響いた。
しかし、同時に死出の旅へと誘うものの前兆に過ぎなかったのだ――――――――月夜の森の一角に、巨大なシルエットが姿を見せた。
『！？』
硬質的な金属音に似た音が響き渡り、閃光が走った。
「アウォォォォォォォォォン！」
咆哮が響き渡った。何処か哀しげな……それでも孤高の誇りを含んだ咆哮。
その直後、轟音と共に蒼い雷光が柱となって世界の色を文字通り変えた。

それが姿を現した。
森に屹立する白き光の柱の中に浮かぶ雄雄しい体躯。
荒々しくも優雅なその身に纏うは裁きの雷。
それは森の掟を守り、破りしものを悉く弾劾する。
この地を統べる王者の姿だった。

名を――――――ジンオウガという。

真夜中の遭遇。紅い曳光（後書き）

また一週間以内投稿失敗しました。
人間ドラマって難しいですね（何を今更）
ついに登場。ジンオウガ。ヴォルフたちの運命は！？

読み返したところ、自分で気に入らない所が多々あったので書き直しました。

ご感想、ご意見随時募集中です。
お持ちしております。

雷を纏いし森の王者

その雄大な姿を見たヴォルフは、この地を訪れる際の事を思い出していた。

勘が告げる。このジンオウガはあの時に遭遇したものと同じ個体だ。まだ一日と経っていないというのに、こうしてまた巡り会う事になるとは誰が想像し得ただろうか。

全身から放電現象を起こし稲光を纏っているジンオウガが、その碧い瞳をヴォルフに向ける。刀を鞘に収めたヴォルフもまた、その碧い瞳をジンオウガに向けていた。

互いの視線が交差する中、ヴォルフもジンオウガも互いに静止したまま動かなかった。

「ジン……オウガ」

「本当に、霊峰から降りてきたというの！？」

「初めて見た」

梓の言葉は尤もだった。

ジンオウガという種は、霊峰と呼ばれるユクモのある山の頂上とその付近に生息する。

そこは人間が住むには無理があるほど険しく、そのあまりの険しさはモンスター達も近付こうとしない場所だ。

ジンオウガは稀に狩りの為に霊峰から降りてくることがあるが、それでも人間が居る所までは降りてこないのが常だった。

例え遭遇したとしても、ジンオウガから人間に牙を剥くことは無い。

それはジンオウガが人肉を好まない事を理由にしていることもあ

るが、ジンオウガとはその強壮な姿に似つかわしくない程、争いを好まないのだ。
『威嚇して接近を拒む』『人間が攻撃、または狩りの邪魔をしない以上相手にすらしない』『縄張りを荒らした場合は襲い掛かってくるが、それでも縄張りから出れば追ってこない』というのがジンオウガという種だ。
だが、今のジンオウガは縄張りである霊峰を降り、ユクモ付近の山中を縄張りと定めつつある。
それが今のユクモに訪れている異常事態だ。
人里にまでは現れないだろうが、トラブルに巻き込んで刺激してしまえばどうなるか……それが正に今だとしたら。
「あ……ああ」
「神無？」
椿が神無の搾り出すような声に気付いた。
神無は両手で頭を守りながらジンオウガを凝視していた。だが、その目はジンオウガを映しては居ない。その目は焦点が合っていなかった。
「神無！？」
「どうしたの！？」
梓も異常に気付いて神無を揺さぶるが、神無は変わらない。しゃがみこんで頭を振るだけだった。
「やだ……やだよぅ」
「神無！　しっかりして！」
「ヴォル君が……また、またどっかに行っちゃうよっ！」
「え！？」
「また？」
錯乱した神無の言葉に、二人は尚も神無に呼びかけるが神無の様子は変わらない。
「椿」
「……うん」

梓は埒が明かないと踏んで梓に声を掛け、椿は彼女の言わんとしている事を理解したのか頷いて立ち上がる。
腰の後ろに固定してある鞄から、幾つもの道具を取り出して地面に置いて並べていく。
神無を腕に抱えた梓は、うわ言を呟き続ける神無に再び呼び掛けるが反応は無く、ヴォルフへ視線を移した。
ジンオウガとヴォルフの睨み合いは続いている。一触即発という言葉が実に相応しい光景だった。
「出来た」
声を聞いた梓はヴォルフとジンオウガから視線を外して梓の方を向く。
地面には紙で出来た筒状の物が空を向くように向けられて置かれ、椿の手には火の点いた線香が握られている。
「やりなさい！」
梓の言葉に頷いた椿はコクリと頷くと、持っていた線香を筒の根元から伸びた糸のような物に当てる。
火が点けられた糸状のそれは、火花を上げながら徐々に短くなっていく。これは発火の前の時間猶予を齎すための導火線だ。そして導火線が繋がれた筒状の物は……
椿が梓に近付き二人で神無を支えながら、筒から距離をとる。
数秒後に導火線は燃え尽きて火花が筒の中に入り込み、筒の中から炎の玉が空へ向かって打ち出された。
森の木々よりも高く飛んだそれは、腹に響くようなくぐもった音と共に破裂し、赤紫の大輪を空に咲かせた。花火だ。
増援を呼ぶ為の合図だ。決して観賞用のものではない。
だが、それは対峙していた一人と一頭を激突させる合図となってしまった。

空で救援信号が弾けるが、それを切っ掛けにジンオウガが突進してきた。
この状況下で花火型救援信号など、奴を刺激するだけだという事が分からんのか。素人め、引っ掻き回してくれる……
ジンオウガが突進しその発達した逞しい右の前足を持ち上げる。
速い。あの時よりも速度が増している！
俺は咄嗟に右に跳んで躱すのがやっとだった。凄まじい破砕音が周囲に響き渡ると共に、直撃地点の地面が砂塵と砕けた土と石を宙へと舞い上げた。
その威力に背筋が寒くなる。ナルガクルガの尾の一撃と同等か、それ以上だ。アレを仮に防げたとしても……無理だな。楯が壊れなくても人間が楯に潰されてしまう！
砂塵が張った煙幕の向こうには稲光が音を立てて走っている。次の瞬間に地面を叩く音と共に、煙幕を切り裂いて光る玉のような物が複数飛来してくる。
「くっ！？」
ナルガクルガの放った棘のような直線的な動きではない。不規則に動き回る正体の見えない物だ。数が多くて見切れない。
俺は咄嗟に明らかな範囲外とも言うべき地面に伏せて回避を試みた。
通り過ぎる際に羽音が聞こえた。アレは雷光虫か！？　輝きも重圧（プレッシャー）もまるで別物だ！
直後にジンオウガが動いた。再び前足で叩き潰そうと飛び掛ってくる。
地面を転がって回避するが、上を向いた時にはジンオウガの足の裏らしい太いが鋭く、それでありながら逞しい爪が剥き出しになったそれが眼前に迫ってきていた。二撃目だ！
俺は全身を駒のように回転させながら跳んで回避を試みた。
「ぐぁっ！」

しかし全身に激しい痛みが走った！　感電か！？
更には服が奴の爪に引っ掛かってしまい、そのまま地面に叩き付けられた。
「がぁぁっ！？」
咄嗟に頭は庇ったものの、前面の殆どを強打した。奴の足が地面を強打した際に吹き飛んだ石や砂塵までもが俺を傷つける。
それでも運はある。引っ張られたのはあくまで服だ。直に叩き付けられた訳じゃない。ましては奴の足と地面のサンドイッチにされたわけでもない……こっちは即死だな。
激痛を堪えて素早く起き上がりながら前方に跳んだ。ジンオウガは既に三撃目を繰り出していた。破砕音と共に衝撃波が発生し、これにバランスを狂わされて着地に失敗した。
「うぐっ！」
背中から地面に落ちたがまだ立てる。
激痛と感電による身体に痺れは全身に及び何処が痛いのか見当もつかないが、幸いにも骨を折ったりはしていないようだ。
刀も無事だ。まだ出来ることはある。
ジンオウガが俺を見ている。追撃を放ってこない辺り、コイツは他のモンスターとは違うのかもしれない。
奴の前足を見る。両方の前足は険しい山中を自由に駆け回るために進化したもののようで、非常に発達しているのが分かる。取り分け両側面……人間で言う薬指と小指は大きく広がり、湾曲した大きな鉤爪が伸びている。あの時回避し損ねたのはアレが原因か。
そういえばあいつ等はどうしたんだ？　逃げていればいいんだがな。手を出そうものならジンオウガの攻撃対象となる。
あいつ等……ナルガクルガに反応できなかったのなら、コイツには瞬殺される……それだけは避けたい。
足が震える……さっきの感電のショックか。それどころか、全身が痙攣（けいれん）するように震えている――――――だが。
鞘に収めたままの刀を左手で腰に固定しつつ、右半身を前に出し

て居合いの構えを取る。
……今の状態で大技が出せるか？　それ以前に……あの状態のアイツにどうやって斬り掛かれば良い？
意識が明滅し、吐き気がする。――――――まだだ。
ジンオウガはほぼ全身に稲光を纏っている。あの範囲に武器が入り込めば、電流が武器を介して俺自身を直撃する。
軽く触れただけでこの有様だ。あの飛来する雷光虫の直撃などどうなるか考えたくも無い。それどころか……奴はまだ全力を出してない。
勝機は無いに等しい。だが俺はまだ戦える。――――――それにしても会うのは久し……何だと？
「アウォオオオオオオオオオオン！」
余計な考えに身体が固まった瞬間にジンオウガが咆哮を上げ、気付いた時にはもう遅かった。
周囲の雷光虫が一斉に飛び立って俺とジンオウガの周囲を舞う。その光景はさながら光の吹雪のようだった。
その光景はあまりにも美しく――――――――ジンオウガが更に咆えて閃光が走った！
「ぐぁぁぁああ嗚呼ああああああああああああああああああああああああ！？」
全身を襲う痛みに目の前が真っ白になる。
気付いた時には、俺は地面に倒れ伏していた。全身を襲う痛みは最早無い。ただただ、苦しかった。
明滅する意識の中、ジンオウガがゆっくりと俺に近付いて来るのが分かった。

「……嘘」
「そんな……」
それはあっという間の出来事だった。
増援要請の信号が元で起こった双方の激突。
相手の攻撃をギリギリで躱すヴォルフが、お得意の撹乱戦術で相手を翻弄しつつ、隙を見た途端に抜刀してジンオウガすら斬ると思った。
しかし、ジンオウガは更に上手だった。
ヴォルフは反撃どころか、刀を抜く暇すらなく電撃を受けて倒れ伏した。今は地面に倒れて跳ねるようにと痙攣している。
「ヴォル君、ヴォル君！？」
神無が叫ぶがヴォルフは返事を返さない。
神無は今にもヴォルフのもとへ駆け出しそうだったが、そうれは同時にジンオウガの間合いに入ることを意味する。またあの電撃を放たれれば今度は神無までもが倒れることになる。梓はそれを理解して椿と一緒に彼女を抑えている。
その結果、ジンオウガは倒れて動かないヴォルフにゆっくりと近付いていく。
「あ……」
「ジンオウガが！？」
「ヴォル君！？」
ジンオウガから稲光の輝きが消えて無数の光玉がその身体から離れた。同時にジンオウガの身体の棘とも言うべき大きな殻が金属染みた重い音を立てて倒れる。
そしてヴォルフを眼前に見下ろす位置に立った。
ジンオウガは痙攣すらしなくなったヴォルフを、頭から生えた大きな角で仰向けに引っ繰り返した。
「……」
ヴォルフはまだ意識を保っていた。荒い呼吸を繰り返しながらも、ジンオウガを見返している。

「ヴォル君っ！」
「あっ！？」
「神無っ！？」
神無が二人を振り切ってヴォルフへと走った。
倒れたヴォルフを抱き起こそうとするも、力の抜けたヴォルフは重く持ち上がらない。
ヴォルフはヴォルフでジンオウガから視線を放さず、動こうともしない。
「ヴォル君……」
神無はヴォルフを腕に抱いてジンオウガを睨み付けた。ヴォルフを傷つけたこの竜が許せなかった。何故こんな事をしたのか問い詰めたかった。
ジンオウガはそんな二人を見ていたが、徐に視線を外すと背を向けて歩き始めた。
「え？」
神無の間の抜けたような声には反応せずに、森の王は歩を進める。
最後に一度振り返ってヴォルフを一瞥した後、森の王は走り去って行った。
その姿は王の威容に満ちていたが、同時に孤独を表しているようだった。
「神無！　無事！？」
梓と椿がヴォルフを抱えた神無に駆け寄る。
「……梓、椿。ヴォル君が……」
対する神無は大粒の涙を流しながら、小さな声で返しながら二人を見上げた。腕の中には意識を失ったヴォルフの姿があった。
「……ごめん。私……」
「……何も出来なかった」
梓と椿もそう言って力なくしゃがみこんで項垂れた。
その時、何かがこちらに近づく足音が響いてきた……複数だ。ジンオウガが去った方向とは逆だ。

梓と椿は思わず身構えたが、人の声が聞こえた。
「あ！　ギルドの皆！」
「良かった……椿、そこで神無達を見てて」
「うん」
梓が足音の聞こえる方向へ走っていき、数人のハンターと一緒に戻って来る。
「怪我人は誰だい？」
リーダー格と思われるハスキーな声の女性が神無と椿に尋ねた。
その声には緊張感が含んでいる。最悪の事態に備えた熟練者の声だった。
「この人……」
椿が神無の腕に抱えられたヴォルフを指して言う。
「二人は担架を用意。キミは一足先に戻って村長に連絡。キミは気付け薬を用意。さて、診せておくれ」
女性が膝を突いてヴォルフの頬に触れて、首筋、肩、腕、と掌を這わせていく。
「……何があったんだい？」
女性に訊かれ、椿と梓は顔を見合わせ、神無は力なく俯いて言った。
「ジンオウガと戦ったんです」
「雷を受けました」
それを聞いた女性はあからさまに顔を顰めた。
「……主な傷は打撲と切り傷。あとは感電による火傷。骨は折れてないな。大した打たれ強さだ。命に別状は無いよ」
女性がそういうと、神無の顔にようやく笑顔が浮かんだ。
「ありがとう。ありがとう。朱美さん」
涙交じりの声で神無が朱美と呼ばれた女性に言った。
「良かった」
「助かったのね」
梓と椿も安心したのか安堵の表情を浮かべている。

「何を安心してるんだ？　キミ達は反省しろ。私達の到着を待たなくても出来る事は山ほどあった。何故それが出来なかった？」
不意に朱美の口調が変わった。表情も先程のものより厳しい顔をしている。
「命の危機だったのだろう？　なのに何故キミ達は動けなかった？　出来る事はあっただろう？　薬の調合は無理でもその辺の木の枝と上着で簡易な担架位は作れた筈だ」
その厳しい言葉に三人は俯くことしか出来なかった。
「キミ達はまだハンターになってまだ日が浅いとはいえ、こんな調子じゃ死人が出る。身に刻んでおくように」
『はい』
「でも……」
不意に彼女の口調が優しいものに変わった。
「彼を見捨てなかったその心は正しかったよ。それを次に生かすと良い」
『はい！』
彼女の言葉に三人が返事をする。
「担架の準備できた」
「薬もだ」
他のハンター達が報告する。
「よし。じゃあまずはその兄ちゃんを担架に乗せるよ。イチニのサンでいくからね。それと神無、これに薬を染み込ませて飲ませてやりな」
朱美がそう言って小さな手拭いを神無に渡す。
「はい」
「それじゃあ行くよ！　アタシ達が運ぶから、椿と梓は前後警戒！　気を抜くんじゃないよ！」
こうして、意識を失ったままのヴォルフを乗せた担架を担いだ一行はユクモへと戻って行った。
その光景を、高所からジンオウガが見詰めていた。森の王は全身

に雷を纏い大きな咆哮を上げた。

雷を纏いし森の王者（後書き）

更新しました。
また遅くなってすみません。
敗北したヴォルフ。
去ったジンオウガ。
これからどうなって行くのか……。頑張ります。ハイ。

ご意見、ご感想、お待ちしております。

朝

夜も更けようとする頃。本来ならば殆どの人は眠りに就き、朝方までその身体を休めている頃だ。

だが今は違った。ユクモの村に怪我人が運ばれて来たからだ。

怪我人はギルド認定の上級ハンターであるヴォルフ・ストラディスタだ。この地方の頂点に立つモンスター、ジンオウガと戦った結果という事実は既に村中に広がっていた。

油の乗った行灯が薄明かりを照らす畳の間に敷かれた布団の上で、包帯で身体を巻かれたヴォルフは眠っていた。そんな彼を六つの人影が囲んでいる。

「村長さん。ヴォルちゃんは？」

「朱美さんからの報告通りですわ。命に別状はありません」

村長の言葉に、いつもの柔らかい笑顔が嘘のように焦燥しきっていた夏空の表情に安堵が浮かぶ。

「ジンオウガ……か。ヴォルフが負ける程強いもの？」

小冬が村長に尋ねる。無表情だがどうやらヴォルフが敗北した事実が信じられないようだ。

「ええ。報告では彼は刀を抜く暇すら与えられなかったと。ナルガクルガとの戦いの後の連戦という事もあったのかもしれませんが……」

村長はそう言いながら、ヴォルフの左手を見る。彼の左手は包帯を巻かれた胸元の上に置かれており、その手は刀が納まったままの鞘が握られていた。治療の邪魔だったので取ろうとしたのだが、握力が強すぎて放す事が出来なかったのだ。

「そう……」

小冬がヴォルフの掌から刀を取ろうとするが、その指はまるで固定されているかのようにビクともしない。

「邪魔」

そう呟くと共に小冬は鯉口を切ろうと柄に手を伸ばしたが、今度はそれに反応するかのように親指が鍔を押さえ込んでビクともしない。
「そんなにこの刀が大事？」
「小冬……」
神無が小冬を嗜める。
「それで村長さん。ジンオウガについてはどうするんですか？」
「今は何とも言えません。ジンオウガはヴォルフさんに止めを刺さなかった。これには意味があると私はみております」
梓の問いに対する言葉は回答になってはいなかったが、今は保留ということだろう。
「ジンオウガ強かった」
俯いていた椿が呟く。先程の戦いを思い出しているのだろう。その身体は少し震えていた。
「そうですわね。ですがそれだけではありませんわ。ジンオウガは賢い。人間の罠に掛かることがありませんし、奇襲を試みても逆に奇襲を掛けられるのが常だと聞いております」
村長が神妙な顔でいう。
「それって死角が無いって事じゃないですか」
「ですが、ジンオウガは人間を襲わないのが常でした。ヴォルフさんがこうなってしまった以上、今は様子見しかありません」
村長がそう言うと、その場が沈黙に包まれた。
「取り敢えず貴女達は今夜はお休みなさい。明日のことはまだ決まってすら居ませんが、休まなければ何も出来ませんわよ？」
「でも……」
「ヴォルフさんは私が看ておきます。大丈夫ですよ。」
村長の言葉に神無が何かを言おうとしたが、村長がそんな神無を嗜めるように言い、彼女は言葉が続かずに沈黙する。
「夏空さん。皆をお願いしますね？」
「はい」

年長者としての責任を果たせ、と言外に含まれている言葉に頷いた夏空は、神無と小冬を見回してから立ち上がる。
「梓さんと椿さんも」
「はい……」
梓はヴォルフを心配そうな顔つきで一瞥してから立ち上がり、椿もそれに続いて立ち上がった。
「神無ちゃん。小冬ちゃん。行きましょう？」
夏空の言葉に二人はしばらく動かなかったが、ゆっくりと立ち上がった。
「村長さん。ヴォル君を……」
「任せた」
「ええ。お任せください」
二人の言葉に村長は笑顔で頷き、それを確認した五人はこの部屋を後にした。

真夜中のユクモは月光にのみを明かりとし、普段は殆どが闇に包まれているが、今は複数の篝火（かがりび）が焚かれ村を薄く照らし出している。ジンオウガによる怪我人が出た為だ。
念の為ということで有志を募り、高台や道にハンター達が夜通し警備を当たることになった。その中にはアイルー達も混ざっている。
そんな中では神無たち五人は村の道を歩いていた。一行には会話が無い。
やがて終着地点が来た。ハンターギルドの詰め所となる集会場だ。ここに梓と椿は寝床を用意しているのだ。
「じゃあ、また明日ね」
「またね……」

「……うん」
梓と椿の言葉に神無は力なく返事を返した。
「神無。彼はきっと大丈夫よ」
しかし、そんな神無に梓は敢えてそう言った。
「そうですよ。ヴォルちゃんを信じてあげましょう」
梓の言葉に夏空が続いた。
「お姉ちゃん？」
「神無ちゃん？　ヴォルちゃんが良くなって欲しいのは皆一緒なんです。でもね、私達が沈んでいちゃダメなんだと思います。だから、皆でヴォルちゃんを信じてあげましょう」
「そう。まずは私達」
夏空の言葉に小冬も同意する。夏空はいつもの柔らかい笑顔を浮かべ、小冬もいつもの挑発的な笑みを浮かべる。
「そう、だよね。まずは私達が信じてあげないとね」
「明日には起きてるかもしれないしぃ」
「ぷっ！」
神無の言葉に椿が間延びした声で言うと、梓が思わず笑いを溢した。ありえると思ってしまったからだ。
「……そうなるといいね。神無」
それでも不謹慎と思ったのかばつが悪そうに言うと、神無は少し笑顔を取り戻していた。
「うん。じゃあ、また明日ね」
「またねぇ」
「はい、また明日」
「お休み」
「じゃあ」
神無の笑顔を確認した梓と椿は集会場へ入って行った。
「さて、私達も戻りましょうか。神無ちゃん。お風呂を沸かし直してあげますから入ってくださいね。小冬ちゃんは休んでも良いですよ」

外に出た神無の為にもう一度風呂を暖め直し、小冬に休息を促すのは夏空の姉としての優しさだ。
「神無と一緒に入る」
「あらあらまあまあ。それじゃあ私も」
「それだと狭くて入れないよう」
小冬の言葉に夏空が名案だと両手を合わせて言うが、流石に物理的に不可能なために神無に却下される。
「次回は私がやるから、その時に夏空は神無と入れば？　それともヴォルフと入る？」
小冬がニヤリと挑戦的な笑顔を浮かべ、神無は焦り、夏空はニッコリと微笑む。
「良いですねぇ。お姉さん、お背中流してあげますよう」
「ちょっ！？　ダメだよお姉ちゃん！」
三人はそんな会話をしながら帰路に就いた。先程までの暗い雰囲気は跡形も無く消えていた。

朝になり、目を覚ました神無は朝食の準備をしていた。今日の料理番は彼女だ。村伝統の汁物の出汁を取り具である野菜を刻みつつ、おかずの小魚の佃煮と漬物を皿に盛り付けていく。
「うん？」
ふと外が騒がしい事に気付いた。何やら慌しく人が通り過ぎていくような音が聞こえる。
「何かあったのかな？」
神無は小首を傾げながら台所を出て玄関に向かい、戸を開けようと手を伸ばしたところで戸は勝手に開いた。
「わっ！？」

「きゃっ！？」
神無は戸が勝手に開いたことに驚き、戸を開けた人物は開けた戸の向こうに人が居ると思っていなかったので驚いたようだ。
「あ、木葉（コノハ）ちゃん。どうしたのこんな朝から？」
木葉と呼ばれたその人物は、赤紫と黒の衣装に身を包んだハンターギルド所属の少女だ。ショートボブの黒髪に軽く吊り上がった意志の強そうな瞳が印象的だ。
しかし、今の彼女は平静さを失い見るからに慌てている。
「神無ちゃん！　あの人が！　昨日の怪我人が！？」
その言葉に神無は背筋が寒くなるのを感じた。昨日の怪我人といえばジンオウガと戦ったヴォルフしかいない。
「ヴォル君がどうしたの！？」
「実は……」

風が吹いた。
吹いた風に煽られて枝から千切れ飛んだ無数の枯葉が宙を舞う。
その全てを、弧を描く白刃が瞬く間もなく切り裂いた。
白刃を振るった者は半身を包帯で覆われていながらも、細身ながらその逞しい肉体からは怪我人であることを感じさせないほどに、活力に満ちていた。
風に靡かれて、金糸のような髪が流れるように舞う。
「駄目だな」
振るった刀を残心を持って鞘に収めつつ、ヴォルフは呟いた。どうやらジンオウガの電撃によるダメージは抜け切っていないらしい。ヴォルフは刀を振るったところでそれを理解した。
現に身体のあちこちに焼け付くような痛みが残る。狩場では傷の有無など構ってはいられないのだが今回のような大物を相手にする

場合、こんな痛みに気を取られるようでは致命的だ。
それでも戦えないことは無い。今までに負ってきた傷の中にはもっと酷いものすらあった。それに比べれば大した事は無い。
「ヴォル君！」
「ん？」
神無の声が耳に届いた。気付けば周囲には人が集まっている。
そんな中で着物の裾を押さえもせずに神無が走り寄って来るのが見えた。
ヴォルフはそれを見ると刀を鞘に収めた。
「ヴォル君……」
ヴォルフの前に来た神無は不安そうな、それでも安心したような、複雑な顔をしていた。
「……世話になったな」
「えっ？」
ヴォルフの突然の言葉に、神無は頭の中が真っ白になった。
「本当に助けられるとは思っても見なかった」
「あ、ううん。ヴォル君は大丈夫なの？」
若干慌てながらも、神無は気になっていた事を尋ねる。
「……問題は無いが、奴とはまだ戦えない。当分は休息か、他の狩りに出るしかないな」
「休息だよ！　今のヴォル君には休息が必要なの！」
急に神無が大きな声を上げた。
ヴォルフが改めて神無を見ると、彼女は今にも泣き出しそうだった。
「雷を受けたんだよ！？　皆も私も心配してた」
「……心配？　俺をか？」
「当たり前だよ！　ヴォル君が、また何処かに行っちゃうって思ったら……」
不意に神無の目が何処か遠くを見るような目になった。
「？　何の話をしている？」

「え？　だからヴォル君が心配だって……」
「……」
ヴォルフは神無に言えなくなった。この依頼が片付いたらまた宛も無い旅に出るつもりだとは。先程の神無の雰囲気にはそれを告げてはならない物があった。
「……そうだな。休息に当たる。他にも出来る事はあるだろう」
「他にも？」
「ああ。それはこれから考える」
ヴォルフがそう言うと、神無は安心したように胸を撫で下ろした。
「じゃあヴォル君早速なんだけど……」
「ん？　何かあるのか？」
目を逸らし、何か言い辛そうな神無だったがヴォルフはそれに気付かず、早速何か出来ることがあるのかと期待した。
「ちゃんと服を着ようね？」
神無の言葉にヴォルフは首を傾げつつ自分の身体を見た。
上半身は裸の上に包帯、下半身は袴だけという珍妙な服装だった。
「……何か変か？」
しかし、ヴォルフにはそれが分からず……
「変だよ！」
神無からの訂正が入った。
「もうっ！　確かお父さんの服があったからそれを着る事！」
「？　ああ」
ヴォルフは神無が何を怒っているのか理解出来ずに首を傾げると、神無はそんな彼の手を取って歩いていく。
彼女の手を払う気にはなれなかった。その手は柔らかく、暖かかったから。

「あらあら。少し、小さいですね」
神無に引っ張られるままに四季上家に着いたヴォルフを待っていたのは、夏空の叱責とと小冬の質問攻めだった。
殆ど神無に言われたことを夏空にも言われ、小冬にはナルガクルガやジンオウガについてと、ヴォルフが刀を手放そうとしなかった理由などを問われたが、服を用意した神無が割って入った為に中断することになった。
そしてヴォルフは今、彼女達の父親が来ていたという着物を着ている。薄い紺色で着古した感のある服だったが、そのぶん柔らかくて着易いものだった。
ただ、ヴォルフの身体はどうやら父親よりも大きいらしく、腕と足の裾が足りていなかった。
「着れれば問題ない」
ヴォルフはそう言うと刀を帯に差した。
「ヴォルちゃん？　家の中での帯刀はちょっと……」
「ここにモンスターはいないわよ？」
「俺はこれを手放さない」
視覚的に問題があるヴォルフの格好に、夏空と小冬が嗜めるように言うが、ヴォルフは簡潔にその言葉を拒絶した。
「……さっきは聞けなかったからもう一度訊くわ。どうして貴方は刀を手放さないの？　昨夜も、意識が無いのに手放そうとしなかった」
小冬がヴォルフを見定めるような目で尋ねる。
「俺の今までの生涯を共にしたのがこれだ。代わりは利かない」
彼女達は理解した。彼にとってその刀とは半身であり、人間以上に信頼されているものなのだと。
「皆、ご飯出来たよ！」
神無の声が台所から届く。
「はーい」

「分かった」
夏空と小冬が返事をするとヴォルフの腹から音が鳴った。その音があまりにも大きかったのが可笑しかったらしく、夏空が噴出した。
「そういえば、昨日から何も食ってないな」
「そうなんですか？　なら安心してください」
「神無、今日は張り切ってたから」
「ほう」
そう呟くや否や台所へとヴォルフは向かった。
「……そんなに空腹だったの？」
「そうみたいですね」
その速さはとても歩いただけとは思えないほど速かった。

『いただきまーす』
『……いただきます』
元気に言うのは神無と夏空、静かに言うのは小冬とヴォルフ。
長机に並ぶのは白米のご飯の他に、小魚の佃煮、村伝統の汁物、ガーグァの卵の出汁巻き卵、生野菜が沿えられた一口サイズに刻まれた焼肉、などなど。
「神無ちゃん、頑張りましたね」
「凄い量」
「えへへ、ちょっと張り切っちゃいました」
照れた神無が舌を小さく出していう。
「ヴォル君おいし……」
美味しい？　と神無は訊こうとしたが、聞くまでも無かったようだ。
ヴォルフは無言で、次々と口に入れている。食事に夢中のようだ。

「あ、箸は使えるんだ」
「ちょっと小冬？　ヴォル君をどんな風に思ってたの？」
「野生人」
「……」
あまりの言葉に神無は二の句が告げられない。事実、ヴォルフは殆どをモンスターが闊歩（かっぽ）する無人地帯で生活していた。野生人という言葉は当てはまっている。
「ん？　神無、この肉に掛かっている物は何だ？」
「あ、それは木豆から作ったタレでね、お肉に掛けると美味しいよ。煮た物にも焼いた物にも野菜にも合うの。食べてみて？」
ヴォルフはそれを聞くと、肉をタレに漬けて食べた。
一瞬固まるヴォルフだが、すぐに肉に添えられた生野菜をタレに漬けて食べ始める。どうやら気に入ったようだ。
「夢中になってますね。言葉よりも分かりやすいです」
夏空の言葉どおり、ヴォルフは言葉よりも行動で『美味しい』と言っていた。
神無は気に入って貰えたのが嬉しいらしく、ニコニコとヴォルフを見ている。
「神無、これは何だ？」
「それは出し巻き卵だよ。昨日ヴォル君が見つけた金の卵から作ったの」
ヴォルフは神無の言葉で、昨日仕留めたガーグァの隣に居たガーグァが驚いて落としていった卵を思い出した。
実はヴォルフを運ぶ際に、朱美の仲間の一人が見つけて回収しており、その人物によって先程届けられたのだ。流石にガーグァの焼きかけの肉と、調理器具は未回収のようだが。
「あれが？　卵の中身は……」
「それを獣乳と混ぜてから焼くとこうなるの」
「技術が必要」
神無の言葉に小冬が付け加える。専用の器具を使わずに、調理板

と箸だけでここまで見事な出し巻き卵を容易に作れてたまるか、とでも言いたげだった。
「俺は今まで卵の何が美味いのか知らなかった……」
一口食べたヴォルフが呟く。その顔は『馬鹿な！？』とでも言いたいかの如く、驚愕を現していた。
どうやら今まで生卵を食べていたらしい。それもその口ぶりからあまり好きではなかったらしい。
「えっと、ヴォル君？　今まで何を食べてきたの？」
神無が遠慮がちに尋ねる。
「無人地帯では木の実や茸に魚、仕留めた獲物の肉を焼くか干して食ってた。人里に下りた時にその地の料理は食っていた」
一応料理を食したことはあるようだが、普段はかなり偏った食生活だったようだ。
『……』
その惨状ともいえる物を聞いた三人は、何と言えば良いのか分からず沈黙する。
「ヴォルちゃん。これからは美味しい物を食べさせてあげますね。お姉ちゃん、頑張っちゃいます！」
「私も頑張るからねヴォル君！」
「……私はどうしようもないかな」
「そ、そうか」
三者三様の言葉でヴォルフを励ましにヴォルフはその勢いに押され、そう返すのがやっとだった。

朝（後書き）

ヴォルフ復活。
流石は野生人。タフだぜ！　そこに痺れる憧れるぅ～！
次話はあの人物が再登場する予定。そしてヴォルフの戦闘服が新調される予定（同じユクモですが）。

ご意見ご感想、随時募集中です。次回もよろしくお願いします。

不器用な言葉

「ふう」

ヴォルフは溜息と共に瓦の上に寝転んで、照りつける太陽を見る。

溜息を吐くと幸せが逃げる、と神無が言っていたのを思い出したが、中に当たる固くて凸凹（デコボコ）した感触が心地良いので、そうでもないと思った。

ヴォルフの溜息の原因は村長の謀略によるものだ。なんと、四季上家に居候する事になったのだ。

本来ならば旅館を兼ねている集会場を利用する筈だったのだが、気が付いたらこの事態だ。

ユクモに着いた時に村長が寝床について云々言っていた事が、まさかこんな事になるとは思っても見なかった事だ。

あの村長の嫌な笑顔――――――――満面の笑みだったがヴォルフとしては最悪だった――――――――を思い出すたびにウンザリする。

謀ったな、と思わず口にした時は『ええ、それはもう』と視線で答えられた時には途方に暮れるしかなかった。

そうして四季上家に改めて向かい、既に知っていたらしい三人に歓迎の挨拶をされて家中を案内された後に自室にと、二階にあった空室を与えられた。亡くなった父親の部屋だ。

亡くなった後も手入れをしつつそのままに保存されていたようで、十畳一間の実に綺麗な部屋だった。

窓を開ければ陽の光と良い風が入り、緑の多い庭が見渡せる。

しかし、ヴォルフはそれで良しとは出来なかった。かと言ってあの三人の厚意を無下には出来なかった。

ただ、人付き合いが苦手な自分をいきなり他人三人と同居させるというのは、暴挙も良い所だった。

「ヴォルくーん、入るよー？」

神無の声が聞こえ、戸が開く音が聞こえる。どうやら神無が入室

してきたようだ。
「あれ？　ヴォル君？」
神無がヴォルフを探す声が聞こえる。
「おかしいなぁ。下に降りて来てないと思ったのに……」
ヴォルフは起き上がると屋根瓦を割らないように端まで歩き、屋根から下りた。
「ここだ」
「え？」
神無がヴォルフの声につられて窓の外を見る。屋根からぶら下がったヴォルフが目に入った。
「ヴォ、ヴォル君！？」
神無の前で身体に身体を揺らして勢いを付けて部屋に入り込んだ。本来ならばひとっ跳びで入れたのだが、神無が何処に居るか分からないのに、そんな衝突の可能性を無視する訳にはいかなかった。
「ヴォル君？　屋根の上で何してたの？」
「寝ていた」
「お昼寝？　それならベッドがあるのに……ベッドあるのこの部屋だけなんだよ？」
「柔らかくて落ち着かない」
「？」
神無は不思議そうに小首を傾げてヴォルフを見ている。
「普段どんなところで寝ていたの？」
「木、岩、土」
今まで寝床にしていた物を思い出しつつ答えた。
「もう、硬いところで寝ると身体を痛めちゃうんだよ？　それに屋根の上なんてダメ！　落ちちゃったらどうするの？」
「あのデコボコは何気に気に入ってるんだが……」
「ダメだよ。せめて床で寝るの！」
「……」
ヴォルフは無言で足元を見る。食事部屋の畳とは違う板張りの床

だ。妥協できる範囲ではあるか。
「で、何の用で来た？」
「ヴォル君、何してるのかなって」
「……」
昼寝をしようと思っていた訳だが、その気はもう無い。そう思って窓の外へと目を向ける。
「ね、ちょっと出掛けない？」
「狩りか？」
「違うよ～。町に行くの。色々見て回ろうよ。それに加工屋のお爺ちゃんも心配してたんだよ？　顔見せに行こうよ」
ヴォルフの言葉に神無は苦笑しながら答えた。
「それに何か美味しそうなものがあるかも……」
「行くぞ」
神無が言い終わる前に、ヴォルフは戸を開けて部屋の外へと出ていた。
「……食いしん坊だなぁ」
そんなヴォルフに呆れつつも、そんな反応が何処か子供染みていてカワイイと思った神無は、部屋を出てヴォルフを追いかけた。

ユクモ村の商店街は多くの村民や村を訪れた人々で賑わっており、とてもモンスターによる危険が増したとは思えないほどだった。
そんな中で、俺は神無に案内された出店で昨日食べ損ねた串団子を食べていた。
ほんのりとした甘みと、餅特有の噛み応えが新鮮で実に美味しい。
桃色、白、緑と見た目でも楽しませてくれる上に、それぞれ味が違うというのも面白い。

俺は過去、これを食べたことがあったのだろうか？
「ヴォル君。そんなに気に入ったの？」
隣でお茶を飲んでいた神無が話しかけてくる。取り合えず待てと手で合図しながら飲み込んだ。
「ああ。無人地帯で甘味は蜂蜜や木の実位だったからな。人里に降りた時には色々と食べたが、これはそれらとは違う」
「どんな風に？」
神無が興味を持ったのか少し身を乗り出して尋ねて来る。
「……まず形が違ったな。細長い三角形で、専用のナイフとフォークで切り分けながら食べる物だった」
「ああ！　それケーキだよ！　良いなぁ……この辺りじゃ職人さんがいないから滅多に食べられないんだよ？」
そうだった。確かケーキとかいったな。見た目がやたらと派手で甘味が濃かったのを覚えている。でも美味かったな。
「神無は食べたことあるんだな？」
「うん。結構前に職人さんが湯治に来てね。だけどその人道中にお金落としちゃったみたいでね、それで宿泊費代わりに作ってたの。材料とか器具は持ってたみたいだけど、村にある釜戸が作成に適してなかったの」
それでどうやって作ったのだろうか？　俺の疑問が分かったのか、神無が何処か嬉しそうに笑う。
「それでね、釜戸をその人の為にって加工屋のお爺ちゃんが造っちゃったんだよ。ケーキ作りの為の専用の釜戸をね」
それは大したものだな。
「お爺ちゃんは昔外に出てた時に食べた事があったみたいでね。その為だけ張り切って造ったの。村の皆も職人さんも感激してた。材料も村の外からも頑張って揃えてね。最後は村の皆でケーキを食べた。本当に美味しかったなぁ」
神無の目が遠い。当時の事を思い出しているのだろう。
「あの時は小冬もお姉ちゃんも大騒ぎでね。欲張った小冬が一番食

べてた気がする」
まぁ、アイツらしいな。
「職人さんはその後暫く居たんだけど、やっぱり帰って行っちゃった。でもね――――」
神無が言葉を一度止めた。
「職人さんはまた来るって言ってた。今度来るときは自分の弟子を連れて来るか、それとも引っ越して来るかもって言ってた。ホントかどうかは分からないけどね」
そう、神無は楽しそうに語った。例え職人やその弟子が戻ってこなくても、神無はその思い出を大切にしているように見えた。
「……」
俺はそれに何て答えてやれば良いのか分からず、黙して団子を食べていた。
「お～い！」
遠くから声が聞こえた。聞き覚えの無い女の声だ。
声の方向からは、皮製の戦闘服を着た見知らぬ女がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。
「朱美さん！　ヴォル君。あの人がヴォル君を運んでくれたんだよ」
む、知らぬ内に貸し作っていたか。何にせよ助けられたことには感謝しよう。
「やあ。キミがヴォルフ・ストラディスタだね？　本当に目を覚ましているとはタフな男だね」
「アンタには助けられたようだな。感謝する。何れ何処かで恩を返そう」
俺の言葉に朱美という女は少しびっくりしたようだ。
「オイオイ。そんな事イチイチ気にしなさんな。あとこれ、キミの肉焼き道具」
彼女はそう言って、俺の肉焼きセットが入っているらしい革袋を差し出してくる。
受け取って中身を確認する。ご丁寧に綺麗に洗ってある。

「何から何まで悪いな」
「ん？　ああ、洗ったのはアタシじゃない。椿と梓だ。昨日、信号弾のせいでジンオウガと戦闘に入ったのを理解してたみたいでね。アタシが回収してきたのを見て、洗わしてくれと言ってきたんだ。少しでも詫びて置きたかったんだろうね」
……ああ、あの二人か。あの時、火を土で消したときは無礼な奴だとは思ったが、そうでもなかったようだな。あの時は俺も悪かったが。
「一応言っておくけど、焼きかけの肉と残ったガーグァは無理だったからね。昨夜のうちに消えてたよ」
「あの辺りにはメラルーがいた。器具が残っていただけでも僥倖だ」
肉焼きセットが入った袋を地面に置、茶を飲む。む、この苦味と渋味が何とも言えん美味さがある。この団子甘味と実に合う。
「そうそう。キミに訊きたかったんだけどさ？」
言葉と共に朱美の気配が鋭くなる。この女……この針で刺されるような感覚……小銃使いの狙撃手か。
「正太郎の奴に何してくれたんだい？」
朱美は完全に殺気立っている。その雰囲気に神無は戸惑いを隠せないようだ。
正太郎……ああ、あの門番か。
「勝負を挑まれたから受けて立った。それだけだ」
俺の言葉を聞いた朱美はあからさまに顔を顰めた。
「どんな負かし方らしたらあんなに落ち込んでるんだい？」
「身の程を思い知らせただけだが？」
「へえ？　じゃあ君自身は身の程を知っているのかな？」
「ああ。少なくとも奴よりは」
「見せてみなよ？」
そう言いつつ、朱美の右手がゆっくりと肩に水平になるように持ち上げられ、俺はその動きを封じる。
朱美の背中に掛けられた小銃を掴もうとする手を、抜き放った刀

を手首に添える事で止める。
「っ！？」
「ヴォル君！？」
「左手がナイフを握っているのも見抜いている。アンタも身の程が分かったか？」
神無が声を上げるがこの際だから無視する。余計な事に巻き込んだのは申し訳ないが、この女には理屈よりも身体で理解させるほうが手っ取り早い。
「……そういう事か。アイツじゃキミの足元にも及ばないな」
朱美は悔しそうだったが事の次第を理解したようだった。肝を冷やしたらしく、大きく息を吐いている。神無も隣でホッと息を吐いている。
「とんでもない速さと正確さだ。一体いつ抜いたのか見当も付かないよ」
そう言いつつ両手を下ろして負けを認める。
潔いな。どこぞの誰かとは大違いだ。
「それはそうとして、アイツを何とかしてくれないか？」
「何故俺が？」
唐突に出てきた言葉に思わず疑問が出てくる。
「アイツを打ち負かしたのはキミ」
「そうだ」
「ならアイツを立ち直らせるのもキミ」
「何故？」
意味が分からない。
「そりゃ男同士だし。自分を打ち負かした相手に手を差し伸べられるってのは屈辱だろうけど、それを切っ掛けに復活するかもだし」
……滅茶苦茶な理由だな。それともコイツは負けた腹いせに面倒ごとを押し付けたいのか？
「そんな訳で任せたよ」
「待て、勝手に決めるな」

「悪いね、これから出発するんだ。結構遠出になるからね。アタシにはあの馬鹿に構ってる余裕は無いんだ。じゃ、頼んだよ」
言うや否や走り去って行った。やれやれ、どうやらやるしかないようだな。
「ヴォル君？」
「仕方ない。奴に会いに行くとしよう」

団子屋で勘定を済ませて去るヴォルフと神無を、建物の影から朱美は観察していた。
身体は小刻みに震え、全身が冷や汗でベタベタになっている。先程、ヴォルフに刃を向けられた時の事が、彼女を恐怖に苛んでいる。
あの一瞬で、彼女の首は身体と別れていたかもしれないのだ。
「……人狼か。ま、問題を起こすような奴じゃあなさそうだね。だが……」
一度ヴォルフの隣を歩く神無の背を見る。ヴォルフに視線を向ければ恐らく気付かれるので、意識しての行為だ。
「アイツ自身が問題事の火種になるってのは、間違いなさそうだ」
そう呟いてから物陰から出た朱美は、集会場のほうへと歩いて行った。

ユクモ村には農場がある。
ここは村の農民が作物を育てる為の田畑があるだけじゃなく、ハンター達が狩りに使う道具となる物を栽培する所でもある。

現に、畑にいるのは鍬(くわ)を持つ農家の人間だけではなく、戦闘服を着たハンターが自身の植えた薬草などの栽培結果などの確認、更にはアイルーが主の変わりに田畑を耕し岩場を掘って功績などを探している。
また、農場は河川に面しており網に掛かった魚を引き上げる場面もあった。
この魚は食料となるばかりか、骨や鱗が弾丸や爆薬の部品に使えるなど、用途が多いものが多く獲れる。
そんな中で、作務衣姿で頭に手拭いを巻いた小野寺正太郎は、ぼんやりと空を眺めていた。
いつもなら村の入り口に立って門番を務めているのだが、今の彼にはそれを行う気力が無かった。それは――――――
「門番の仕事はどうした？」
見下ろすように立った金髪の男ヴォルフ・ストラディスタに昨日、完敗したからである。
「なっ！　てめぇ！？」
正太郎は飛び起きてヴォルフと距離を取る。
彼はは顔を引き攣らせてヴォルフを……性格には腰に差された刀を見ている。
背中に手を伸ばすが、肝心の太刀が存在しないことに愕然とする。当然だ。太刀は昨日、切られたばかりなのだから
「安心しろ。お前を斬る気は無い」
当の本人は腕を組んでつまらなそうに言う。
「じゃあ、何しに来やがった？　見下しにでも来たのかよ？」
「そんな暇も理由も無い」
溜息混じりに告げるヴォルフに掴みかかりそうになる正太郎だったが、ヴォルフの後ろには神無がいた。心配そうに様子を伺っているのが分かる。
「じゃあ何だよ？　何しに来たんだよ？」
「為すべき事を為せ。そう言いに来た」

正太郎はヴォルフの言葉に目を見開いた。だが、目を逸らして舌打ちする。
「辞めだ。門番なんざ、廃業だよ」
「何故だ？」
「ああ！？　決まってんだろ！　お前に負けちまったからに決まってんだろうが！　負けちまった門番に何の意味も無ぇ！」
正太郎は激昂し、勘定に任せて怒鳴り散らした。その剣幕に神無だけではなく、農場にいた全ての人間が驚いている。
「……本当にそう思っているのか？」
「ったりまえだ。弱くて門番なんざ勤まるかよ。ああ分かってたさ！　俺ぁ弱ぇよ！　狩りにだって怖くて行けねえよ！　だけど俺は生まれ育ったこの村が好きなんだ。だからせめて門番にもなって村を守りたかった！　口だけでも自分を少しでも強く保ちたかったよ！」
ヴォルフは黙って彼の言葉を聴き続ける。
「けど、それももう終わりだ。お前みたいなバケモンが来たなら、俺なんかいなくても村は平和だろうさ。俺に意味なんて無ぇ！　だから、俺にもう構うんじゃねえよ！」
正太郎はそう吐き捨てると共にヴォルフに背を向けて歩き始め――――――
「そうか。なら、時間の無駄だったな」
顔から地面に叩き付けられた。
「ヴォル君！？」
『！？』
神無や農場の人々が突然の事態に声を上げるが、ヴォルフは構わずに右手に握った正太郎の頭を地面に押し付け続ける。
「そうだな。お前の言うとおり、意味の無い者などいるだけ無駄だ。自害する気も無いのなら、せめて止めを刺してやろう。だが、楽に死ねると思うな？」
言葉と共に更に力が込められて指が頭に喰い込まんばかりに握り

締められ、額が更に地面に押し付けられる。このままでは頭蓋骨骨折で死に至るだろう。
「が！？　ぁぁぁぁっ！？　あああああああああああ！？」
正太郎は必死になってもがいた。死にたくなかった。今まで惨めな思いをひた隠しにして自分すらも誤魔化して生きてきたというのに、この仕打ちは何だ？　一体何が自分をここまで不幸にするのだ？
「ふッッッざ……けんな！　ふざけんじゃね……ぇぞ！　この、クソヤロウ！」
だから叫ぶ。あらん限りの憎しみを持って！　あらん限りの力を尽くして！　この暴挙を犯す男にせめて一矢報いる為に！
「それで良い」
静かな言葉と共に身体が大きく引っ張られ、頭の拘束が抜けた感覚と共に宙を舞うような不思議な感覚が正太郎を襲う。
「へ？」
そんな間の抜けた声を上げた直後、激痛と共に背中を土が擦る音が聞こえた。
「ぐぎゃ！？」
正太郎は頭を抑えつつに立ち上がると、こちらを見ているヴォルフを見据えた。
「てめえ！　一体何を……」
「俺が憎いか？　なら俺を倒せ。倒せないのなら、自身に誇れるお前になれ」
そう言ってヴォルフは正太郎に背を向ける。
「そんなお前自身になってみろ」
ヴォルフはそう言って去って行った。その光景を、正太郎を含めた全員が唖然と見詰めていた。
「何だよアイツ。訳わかんねえ……」
「……励ましてくれたんだと思いますよ～」
呆然とヴォルフの背中を見送っていた正太郎に、いつのまにか現れた夏空が話しかける。

「え？　どういうことなのお姉ちゃん？」
「夏空さん……なんでアイツが俺を励ますんで？」
正太郎と神無の言葉に、夏空はもう見えなくなったヴォルフの去った方向を見て言う。
「見ていられなくなったのだと思います。ヴォルちゃんは……詳しくは知りませんが、今までの人生をずっとモンスター達と戦いながら生きてきたのです」
「……」
「そんな人生を歩む中で、人と触れ合うことなく生きてきたんだと思うんです。ですから多分、人狼なんて呼ばれるようになったのだと……」
「人狼！？　アイツが！？」
正太郎が目を見開いて叫んだ。
「ヴォルちゃんは弱気になって絶望して、そこを付け込まれて死んだ人を多く見てきたんだと思います。だから見てられなくなって、せめて憎しみで正太郎さんを絶望から解き放とうと、あんな事をしたのでしょうね～」
乱暴過ぎますけど～、と夏空がそんなヴォルフの不器用な気遣いを締めくくった。
「そうなんだヴォル君。お姉ちゃん、よく気付けたね？　私、怖くてそんな事考えられなかった」
「あらあら、ヴォルちゃんはああ見えて優しい子なんですよ。神無ちゃんもまだまだです～」
自分自身の至らなさに不満な神無と、そんな神無を夏空は彼女の頭を撫でながらからかうことでその意識をそらす。
「もう。お姉ちゃん、普段ぽやぽやなのにこういう時だけはやけに的確なんだから……」
「お姉ちゃんですから」
逃げようとする神無だが、夏空の手は神無の逃げる先を知っているように神無の頭を撫で続ける。

「おっしゃあ！　なんかやる気出てきたゼ！」
と、先程まで黙っていた正太郎が地面を大きく踏み鳴らしながら叫ぶ。
「あ、あら？　正太郎さん？」
「ありがとうよ夏空さん。俺はもう少しでアイツを恨んでいた所だった。だが、これからは違う。俺はアイツに追いついてみせるゼ！　見てろよ好敵手（ライバル）！」
「そ、そう？　良かったね正太郎さん」
妙なテンションが爆発している正太郎を、神無は引きながらも言った。
「そうと決まりゃあ特訓だ！　だが、何をすれば良い？　どうすりゃ俺は強くなれる！？」
正太郎は頭を抱えつつ晴天の空を見上げ、問いを投げかける。
農場の人々がそれぞれの作業に移って行く。また正太郎が暴走を始めた事が分かったのだろう。
そうして夏空と神無に見守られている中で天を仰ぎ始めたところで……
「分かったァ！　アイツに剣を教われば早く強くなれる筈だ！　うおおおおおおおおおおおお！　ヴォルフ！　俺を強くしてくれええええええ！」
と、答えを見つけたのか、全速力で農場を走り去っていった。
「良いのかな。あれ？」
「た、多分大丈夫だと……」
盛大にドン引きした神無と夏空が、もう見えなくなった正太郎の去った方向をみて呟くように言った。
「成る程その手があった。正太郎如きに出し抜かれるとは不覚ね」
不意に沸いて出たかのように小冬がその姿を現して呟いた。
「私も教わろう」
小冬はそう言いつつ正太郎の去った方向へと歩き始め、夏空と神無に肩越しに振り向き――――

「お先に」
と言って農場を後にした。
「……」
「……」
夏空と神無は呆然とそれを見ていたが、お互いに顔を見合わせると――――――
「待ってぇええ！」
「お待ち下さいいいぃ！」
と、脱兎の如く駆け出した。
そんなこんなで二人が見えなくなった後、畑を耕していた初老の男が作業の手を休めて鍬（くわ）の柄で肩を叩きつつ――――――
「若いねえ」
そう、しみじみと呟いた。

不器用な言葉（後書き）

ようやくアップです。
お待たせしてしまった方には申し訳ありません。
最終は少々悪ノリが過ぎた気がしますが、如何でしたでしょうか？
ご感想、ご意見、随時募集中です。
お待ちしております。

修行と……

どうしてこうなった？

訓練所で各々の武器を構える『教え子達』の姿を見て、ヴォルフはそう思わずにいられなかった。

神無、夏空、小冬ならまだ分かる。なのに何故、梓と椿まで混じっているのだろうか？

ことの始まりは少し前だった。

正太郎の意識を少しでも変えようと、敢えてあんな事をしたヴォルフは農場を出てすぐに梓達に出くわしたのだ。

「あっ？」

自室に戻って昼寝でもしようかという所で、聞き覚えのある声が聞こえた。

そこには昨日の夜に神無と共に現れた二人の女ハンターがいた。それと見知らぬ……事も無いか、確かギルドの受付嬢だった少女も一緒だった。

ギルドの受付嬢は制服だったが、他の二人は私服らしい服を着ていた。

だが、俺から掛ける言葉も無ければ、特に用も無いので擦れ違うだけだ。

そこで、着物の背中部分を引っ張られた。

「何だ？」

振り向けば、眼鏡を掛けた方が俺の服を掴んだままじっと俺を見ている。

「……昨日は、ごめんなさい。私達が余計なことしたせいで……」

長い黒髪の方が消え入りそうな声で言い、服を掴んだままの眼鏡の方はコクコクと頷く。
昨日？……ああ、あの信号弾のことか。
「素人に良くあることだ。自分で気付けたのか？」
俺の言葉に二人は首を振る。違うのか。
「朱美さんに訊かれて、それで……」
朱美……あの小銃使いか。成る程、奴はこの二人に対してそれなりに強い影響力を持っているようだな。
「なら、この失敗を繰り返さないよう、次に生かすことだ」
これは俺も数多く繰り返してきたことだ。多くの挑戦と失敗を乗り越えて今の俺がある。
「生きていれば次がある。如何なる時もそれを忘れるな」
話は終わりだ。何にせよ早く身体を治さなければならないからな。家に戻って寝るとしよう。後事はそれからでも……
「ヴォオオオオオオオオオルウウゥフウウウウウウウウウウウ！」
と、何やら咆哮めいた叫びと共に、何かが土煙を上げながら近付いて来た。取り合えずぶつからない様に軌道から逸れる。
俺が退いた事によってソレは俺を通り過ぎて市場の方へ向かった。
「何今の？」
「……正太郎さんだったかな？」
二人が顔を見合わせて確認しているが、俺ははっきりと奴の顔を見ていた。何か異様な雰囲気を纏っていたが、一体奴に何があった？
と、市場の方から例の土煙を上げる何かが近付き、俺の前で急停止する。奴だ。湯気の上がる肩で大きく息をしながら、妙に血走った目で俺を見ている。
「……何用だ？」
取り合えず用件を訊く。こいつが先程の復讐をしに来たというのなら、望み通り相手になってやろう。
「ヴォルフっ！！」
裂帛とまではいかないが、村中に響くような大音声。……まるで

モンスターの咆哮だな。
俺の後ろに回りこんでいた少女二人は縮こまっており、如何にもこれから始まるであろう事を警戒……というより怯えている。
「俺をォ！　弟子にしてくれぇえええ！！」
……今、コイツは何と言った？　聞き間違いだと思うんだが、俺の弟子になりたいとか言ったような？
「今、何と言った？」
取り合えずもう一度訊く。
「俺を、おま……いや、アンタの弟子にしてくれ！」
と、地面に膝を突いて頭を下げる。
「……何のつもりだ？」
先程の件は奴に俺を憎むように、俺に怒りを向けるように仕向ける為の物だ。怒りは絶望よりはマシだ。少なくとも絶望よりはマシな方向性を指し示す。それが何故こんな結果を生んだ？
「どうもこうもねえ！　俺はアンタに対して無礼ばかり働いたってのに、アンタは俺を励ましてくれたじゃねえか！」
アレを励ましと受け取ると？
「それにアンタは言ったよな？　『自身に誇れるお前になれ』って。俺はなりたい。本当に自分自身を誇れるようなハンターに！」
成る程、ならまずはその為に力を得たいが故に、俺に教わろうと言う訳か。
「……断る」
「何で！？」
「生憎と、人に物を教える経験など無いんでな」
そう、俺は自分自身が学ぶことはあっても、人に物を教える事などやったことが無い。
「あら？　何事も経験だと思うけど？」
予想外の所から声が掛かる。俺の後ろにいた長い黒髪の女だ。
「人に教えると言う事は、自分自身がどれだけそれを理解しているのか……それを確認することにもなるのよ？　やってみる価値はあ

ると思うけど？」
「私もそう思う」
「おお！　梓が俺を初めて援護してくれた！」
「誰もアンタの援護なんてしてないわよ」
正太郎が大袈裟に喜び、梓と呼ばれた女は溜息混じり吐き捨てる。
一理あるか……。だが、コイツに俺の剣技を教えられるか？　まずは身体能力の基本から覚えさせる事から始まるのだが、身体その物を作り直すことになる。
そんな時間は無い。成長期が過ぎている分も含め、それだけで年単位の時間が掛かるだろう。体術抜きに振るえる剣技ではない。
武器の問題もある。ハンター達が用いる『太刀』ではこの剣を振るうには適していない。あの無駄に長い刀身では剣速が鈍る上に体術を犠牲にし、余計な物まで斬ってしまいかねない。それ相応の鍛え方もあるだろうが、余計に時間が掛かりすぎる。
それ以前に……付け焼刃の技術で即戦力などありえん。
「無理だ。お前に俺の剣は教えられない」
俺にはそう告げることしか出来なかった。
「ちょ！？　何だよそれ！？　俺はそんなに見込みが無いのか！？」
正太郎が声を荒げ、他の者達の視線も厳しいものに変わる。
「それ以前の問題だ。お前の目標は？」
「決まってるだろ！？　お前を超える！　その為にはまず、お前に追いつく！」
「なら諦めろ。俺はハンターであって教師じゃない。自力で何とかするんだな」
「何でだよ！？」
ここまで言ってまだ食い下がるか。
「15年だ」
「は？」
正太郎ではなく周りの者達まで唖然とする。
「少なくとも15年。俺は今までの人生を実戦と鍛錬に費やしてき

た。休憩代わりに書物を読み、それなりの知識を学んできた。それが俺の今までの生き方だ」
俺の言葉に正太郎の顔が驚愕のまま凍り付いていた。
俺の剣は、書物にある型をまずは鍛錬で身体に覚え込ませた上でモンスターとの数多くの実戦を得て、ようやく今の形にまで昇華した物だ。書物から剣を学んだとはいえ、実質的には我流に等しい。
「それだけの年月を過ごしてようやく今の俺がある。お前にそれが出来るか？」
勉学に勤しむ時間を割いても肉体造りから始めなければならない上、奴は今まで人生をどのように過ごしてきた？　俺とは違う。人の輪の中で生きてきた者が、死と隣り合わせの剣技だけに全てを掛ける等、出来やしない。
そう、都会の温室育ちがハンターを志し、最初の獲物と定めたモノに逆に殺されるか、今までとは全く違う環境に疲れて辞める、このパターンと同じようなものだ。
「つまりはそういうことだ」
「じゃあ、アンタと組めば話は違ってくるわね？」
立ち去ろうとする俺を引き止める者がいた。小冬だ。聞いていたのか……もとい、俺と組むだと？
「アンタが私達に自分の剣を教えられないことは言われるまでも無い。私達とアンタじゃ何もかもが違う」
「確かに」
小冬の言葉を梓と呼ばれた、長い黒髪の女が答える。
「でもアンタは私達を個別に鍛え、多人数での戦い方を教えることは出来る。誰に何が向いていて、誰に何が出来なくて、何処をどうすれば技をより強力に繰り出せるか、より効率的な運用方法とか、アンタは山のように知っている筈。今までの人生を通して、ね？」
成る程。何も俺の剣を教えるのではなく個々の今の戦闘力を、より強力な物にする為に力を貸せと言いたい訳か。
そして、こいつらは俺と違って単独ではない。一個の隊として機

能させることが出来る。ならば個人の戦闘力よりも複数であることを生かした集団戦の方がより効率性が増す。
「凄腕のハンターも、時として一頭の大物ではなく群れで動く小物に討ち取られる。それは『数の差』という、純粋な力に敗れたから。ならやることは一つでしょ？」
小冬があの挑戦的な顔でニヤリと微笑んでくる。その目が言っていた。「アンタにはそんな事すらも分からないの？」と。
下らん挑発だな。だが、小冬の言葉に俺は納得していた。俺と同等まで鍛えるのは不可能でも、集団戦で通じる程度まで鍛えるのなら少ない時間でも可能だ。
戦術次第で何とかなることもある。
それに梓だったか？　自分の技術を再確認しておくのも良いかも知れん。
「良いだろう。鍛えてやる。訓練所に来い」
俺がそう言うと正太郎は一瞬硬直したが……
「おっしゃー！」
と雄叫びを上げ、訓練所に向けて脱兎の如く走り出していた。
「あんなに渋っていた割にはすぐに切り替えたわね？」
梓が胡乱気な目で尋ねて来る。
「集団戦を念頭に入れた戦術と立ち回りを教えた方が、俺の剣を教えるよりは現実的だ」
「成る程ね」
俺の言葉に納得したようだ。隣の眼鏡を掛けた女も手を叩いて頷いている。
「ヴォルく～ん！」
「ん？」
神無と夏空が近付いて来た。
「正太郎さんを鍛えるって本当なんですかぁ？」
「ああ」
そういえば、訓練所は農場の道の分かれ目にあったな。そこで奴

に聞いたのか。
「俺は少し腹ごしらえをしてから向かう」
「え？　正太郎さん、訓練所に付いてる頃だよ？」
「時間を聞かなかった奴が悪い。言う暇も無かった」
だから軽く食事を取ってから向かう。奴の相手を勤めるには泳いでガノトトスから逃げる位の労力を伴いそうだからな。
「訓練所に用があるのなら奴に伝えておいてくれ」
俺はそう言って一行に背を向けて、適当に食事にありつける店を探し始めた。
……この時気付いておくべきだった。小冬が『計画通り』とばかりにほくそえんでいたことに。

食事を終えたヴォルフが訓練所に辿り付いてみれば、待っていたのは訓練用武器防具で完全武装した神無達だった。
待ち時間を有効に使っているのか各自で訓練を始めていたが、ヴォルフを見て全員が手を止めた。
正太郎は待ってましたとばかりにガッツポーズをし、神無は少し困った顔でヴォルフに微笑み、夏空は相変わらずの柔らかい微笑を向け、小冬はニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべる。
そしてそんな面々に並ぶように、同じく完全武装した椿と梓がいた。
どうしてこうなった？　ヴォルフは内心そう思った。厄介事がまた増えた。いつもの事とはいえ、ユクモに着任してから増えた気がするのは何故だろう？
しかし、現実からは目を背けられない。ヴォルフは気を取り直して梓と椿に話しかけた。

「……何故お前達まで？」
ヴォルフは嫌な予感を感じつつも尋ねた。
「私達も鍛えて貰えないかしら？」
「ついでに～」
ヴォルフは瞬時に誰の仕業か見抜き、犯人を見ると本人は――――
――――
「集団戦を主体とするなら、普段組んでる面子も一緒の方が良いでしょ？　私達が訓練を受けた後にその成果が差に出たら後が困るし」
と、尤もな正論を出してくれた。
理屈で断るのは不可能だ。こうなるとヴォルフは拒否する術を持たない。個人的な感情で断るのは気が引けるし、神無達に助けられた恩を裏切るのは流儀に反する。
本人達もその気のようだ。駆け出しの初級ハンターとはいえ、修羅場はくぐって来たようだ。そのやる気が大型とやりあうまで持てばいいのだが……とヴォルフは思った。
「良いだろう。ただし、手を抜く気は無い。覚悟は良いな？」
ヴォルフは集まった面々を気を込めた視線で見やる。
その狩猟者の目に約二名を除いた全員が怖気付くが、それでも全員が大きく頷いた。
「いいだろう。まずは……」
「着替えようねヴォル君？」
「む？」
ヴォルフが自分の言葉を遮った神無を不思議そうな顔で見る。
「それは部屋着なんだから訓練で汚しちゃダメですよう！」
今度は夏空からの抗議が来た。
「着替えなら用意したわ。更衣室に置いてあるから着替えて来て」
小冬が呆れたように溜息交じりで言った。更衣室はあっちと、休憩所も兼ねた建物を指差している。
「……」
出鼻を挫かれたヴォルフは溜息混じりに休憩所に入っていった。

小冬が笑いを堪え、神無が嗜める声が聞こえたが最早気にならなかった。
休憩所や男子更衣室には誰も居なかった。ただ、更衣室の机の上に、綺麗に折り畳まれた衣服が置かれていた。その隣には草で編まれた編み笠と革靴が置かれている。
ジンオウガとの戦闘で破損した服と同じものだ。どうやら、ヴォルフのサイズに合う物があったらしく、融通を利かせて貰ったようだ。
ヴォルフは着物を脱ぐとそれを一つずつ着用していく。
新品らしく、一つ一つの感触に硬さがあった。それは昨日まで来ていたものと同じだったが、それでも着ていく内に柔らかく慣れていくだろう。
着替え終わったヴォルフが外に出てみれば、それぞれが自主訓練に励んでいた。
神無は片手剣の基本の型を振るい、夏空とは火砲を的に向けて放ち、小冬は両手に握られた剣をイメージした敵を相手に振るい、梓は夏空と同じように弓を的へ向けて射ち、椿はハンマーで岩を叩き、正太郎は太刀を素振りしていた。
基本中の基本の訓練は自主訓練に任せれば良い者が殆どと言えた。特に夏空と梓は上手い。固定標的なら外す事が無いだろう。移動標的に対しては試してみないと分からないが、初級としては十分だった。
神無と小冬は未熟な面が目立った。特に小冬は体術がまだ不完全だ。二刀流という全身をフルに使う闘法である以上、機動力は必至だ。
それは片手剣を使う神無にも言える事だ。如何に楯があろうと防げない物は防げない。小さな危険回避や細かい事に有効だが、岩や大型種の体当たりなどの大きな物は避けるしかないからだ。
椿は細腕に似合わない見事な怪力と、それを制御する技術が評価できる。力任せに振るう以上、いい加減な狙いになりかねないハン

マーを的確に打ち込んでいる。彼女の場合は立ち回りを徹底して覚え、自身で考えて行動できるようになれば十分といえた。
そして事の原因となった正太郎は……ヴォルフは目を覆いたくなった。
先程から太刀を振るい続けている正太郎だが、彼は気付いているのだろうか……全く刃筋が立っていないことに。
太刀とはその精密な刀身故に、扱いその物にも精密さを要求される物だ。それが出来なければ切る事など不可能であり、最悪の場合、刀身が折れる。
コレでは何処から手を付ければ良いのか検討も付かない。よくアレで一年間のサバイバルを生き抜いたものである。
唐竹割りから逆風に切り上げ、逆袈裟に振り下ろす。しかし、その刃はまったく立てられていない。そんな太刀筋を見て思う。これが才能の無さというものか……と。
そして、左胴切りから柄を握りなおして突きへと変化する。
「む？」
その突きを見たヴォルフが眉根を寄せた。
「正太郎」
近付きながら声を掛ける。
「お、着替え終わったのか。始めようぜ。何からやれば良い？」
何やら張り切っている正太郎だったが、ヴォルフは難しい顔で正太郎を見ていた。
「ん？　どうしたよ？　何か変か？」
「突きを」
「は？」
「突きを撃って見せろ」
ヴォルフの言葉に正太郎は訝しみながらも突きを繰り出す。
「どうだ？」
「まだだ。もっと繰り返せ」
正太郎は言われた通りに刺突を繰り出した。右利きらしく、右肩

を引いた大きな突きだ。それを繰り返す。
ヴォルフは正太郎の周囲をゆっくりと回りながらその動きを観察する。
「なぁ？　そろそろ良いか？」
ヴォルフが一周した所で声を掛けた。
「今度は片手だけで繰り返せ。やり方は任せるが、同じ出し方はするな」
「は？　何だそりゃ？　どうしろと？」
正太郎が意味が分からないとでも言うように言う。
「突きとは一言に言っても様々な出し方があるだろう。それら全てを見せろ。ただし、片手でだ。利き手を使え」
「分かったよ」
正太郎は右手で刀の鍔元を持ち、突きを繰り出した。
腕の力だけで無造作に放つ突き。肩を引いて勢いよく突き出す突き。肩を大きく引き、腰の捻りと共に前に踏み出しながら放つ大きな突き。等々。
「もういい」
それら全てを見たヴォルフが止めるように言い、軽く息が上がったらしい正太郎は太刀を降ろしてヴォルフを見た。
「なぁ、一体何があったんだ？　突きだけなんて太刀じゃなくても出来るんだぜ？」
「その通りだ」
ヴォルフはそう言いながら正太郎から太刀を取った。奪い取ったのではなく、ごく自然にヴォルフの掌に収まっていた。
「へ？　ああっ！？」
当の本人は太刀を取られた事に気付かなかったようで、大袈裟に驚いた。
「ちょ！？　何だよ？　訓練が出来ねえじゃん。それとも何か良い見本でも見せてくれんのか？」
「お前は槍を使え」

ヴォルフはついでに取った鞘に太刀を収めながら言い放った。
ヴォルフの言葉に正太郎だけじゃなく、話を聞いていたらしい他の面々にも驚愕が走った。
「え？　な、何で？」
「お前の？突き？は見事な水平を描き、僅かな狂いも無い。故に槍だ」
「まっ、マジで？」
正太郎は信じられないとでも言うような顔でヴォルフに詰め寄る。
ヴォルフが見た正太郎の放つ突きは一分の狂いも無く鋭く、正確に、標的を文字通りに貫いていた。
「存分に生かせるように鍛えてやる。早く装備を持って来い」
「おおよ！」
正太郎が訓練用武器庫へと脱兎の如く駆け出していくのを尻目に、ヴォルフは訓練を止めている他の面々をみやると、小冬が近付いてきた。
「アイツ、そんなに才能あったの？」
「才能かどうかは知らん。だが見込みの無い剣術よりはマシだ」
「……やっぱり、アイツに剣はダメだったのね」
小冬が溜息混じりに呟くように言った。
「知っていたのか？」
「ううん。なんとなくそう思ってた」
小冬の言葉に、ヴォルフは彼女には直感か観察力の何れかに優れているのかもしれないと思った。
「で、アイツは大成しそう？」
「奴次第だ」
「そうなのヴォル君？」
訓練を止めて近付いて来た神無が尋ねて来た。
「どんな時も実るのは積み重ねてきた時間だ。訓練次第だ。怠れば身に付かない。付け焼刃など無いに等しい」
「……ヴォルフさんは、訓練してきたの～？」

おずおずと、椿が話し掛けてきた。眼鏡の奥の目は少し不安げに揺れており、緊張しているようにヴォルフには見えた。
「俺の剣は全て鍛錬に鍛錬を重ね、数多くの実戦を得て形にした物だ。生き抜く為には必要だった。怠っていれば死んでいた」
そういえば椿と話すのは初めてだったなとヴォルフは思った。
椿はそんなことを話すヴォルフを見て息を飲んだ。人狼と呼ばれる彼を形作っていた物は『強くなりたい』という壮絶なまでの思いそのものだと思い知った気がした。
「それでこうなったんですか？　鑢（やすり）みたいな掌です～」
いつの間にか近くに来ていた夏空がヴォルフの手を取って、その掌を自身の掌で擦っていた。
「何をしているんだ夏空？」
「ヴォルちゃんの掌を診てるんです。剣を握り続けるとこんなになっちゃうんですか……」
何処か悲しげに言う夏空だが……
「ちょっと！？　訓練するんじゃなかったんですか！？」
真面目に一人真面目に取り組んでいた梓が来て文句を言う。彼女はヴォルフの回りに人が集まりつつも、最後まで弓を射ていたようだったが、流石に我慢の限界が来たらしい。
「え？　あ、すみませんつい。でも、そろそろヴォルちゃんが個別に教えてくれるんですよね？　なら丁度良いじゃないですか？」
「確かにそうですけど、切り上げるなら仰って下さい。私、夏空さんと競ってたつもりだったんですから」
梓の拗ねたような言葉に夏空はまあ、と驚いた。
「そうだったんですか？　それは済みません。それで、結果はどうでした？」
「夏空さんが切り上げる前までは同点ですね。私の矢と夏空さんの砲弾では範囲が違いすぎますから、当てた的の数だけで数えてましたから」
「成る程、梓ちゃんもやりますね？」

「夏空さんこそ……」
夏空は無邪気な笑みを、梓は少し挑戦的な笑みを浮かべた。
「次は勝ちます！」
「あら？　お姉さんもまだ負けませんよ～？」
と、互いにライバル意識を剥き出しにする。梓は挑戦的な笑みをより強くしおり、夏空は無邪気な笑顔ながらも、対抗心が雰囲気として出ていた。
「コレが好敵手（ライバル）……」
「もう二人とも、競争するのは良いけど、喧嘩しちゃダメだよ？」
「だよ～」
小冬や神無が二人を嗜める中で、ヴォルフは梓と夏空が張り合う相手がいることによって技術の向上が早まるのでは？　と何となく予感した。
「ヴォルフ～。持って来たぞ～！」
と、正太郎が新たな武器を持ってこちらに向かって来ていた。
正太郎が持っているのは槍だ。そしてその背には、半身を丸々覆い隠せるほどの大きな楯が背負われている。
「まずは構えてみろ」
正太郎が近くまで来たところでヴォルフは言い、正太郎は頷くと槍と楯を構えようとし……楯を取り落とした。
「うお！？」
大きな楯がガランと音を立てて地面に転がる。正太郎は取り落とした時には既に距離を取っていた為に足の上に落とすという、最悪の結果を招かずには済んだようだ。落としていたら、骨折では済まないだろう。
「……まずは素早く、確実に構えられるように訓練するんだ。それを確実に自分の物にしてから次に進む」
「え？　マジで！？」
「当たり前だ。槍使いの基本は守り。目の前に大型が迫ってくる中で確実に構えなければならない。出来なければ死ぬだけだ」

「うう。分かったよ」
ヴォルフの言葉に正太郎は渋々と距離を取り、構えたり収めたり……を繰り返し始める。
「各自、もう一度元の訓練を再開してくれ。まずは何処まで出来るかを確認する」
「はーい」
「うん。わかった」
「もう一度勝負しましょう？」
「はい～」
神無と椿は素直に訓練に向かい、夏空と梓は訓練を通り越して勝負事に発展しまずは的の設置に向かった。
「……」
「……」
そして、じっとヴォルフを見上げる小冬だけが残った。
「どうした？」
ヴォルフの問いに対し小冬が答えたのは、予想も付かない言葉だった。
「手合わせして」

修行と……（後書き）

お待たせいたしました。
また一週間失敗です。
この分だと次回もかな……いい加減に週一更新に固定したい所です。
でわでわ。
ご感想をお待ちしております。

訓練模様

「手合わせして」
その言葉で、文字通り時が凍り付いた。のほほんとした笑みを崩さない夏空ですらも呆然と硬直している。
正太郎は何かを言おうとしていたが、酸素不足の魚のように口をぱくぱくと動かすのが精一杯だった。
「……正気か？」
ややあってから、ヴォルフが口を開いた。その視線は厳しく小冬の覚悟を試しているかのようだ。
「何も本気でやって欲しい訳じゃないわ。今の私じゃ瞬きする暇も無く負ける」
小冬は冷静にヴォルフの目を見詰め返した。そこにあるのは、あくまでも純粋な気持ちだった。
「今の私の実力を正確に見るには一番の方法でしょうし」
細かい部分を省けば確かにその通りだ。
「それが理由」
小冬はそう言いながら背負っていた二刀を抜いた。
左半身を前に出し、右手を頭上に、左手を腰より前に出し、二刀の切っ先が交差するような構えだ。
「それとも、何処かのヘタレみたいに『女の子に傷を付けたくない』とでも言うつもり？」
小冬がいつもの調子に戻って挑戦的にニヤリと笑う。
「良いだろう」
ヴォルフは腰に差していた刀帯から抜くと背中に背負った。鞘から紐を伸ばして刀を背負いつつ紐を胸元で縛る。
そして、正太郎が持っていた太刀を抜いた。
しかし、太刀本体の方を地面に突き刺すと、鉄製の鞘を刀のように持って構えた。

「……何のつもり？」
「安心して全力を出せるだろう？　万が一にも死ぬことは無い」
ヴォルフの言葉に小冬の笑みが崩れ、無表情になった。しかし、目つきは鋭くなっている。挑発つもりが逆に挑発されて、小冬は逆上していた。
ヴォルフはいつも通り無表情だったが、彼が表情豊かなら小冬と同じようにニヤリと笑っていただろう。
「え、えと……」
一触即発の事態に神無はオロオロとうろたえ始めた。
「大丈夫ですよ。ヴォルちゃんを信じてあげてください」
「お姉ちゃん」
夏空の言葉に、神無は姉の言うとおりだとホッと息を吐いた。
「でも、万一のことがあったら責任は取って貰いますけどね～」
と、何処か物騒な響きを持った言葉が奇襲となって神無の不安を余計に煽った。
「お、お姉ちゃん？」
「始まるみたいですよ？」
夏空のその言葉に思わず前をヴォルフ達を見た神無が目にしたものは、小冬がヴォルフに斬り掛かるところだった。

小冬は姿勢を低くしたまま踏み込み、左手の短刀をヴォルフの腹部目掛けて突き出す。
対するヴォルフは柄に見立てた太刀の鞘で、その突きを払った。しかし、小冬は二刀使いだ。威力は軽くともすぐにもう片方の手で攻撃できる。
すぐさま二撃目を放とうと右手の短刀を振りかざす……前にヴォ

ルフの左掌が小冬の額を直撃した。
「うっ！？」
反動で数歩後ろに下がってしまう。が、ヴォルフからの追撃は来ない。
「無闇に切り込むな。下手に前に出れば思わぬ反撃を貰う事になる」
衝撃でくらくらする頭でもヴォルフの言葉の意味は理解できた。
彼と初めて会った日、ドスジャギィの体当たりをまともに食らった原因と同じだ。
「まだ終わってない」
「来い」
二刀を構えなおすと、ヴォルフは鞘を正眼に構えた。
隙らしい隙がまったく見当たらない。何処から切り込めば良いのか分からない。
だが、隙が無いなら作れば良い。
そう思い至った小冬は目の前で二刀を交差させたまま距離を詰めた。
ヴォルフの刀を挟み込むように捕らえ、踏み込みながら左へ向けて払い除け……ようとしたところで、伸びて来た太刀の鞘で額を打たれた。
「あうっ！？」
今度は尻餅をついてしまった。
「隙が無いなら作れば良い。考えは悪くないが、今のは悪手だ。あの後どうやって有効打に繋ぐつもりだった？」
「……」
小冬は答えずに無言で立ち上がった。ヴォルフに隙を生じさせることに集中するあまりその先を考えていなかった。
「もう一度」
「良いだろう」
ヴォルフの言葉に小冬が頷くと、ヴォルフはゆっくりと刀に見立てた鞘を構えようとし、まったくの無動作で鞘を小冬目掛けて放っ

た。
「え！？」
まるで弾丸のように飛来してくる鞘に瞠目するが、すぐに我に返って鞘を躱す。しかし、避けた先でヴォルフ待ち構えていたヴォルフが小冬の腕を掴み、そのまま投げた。
「かはっ！？」
背中から地面に叩き付けられて肺の空気が一気に放出される。
「敵によっては思いもしない攻撃を仕掛けて来る事がある。見た目に惑わされるな」
ヴォルフは小冬の呼吸が落ち着くまで待ってから言った。
「……うう」
呻く小冬だが、それでも二刀を手放していない。
そして立ち上がろうとしたところで気付いた。投げたままの体制のヴォルフの右手の手刀が小冬の首に当てられていることに。
今の投げはどうやら投げる前にナイフにような物を抜いてから相手を投げ、直後に首を斬りつける技のようだ。
ヴォルフが小冬から手を離して立ち上がり、落ちていた鞘を拾い上げて小冬を見たが、小冬は投げられた体制のまま起き上がらない。
「どうした？」
「……なんでもない」
ヴォルフの呼び掛けに我に返って起き上がる。ヴォルフの容赦の無さに唖然としていたようだ。
「もう一度！」
今度は気合を入れて言う。
「来い」
ヴォルフは今度は切っ先を前に向けた八双の構えを取る。
小冬も構えるとそのままの姿勢でヴォルフを観察し始める。それでもいつでも動けるように腰を落としている。
「はい。ストップ！」
と、急に梓が口を挟んだ。

「あのねヴォルフ君？　コレじゃあ訓練にならないわよ？」
「何か問題でもあったか？」
「大ありよ」
ヴォルフの言葉に梓は呆れたように溜息を付いた。
「それじゃ対人戦じゃない。ハンターとして鍛えるなら、まずは彼女の剣の型や軌道をある程度受けてみて、貴方の知るモンスター戦の経験からそれらを通じるか照らし合わせてから、色々と教えてあげるべきじゃない？」
ヴォルフは梓の案を理解した。確かに合理的だ。コレなら色々と捗る。
「成る程、参考になった礼を言う」
「べ、別に大した事無いわよ。貴方って妙なところで抜けてるのね？」
「む……」
抜けていると言われて心外そうなヴォルフだが、どう言い返せば良いのかと少し思案に暮れる。
「貴女もよ小冬ちゃん。手合わせして貰うのは良いけど、意を汲んで貰わないと意味が無いわ。ちゃんとそれを伝えないと」
「伝わってた」
「……は？」
小冬の言葉に梓は一瞬唖然とするが、聞き間違えかと思いつつもう一度尋ねた。
「私の意は伝わってた。さっきのままで良かった」
小冬は少しムッとしていた。邪魔されたと思い、それが気分を害したようだ。
「えーと……小冬ちゃん？　貴女、さっきまでのアレで訓練になると思ってたの？」
「それはどうでも良い」
小冬の言葉に梓は呆然と彼女を見詰める事しか出来なかった。
「私はただ、強くなりたい。いつかヴォルフを越えるから」

「……え？」
梓は小冬の言葉が信じられなかった。頭が真っ白になった気分だった。
「……お前は何を思って俺を超えようと思った？」
呆然としている梓を含めた全員に代わり、ヴォルフが小冬に尋ねた。
「負けたくない。ただそれだけ」
ヴォルフは小冬を見て、彼女の言葉に一切の偽りが無いことを悟った。ただただ純粋に自分を超えようとしていることを理解した。
「……良いだろう。ただし、お前はお前自身の剣で俺を超えて見せろ。何年掛かってもだ」
「無論」
小冬が言葉と共に二刀を構えるのと、ヴォルフが鞘を構えなおすのは同時。
そして小冬が姿勢を低くしたまま突進して斬り付ける。
肩を狙った二連逆袈裟斬りから始まり、回転による遠心力を加えた右手の突きから左手での突き、唐竹割り左胴薙ぎの十文字切り、そこから回転しながらヴォルフへと飛び掛りながら二刀を勢いよく振り下ろす。
怒涛のラッシュと言えるほどの連撃だったが、その全てがヴォルフには受け止められ、流されていた。
「即興にしては上出来だ。だが……」
ヴォルフが手にした鞘が旋回して小冬の二刀が巻き込まれて弾かれる。そのあまりに自然な動きに二刀が手から離れるまで何が起こったのか、小冬には分からなかった。
気付いた時にはヴォルフが手にした鞘は最上段に構えられ、腰の捻りと共に振り下ろされようとしていた。
「っ！？」
鞘が振り下ろされる。それはまさに雷を連想させるような、力強さと威圧感があった。しかし、鞘は眼前で静止する。小冬の額との

距離は紙一重と
「腕の動きと肩と腰の動きに均一が取れていない。これでは如何に力を込めても威力は低いままだ」
ヴォルフはそう言いつつ鞘を小冬から退けた。
小冬は目を見開いて硬直していたが、膝を突いて崩れ落ちた。
「小冬っ！？」
「小冬ちゃん！？」
神無と夏空が駆け寄るが、小冬は地面に蹲ったまま肩で大きく呼吸を繰り返すだけだった。
「今の内に慣れておけ。ディアブロスの突進はこの比ではない」
ヴォルフの言葉に小冬は顔を上げた。額から顎の先に掛けて汗の雫が伝い地面に滴る。死の体感が齎した冷や汗だ。それは止まることが無かった。
「……遠いわね」
「ん？」
「アンタの背中は全く見えない。でも、いつか追いつく」
小冬はそう言って、いつもの挑発的な笑みを浮かべる。
「心意気は買おう」
ヴォルフはそう言って次を誰にするか……と、まだ力量を見てない者達を見やる。
「いつか……」
小冬は誰にも聞こえることなく呟きながら冷や汗を手甲で拭うと立ち上がった。
神無の剣技を見始めたヴォルフの背中を見る。物理的には十数歩といったところだが、その距離は果てしなく遠い。
「……隣に」
そう呟くと、先程ヴォルフに指摘された事柄を思い出しながら、ゆっくりと剣を降り始めた。

それからもヴォルフの実力テストは続いた。
神無はヴォルフとの手合わせよりも、自分自身の剣の型や剣筋、楯の扱い方等の確認から始まり、体術やヴォルフが投じる訓練用の水入り鞠の回避まで行った。
この水入りの鞠は獣革で作られた人の頭位の大きさと重さがあり、命中すると中々に痛い。
コレをヴォルフが投げるのだから、神無は必死に回避と楯での防御に徹する羽目になった。直撃を受けた樹木から聞こえた音はさぞや彼女を凍えるほどの危機感を与えただろう。
現に楯で受け止めたは良いものの衝撃で宙に浮いてしまったのは、実戦なら致命的な点だった。
「防御の際は腰を据えて必ず足が地面に付くようにしろ。でなければ追い討ちが確定する」
「はい……頑張ります」
「神無は常に周りを確認し、的確に仲間を援護しつつ攻撃に加わるのが役目だ。遊撃要因は敵にとってはある意味最も厄介な存在となる。それに装備の性質上、戦闘の片手間に道具を使う事に適しているのが強みだ。多くの道具を携帯し、その使用法も誤る事の無いように心掛けるように」
頭を垂れて項垂れる神無にヴォルフは神無の役割を告げた。
「色々と覚えるのが大変そう……」
と、ぼやいていた神無だが、訓練所に常備されているハンターが頻繁に使う道具のリストを持ち出し、今まで使ってきた道具やまだ使った事の無い道具を見比べて、その主な使用法などを休憩がてらに調べ始めた。
夏空と梓は飛び道具使いということで、ヴォルフが投じた木の的を撃ち抜く所から始まった。
射撃訓練場を横切る形で投じられる的は緩急を織り交ぜ、中には

軌道が急に変化するものまであり、更には拳大の石まで的の中に含まれるようになった。
途中から面白そうだからと小冬が反対側から的や石を投げ始め、それがヴォルフ目掛けて飛ぶようになったのはご愛嬌。
結果、夏空と梓の技量は若干ながら夏空が上ということが判明。
左右から投じられる的の幾つかを梓は外し、対する夏空は装填中でもなければ滅多に外さなかった。
勿論お互いに放つ矢と弾は一本と一発だ。
「飛び道具は撃てない時が致命的な弱点となる。矢を番える時、薬室や弾倉に弾が無い時。残弾には常に気を配る事。曲射は特に先読みの正確さを要求される。それと一応言って置くが間違っても味方を撃つな」
「はい～」
「まだダメだったかぁ」
夏空と梓は訓練再開よりも先に自身の武器の手入れに入り、終わり次第的の作成に掛かった。丁度暇をしていたらしいアイルー達が手伝いに来たので作業は捗ったようだ。
椿のテストは水入り鞠を殴る物・避ける物と色別に分けて決め、ヴォルフが緩急と変化球も交えて彼女に向けて、あるいは意図的に外れるように投じ、それを避けたり殴った。
「反射神経を鍛えろ。それと回避の際にハンマーの重さに動きを取られていた。重さ、持っている手、それらを全て考慮した上で判断する事」
「うぅ、難しい」
「その内慣れる」
梓は如何に力が強くても扱いきれていないことが悔しい事と、自身の怪力から目を逸らしたくても逸らせない事に複雑そうな顔で鞠が直撃した頭を摩っていた。
全員の実力を大体確認したヴォルフは改めて、この場に集った者達を見やる。

それぞれが違う武器を手にしたハンター達。実力は初級の初級だが見所はあった。後はチームワークと実戦経験を積んで行けば形になって行く筈だ。
「もうダメだぁ～！　動けねえ～」
と、ヴォルフが思案に暮れていたところで正太郎が情けない声を上げて地面に大の字で転がった。槍と楯は完全に手から離れている。
構えの訓練を大体二時間程行っていた。あの大きな楯と槍を構えては収めて、また構えて……を繰り返すのは精神的にも中々疲れるのだが、生憎とヴォルフは普通ではない。訓練と努力することに苦痛を感じないのがヴォルフだ。
呆れながらも最初はこんなものだろうか？　と思いつつも、武器を手放している事は咎めるべきだろうか？　と思案に暮れる。
「どんなに疲れても武器は手放すな。戦場では死に繋がる」
「……訓練でも？」
「何の為に鍛えている？」
「……そうだな。すまねえ」
正太郎は起き上がると自分の武器である楯と槍を背負う。
「分かれば良い」
ヴォルフはそう言うと周囲を見渡した。今日はそろそろ終わりにする事にする。
「今日はここまで」
ヴォルフの言葉に皆は武器を降ろした。
深呼吸をしたり、井戸に水を汲み言ったり、手拭いで汗を拭いたり、それぞれが疲れを取ろうとしている中、ヴォルフは太刀の納まっていない鞘を持ったまま、椿がハンマーで殴っていた大岩に近付いていく。
「正太郎」
ヴォルフの言葉に、呼ばれた正太郎だけでなく、他の面々もヴォルフを見る。
「よく見ておけ。槍使いには必須ともいえる技だ」

ヴォルフはそう言いながら鞘の先端を岩に押し当てた。
そして鈍い破砕音と共に鉄製の鞘が岩に２０ｃｍ程突き刺さった。
『えっ！？』
「……嘘だろ？」
全員の顔が驚愕の表情を浮かべ、正太郎は唖然としていた。
「踏み込みと共に全身の筋力と体重を集中させる技だ。使いこなしてみろ」
「……ああ。使いこなし……たいな」
絶句している皆を尻目にヴォルフは岩から鞘を引き抜くと、地面に刺さったままだった太刀を収めた。
「解散する」
ヴォルフはそう言うと休憩所へ向かって歩き始める。
「ヴォル君。あれ、私にも出来るかな？」
ヴォルフに追いついてきた神無が、遠慮がちに尋ねて来る。
「訓練次第だ。無理に習得する必要は無い」
「……私もやってみるよ」
「ならばまずは素振りからだ。いきなり試すな。腕を痛める」
神無の答えにヴォルフは立ち止まらずに答える。
「うん。頑張るよ」
「なら、やってみるといい」
ヴォルフはそう言うと、休憩室の男子更衣室に入って行った。

訓練模様（後書き）

ようやく更新できました。
暑くて集中が効きませんね困ったことに。
話は大きく逸れまくりますが、例年通り水難事故が多発しています。
皆さんもお気をつけください。
私ですか？　私はパニックの見すぎで水辺には近付きたくもないです（笑）

誓いの言葉

「ふむ……良いものだな」

ヴォルフは温泉に浸かりながら素直にそう思った。

夕食前に入るようにと夏空に言われたので、旅館を兼ねている集会場にある温泉に入ることになったのだ。

茜色に染まった空を見ながらの入浴は、以前にも経験がある。ただし、あの時は牙獣種のモンスターと一緒の入浴で、最初は互いに睨み合いになりつつも湯に浸かっていたものだ。

何日か同じような日々が続き、最終的にはお互いに不干渉を貫いてあの牙獣が来なくなるまで続いた。どうなったのかは知らない。

あの日々は今のようにのんびりとしていられる物ではなかったので、何処か感慨深いものがある。

岩に凭(もた)れて空を見上げると、遠くに鳥が飛んでいくのが見えた。紅葉の葉が風に靡(なび)かれて、ゆらゆらと落ちていく様など、風情があって良いものだ。

（この村に来て、俺は少し変わったのか？）

この村に来て今日で二週間以上が過ぎている、ヴォルフは僅かながら自分の変化を自覚していた。以前の自分なら他人に物を教えようと等、思いもしなかった。

共に戦うことはあっても同じ人間とは二度と組みはしなかったし、顔を会わせる事も会わせようともしなかった。

そんな過去に比べて今の自分はどうだろうか……。確実に変わってしまっている。

今は直接関わりのある神無や夏空に小冬を初めとした面々だけだが、何れはもっと多くの人間と肩を並べて行く事になるのだろうか？

ヴォルフはそこで思考を止める。考えても詮無き事だ。それは良くも悪くも自分を変えて行くのであれば、身を任せるのみだ。

「お？　もしかしてヴォルフか？」

不意に聞こえた声で、ヴォルフは声のした方向を見る。そこには腰に手拭いを巻いた正太郎がいた。
「奇遇だな。温泉はどうだ？」
「……良い物だな。お前が大切に思っている理由が何となく分かった」
ヴォルフがそう言うと、正太郎は心底嬉しそうに笑って見せた。
「へへっ！　そう言って貰えっと嬉しいねえ」
正太郎はそう言うと湯船に浸かった。
「前にも話したけどさ、俺はこの村が好きなんだ。だからハンターを志した。……ヘタレだけどよ」
「……お前はそんな自分を変えようと思ったのだろう？　なら、とうにへたれとやらではない」
ヴォルフはヘタレと言う言葉がやけに言い難そうだったが、意味は理解していたので正太郎の言葉を否定する。
「まだ実戦に出ちゃあいねえんだ。まだヘタレ卒業とはいえねえよ」
ヴォルフは正太郎のそんな言葉に心底驚いた。まさかこの短時間でここまで自分の意識を変えられるとは思っても見なかったからだ。
「つー訳でよろしく頼む。また明日からビシビシ鍛えてくれ！」
「なら、まずは武器を確実に構えられるようになる事だ」
「う〝……」
ヴォルフの言葉に、正太郎は思わずばつの悪そうな顔になった。
「そうだ。飲まないか？」
話題を切り替えようと思ったのか、正太郎はお盆に載った小瓶とお猪口を見せる。
「ん？　何だそれは？」
「酒だよ。飲んだ事無いのか？」
ヴォルフの言葉に正太郎は不思議そうな顔をするが、酒をお猪口に注いでヴォルフに渡す。
「……」
ヴォルフは受け取ったお猪口の中身である透明な液体を見る。一

見水だが、何処か独特の刺激を持つ香りがした。
正太郎を見ると、彼は別で用意していたのか二つセットで持って来ていたのか、お猪口に酒を注いで飲んでいた。
「ふぃ～っ！」
目を強く閉じて、しかし美味くて堪らない！　とでも言うような仕草をする。
そんな様子を見たヴォルフはお猪口の中身を一気に飲み干そうとし……盛大に咳き込んだ。
「ゲホッ！　ガハッ！　ゴフォッ！」
口の中が、喉が、焼け付くように熱い！
そのただならぬ様子に正太郎は呆然とヴォルフを見ていた。
「……何だコレは？　よくこんな物が飲めるな？」
「あ～……」
正太郎は気拙そうに視線を逸らした。まさかヴォルフが酒が飲めない、飲んだ事の無い人間だとは思いもしなかった。
「ま、飲んでるうちに慣れるよ。ダメな奴はてんでダメだが」
「？　そうなのか？」
正太郎は自分がヴォルフに何かを教えられるなんて珍しいと思いながらも説明する。
「酒が絶対に飲めないって人間もいるんだよ。体が一切受け付けないってのか？　まさにそんな感じ。確か夏空さんがダメだったな」
正太郎の言葉を聞きつつも、ヴォルフはコレを二度と飲もうとは思わなかった。
（そう言えば、ポッケ地方の集会場ではこの類を飲んで騒いでいた奴らが大勢いたな）
過去に行った事のある雪山の小さな村で起こした騒動を思い出す。
余りに五月蝿かったのでヴォルフが「五月蝿い」と一言文句を言ったら、酔った男達は立ち上がってヴォルフに絡んできた。
結果は言うまでも無い。幸いにして酒場が血風呂にならずに済んだ事くらいだ。

その一件から数日後にはポッケ村を出た訳だが、今の今までそんな事はすっかり忘れていた。
「そろそろ上がる。ではまた明日な」
「おう！」
ヴォルフは湯から上がりながら言うと、正太郎は元気に応えた。

「ふぅ～良いお湯ですぅ～」
「夏空、オバサン臭い」
「オバサンじゃないですぅ～！」
「まぁまぁ、二人とも」
「よく喧嘩する元気があるわね……あんなにハードだったのは初めてかも……」
「うん。疲れたね」
訓練を終えた五人は揃って旅館研修会場の女湯に浸かって、訓練の疲れを癒していた。
思いっきりリラックスする夏空、そんな夏空を見ていつもの挑発的な微笑みと共に女性の禁句を言う小冬、そんな二人を諌める困った顔の神無、疲れきったのか岩に力無く凭れる梓、普段と余り変わらない様子の椿……因みに眼鏡は外している。
「皆さん、訓練どうでした？」
一緒に入ると言って入ってきた受付嬢の木葉が、ヴォルフの訓練について尋ねて来た。受付嬢の制服にある帽子は取っており、今はショートボブの髪型の上に手拭いを乗せている。
「今日は訓練というよりは実力テストって感じかな？」
「明日から基礎訓練をやるとか言ってた」
「大変そうですけど、ちょっと楽しみです～」

「慣れるまでがハードね……実戦に出て良いって言われるまでが遠いかも」
「ヴォルフさん厳しい」
今日一日の内容を思い出した神無が答えると、小冬が明日から始める事柄を告げ、夏空がそれに対する感想を言った。
梓と椿はこれからについて若干の不安はあるようだが、ハンターである意所は引けないのか、言葉とは裏腹にそれを乗り越えようとする気力の篭った目で答えた。
「成る程成る程～。皆さんってヴォルさんはどんな人だと思いますか？」
「うえ！？　木葉ちゃん！？」
「優しい良い子ですよ～」
質問の内容に動揺して慌てる神無だったが、夏空があっさりと答えた。
神無はそれに一瞬硬直したが、単に質問内容を聞き間違えたようだと理解し、軽く咳払いする。
「ヴォル君は……」
「野生人で食いしん坊で無口で変な奴」
「小冬！？」
小冬のあんまりな回答に神無は抗議する。
「否定できる？」
「少なくともヴォル君は変な人じゃないよぅ！」
「それ以外は肯定ね……」
「うぅぅ～」
悔しい！　でも反論できない！　な神無は小冬を睨みむのが精一杯だった。
「フフ、神無カワイイ。必死になってる」
「むきゃー！」
妹に頭を撫でられた神無は恥ずかしいやら悔しいやら……小冬と追いかけっこを始める。

「風呂場で暴れないの！」
『ごめんなさい』
梓の声に、二人は大人しく湯船に浸かる。
「全くもう……え～と、ヴォルフ君のことだったかしら？　そうねえ……自分を厳しく律していて気高い人だと思うわ」
「カッコイイ」
梓が答えると、椿は簡潔に一言で答えた。
「確かにヴォルさんカッコイイですよね？　見た目異国の人なのに、ユクモの服が似合うのもまた良いと言うか……」
「そうですよね～。ヴォルちゃんは顔立ちは女の子みたいですけど、キリッとしているというか凛としているというか、男らしいですよね～」
「あれ？　何か話題がずれてない？」
「そうね……ヴォルフといえば剣ね」
いつの間にか話題がずれてしまい、どうやって会話の中に入っていこうか迷う神無だったが、小冬はあっさりと輪の中に入っていく。
「小冬！？」
神無が驚きの声を上げるが、小冬は気にせず輪の中に加わった。
「そうそうそれそれ！　ヴォルさんの剣ってどうなの小冬ちゃん？」
木葉が興味津々といった感じで尋ねて来る。
「そういえば……」
「木葉ちゃんだけですね……ヴォルちゃんの剣を見てないの」
「そうなんですよ夏空さん。正太郎さんがボッコされちゃった時も訓練の時も私は集会場で受付してましたから……それに最近の依頼なんてジャギィ退治か道中護衛か、山の倖の採集くらいしかありませんでしたし」
木葉が溜息混じりに告げる。言外にヒマでしたと言っていた。意外に毒を吐く娘だな……と約二名を除いた全員が思った。
「ヴォルフ君の剣ねえ……はっきり言って……」
「見えない」

梓が言おうとして事を椿が言う。
「見えないって？　速過ぎて？」
「そう。訓練の時はあからさまに手を抜いてたから見えた。でも、アイツが本気を出したら何が起こってるか分からないかも」
「ナルガクルガの時が正にそうだったわね……」
「ね～」
梓と椿が先日の戦いを思い出して、しみじみと答えた。
「ナルガクルガ……か。もっと奥の樹海地帯に住んでいるのに何でこの辺りに現れたんでしょうね……」
「多分ジンオウガね。霊峰から降りて来たせいでナルガクルガも移動する必要が出てきたんじゃない？」
木葉の疑問に梓が仮説を立てる。
「でも、それだと何でジンオウガは霊峰を降りてきたんでしょうね？」
「それが問題なのよね……。霊峰に近付くには無理があるし……」
「また話題が変わっちゃった」
木葉と梓のやり取りをみて椿がボソリと呟いた。
『……』
その言葉で全員が無言になった。
「え、と……とにかく、皆でこの状況を何とかしないといけないのは確かよ」
「そうですよね～。でもその為には強くならないといけませんし……」
「それでヴォル君に鍛えて貰うんだよ。いくらヴォル君でも一人じゃ絶対に無理だって事も分かってると思うし」
「そう。だから皆で力を合わせる」
「一人は弱くても皆でなら、戦える」
今日ヴォルフの訓練を受けた者達には、自分達のなすべき事が理解できたのか確かな強い光が宿っているのが木葉には分かった。
自分は戦うことが出来ないけれど、彼女達を助け応援する事くら

いは出来るのではないかと思った。
「頑張って下さいね皆さん。私には応援する事くらいしか出来ませんけど」
「はい～。ありがとうございます」
「ありがとう木葉ちゃん。そろそろ出よっか？　逆上(のぼ)せると後が大変だし」
「そうね」
　それぞれが湯船から上がると、ただ一人湯船に浸かっていた小冬が立ち上がった面々をじっと見ていた。
「……」
　特に姉二人と椿を見渡してから無言で自分の身体を見下ろすと、目を落として溜息を吐いた。
「どうしたの小冬ちゃん？」
　それに気付いた木葉が小冬に話しかける。
「……皆胸大きい。梓は大して変わんないけど」
「あ～」
　小冬の返答に木葉は困ったように視線を彷徨わせると言った。
「大丈夫だよ！　小冬ちゃんは夏空さんと神無ちゃんの妹なんだから、ちゃんと大きくなるよ！」
「だと良いけど……神無は私と一つしか違わないのに私の倍以上は大きい……夏空はもっと大きい」
「……」
　どうしたものかと周囲を見渡す木葉だが、他の面々は既に脱衣場に入ってしまっていた。
　小冬は姉二人に比べて小柄なので仕方ないのではないか？　と思うが、そんなことを言っても小冬は納得するとは思えない。
　そんなこんなで色々と考え込んでいる内に小冬は一人さっさと上がってしまい、何かを言おうとした時には既に彼女は木葉の前から姿を消しており、同時に逆上(のぼ)せてないかと心配した双子の姉の笹湯(ささゆ)が様子を見に来ていた。

そんな姉の姿を確認した時には既に、木葉はすっかり湯当たりしてしまっており、運び出される羽目になった。……そんな光景を小冬がニヤリと笑いながら見ていたという。

次の日からの訓練は前日とは違い、肉体作りとも言える基礎訓練だった。

正太郎だけ槍と楯を構えては収め、また構えて……を繰り返し行うことになった。しかも、抜き打ちで訓練用の水入りの鞠が飛んでくるのだ。コレを確実に防御するのも訓練の一つとなっていた。

ヴォルフの少しずつ数を増やして行く、という言葉に正太郎は顔を引き攣らせたが、強くなる為だと言われた途端やる気を出したのは現金なものだと約二名を除いた全員に思われた。

他の面々の訓練内容は……

・廃材になった柱の木材の上を目隠ししたまま落ちないように歩く事で平衡感覚を鍛える物。

・体力作りの為の長距離走。

・ヴォルフが投じる水入り鞠を回避し続けて反射神経の強化。

・ナイフや石等の投擲技法。

・モンスターとの不意の遭遇での対処法の講義。

・各自の武器を用いた戦闘訓練。

・筋肉トレーニング。

・目隠しした上で音を聞き分ける聴覚強化訓練。

……等々と多義に渡った。因みに全ての小道具はアイルー達が用意した。ヴォルフに報酬を貰う事で徹夜で準備したのだそうだ。

これらの訓練はヴォルフの傷が癒えるまで、そして夏空たち三人の装備が完成するまで行われた。

毎日ヘトヘトになって訓練を終えて入浴して夕食を食べて就寝して……繰り返す様は村人達には期待と少しばかりの畏怖の目で見られていた。

朝焼けに染まる訓練場。
一日の始まりを告げる鳥の声と共に吹く微風(そよかぜ)。
風を切る音共に振るわれる白刃。
風と共に舞うそれはまさに剣舞。
力強い大地のような剛健さ、吹きすさぶ風のような鮮やかさ、流れ行く水のような美しさ、猛々しい炎のような激しさを併せ持った無形の舞。
ヴォルフが繰り出す剣はまさにそれだ。
掴み所の無い雲のようでいて、それでありながら力強い巌(いわお)のような……そんな矛盾を併せ持った剣。
刀を鞘に収め藁束(わらたば)が巻かれた人の胴ほどの丸太に向き合う。
静かに響くは僅かな鍔鳴りの音だ。そして、僅かに遅れて丸太に三つもの線が走り崩れ落ちた。
水平、斜め、更には縦に真っ二つに断たれた丸太が地面に転がった。
「お見事です～！」
ヴォルフの背に、のんびりとした呑気な声が掛けられた。
「夏空か。おはよう」
「はい。おはようございますヴォルちゃん。朝から頑張ってますねえ」
「何処まで治ったか知りたくてな。もう痛みは無いから完治しただろう」

ヴォルフの言葉に夏空は満面の笑みを浮かべた。
「まぁ！　それは良かったです！　お姉ちゃん、今日は張り切ってご馳走作っちゃいます！」
「それは楽しみだ」
ヴォルフは今日の食事当番は夏空だった事を思い出した。
「素直なヴォルちゃんは良い子良い子です～」
夏空の手が伸びてきてヴォルフの頭を撫でる。
最初は何か変な感覚が気になって逃げようとしたが、彼女の手は逃げようとする先を予測しているかのように動くので、最近はされるがままだ。ヴォルフ自身嫌ではないが、何か奇妙な感覚を覚えるのだ。
「ん？」
不意に思い出した。夏空は朝の早起きが苦手でこの時間はとても起きられないのが常であり、いつもなら夢の中に居るはず。因みに彼女が朝食を担当する時は全員が遅めに起床しするか結局神無が作るかのどちらかだ。
「今日は起きるのが早いんだな」
「昨日は疲れてて早い内に寝ちゃいましたから、目が覚めるのも早かったんですよ～」
夏空の言葉にヴォルフは納得する。いくら早起きが苦手でも、普段と比べて早すぎる時間に寝れば嫌でも目が覚めるものだ。
「それじゃあヴォルちゃん。私は朝食の準備をしますから、早めに帰ってきて下さいね～」
「ああ」
ヴォルフが返事をすると、夏空は嬉しそうに微笑むと家路へと歩いていった。そんな夏空の後姿を見ていると空腹感を覚えた。
我ながら現金なものだな、と溜息を吐きながら思ったヴォルフは地面に転がる藁と丸太の破片を拾い集めて薪置き場へと持って行った。

朝食を終えたヴォルフ達は、竜人族の老人が開いている加工屋の前に来ていた。
今日は訓練を休む日と決めており、今日一日をどうするかという事で話し合っていたところでアイルーが伝言を伝えに現れたのだ。
そこで神無達の装備が出来上がったのだと理解して加工屋に訪れたのだ。
「おう、来たかい」
「完成したのか？」
「うむ」
老人の言葉に神無達三人の顔に嬉しそうな顔が浮かんだ。
今まで使っていた武器防具が新調されるのは、自分達の成果が形になることだからだ。より強力な武器で狩りに行ける事を意味する。
「では奥に用意してあるからの。着てくるといい」
「うん！　ありがとうお爺ちゃん！」
「ありがとうございます～」
「お疲れ……」
神無達はそう言いつつ店の奥に入って行った。
「さて……」
老人がヴォルフを見上げる。
「あの娘達を鍛えてくれてありがとうなぁ」
老人が破顔し、人懐っこい笑顔を浮かべる。
「礼を言われることではない」
「いやいや。特に正太郎の奴があそこまでやる気を出すとは思っても見なかった。あ奴はこの先どうしたもんかと思っとったが、お前さんの弟子になってからはなぁ……村の皆もたまげとるわ」
正太郎の変化は村の人間からしても大いに驚くべきことなのだろ

う。ヴォルフ自身もそれは何となく理解した。
ヴォルフ自身、彼については色々と予想外の事をやらかすタイプだとは思っている。自分に弟子入りを志願するなど、最初は正気を疑ったくらいだ。
「奴に関しては何も言うまい。だが、奴も神無達もまだ強くなる」
「そうかい」
ヴォルフの言葉に老人は嬉しそうに笑った。
「お待たせです～！」
夏空の明るい声と共に三人が姿を現した。
「ほう」
ヴォルフは以前とは全く違う彼女達の装備を見て感嘆の声を上げた。
「えへへ。どうかなヴォル君？　似合ってる？」
神無は楽しそうに言う。
神無はジャギィやドスジャギィから採った薄紫色の革や牙に爪を用い、金属で補強した装備だった。
額から鍔に掛けて鉄の前立てが付けられた帽子。
肩や肘等の要所を装甲で覆う胴鎧に篭手。
ジャギイの革で作られた下半身を覆うタイプの外套と革製のスカート。
膝から足に掛けてはジャギイの革と膝を鉄の装甲で強化したロングブーツ。
新調された武器は、鋭い切っ先を持ちながらも厚い刀身と峰に刺々しいセレーション（鑢）と、装飾としてジャギイの革、腕を守る為のハンドガードを持つハイドラナイフと呼ばれる片手剣。厚みのある刀身と大きな刃幅から何処がナイフだ？　と開発者に訊きたくなる物だ。
そして、ハイドラナイフと対になるカイトシールドと呼ばれる形をした縦だ。縦の上部には攻撃にも使える五本の鉤爪が付けられ、その反対側である下部にも一つの鉤爪が取り付けられている。

「ああ。良いと思う」
ヴォルフは素直にそう思った。その装備は活発な神無にしては服の露出を最小限に留めた寒冷地でも用いれるもので、ハンターとしてはまだ発展途上な神無には丁度いい位の装備だと思ったのだ。
神無の期待した答えとは全く別方向のベクトルである。彼女が気付いていないのは幸いだろう。
「えへへ。ありがとう。因みに梓ちゃんと同系列なんだ」
神無に言われて、弓使いの梓が似たような格好をしていたのを思い出した。
「私はどうですかヴォルちゃん？」
今度は夏空が前に出てきた。
最初に目に入ったのは動物の耳を模した飾りのついた薄い青の頭巾だ。牙獣種アオアシラから採った薄い青の毛皮を主に用い、他にはアオアシラ特有の腕甲と棘が使われている。
耳を模した飾りのついた頭巾は顔を残した頭部を覆い隠すように作られ、背中近くまで伸びている。
アオアシラの毛皮で作った短めの外套で胸部、肩、背中を覆い、街頭の中に見えるのは装甲が付いたコルセットのような形の鎧と服。
二の腕は素肌が剥き出しで、肘から手に掛けては毛皮製の厚手の手甲右腕に、アオアシラの棘付き腕甲をそのまま人間サイズにしたような手甲を左腕に付けていた。
下半身はミニスカートのような短い着物の裾の上から、予備弾薬や小物入れのポーチが付いた、毛皮の大きな帯を腰に巻いてスカートを覆うように着ており、膝から下に掛けてはアオアシラの腕甲で補強した脚甲で補強されたブーツを履いている。
武器は元々使っていた青熊筒と呼ばれる火砲に大型のパワーバレルを搭載して威力を底上げしたものだ。バレルを長くする事で初速と射程距離が伸びている。
「成る程、火砲が重くても装備は軽く……か。良い選択だ」
ヴォルフの言葉に夏空は困った顔をした。

「そういう意味じゃないんですけど～」
「？」
夏空の言葉にヴォルフは首を傾げる。
「……似合ってはいるが？」
少し考えてからのヴォルフの言葉に、夏空は驚いたような顔をするも、すぐにはにかむような嬉しいような……そんな笑顔を見せた。
「ウフフ。ありがとうございますヴォルちゃん」
そう言って夏空はクルリと一回転した。夏空の被った頭巾の背中部分から伸びた一房の髪が尻尾のようだとヴォルフは思った。
「次、私」
小冬が前に出てくる。
ブナハと呼ばれる虫を用いた物で、手品師かパーティーの衣装のような外観の服装に、ヴォルフは首を傾げた。
頭には小さな黒いシルクハットが付いたカチューシャ。
白いシャツに、黒いワンピースのようううな上下セットの衣装。
スカートの丈は前がミニで後ろがロングという変わったもので、その一つ一つが虫の羽のような独特の形状をしている。
腕にも長い手袋のような手甲が付けられており、脚にはニーソックスなのかストッキングなのかよくわからない物を着ており、先の尖った革靴を履いている。
その両手にはコルヌ・ワーガと呼ばれる二刀一対の、湾曲した刀が握られている。峰には棘がビッシリと並んでおり、まるで甲虫の持つ鋏型の角のようだった。
虫から採られた素材で作られた武器と服は何処かミスマッチしている。
「……その格好で戦うのか？」
「心外ね。コレはちゃんとした鎧でもり、パーティードレスにも使えるお得な物。見た目で判断しないで」
以前言った事のある言葉を返されてぐうの音も出ないヴォルフに、小冬はニヤリと挑発的な笑顔を見せる。

「そうだな。ならば存分に魅せてみるがいい」
小冬はヴォルフの言葉が意外だったのか、目をパチクリとするがすぐに元の笑顔を浮かべた。
「フン。メロメロになっても知らないわよ」
「ちょっ！？　小冬！？」
小冬の発言に神無は慌てて何かを言おうとしたが、彼女は何を言うべきか定まっていない。
ここだけの話。神無は見た目も華やかな小冬や夏空の物と違って、実用一辺倒の装備を選んでしまった事を今になって失敗したかと思っていた。
「それで狩れなければ意味は無い。俺としては神無のような保守的な物の方が良いと思うがな」
と、そこでヴォルフの思わぬ発言に頭の中が真っ白になった。ヴォルフは防御を固めろと言ったのだが、神無は自分の服の方が好みだと言ったように聞こえたのだ。
「……」
顔を赤くして沈黙する神無を他所に、夏空と小冬はヴォルフに抗議していた。
「当たらなければ良い」
「そうです。避ければいいんです」
「次でやってみる事だ」
ヴォルフは溜息混じりに言った。
「話は終わったかな？」
と、加工屋の老人が言う。その手にはいつもの大きなハンマーではなく大きな桐箱が乗っていた。
「これをお主に」
老人はそう言って桐箱を開けた。
「これは……」
ヴォルフはその箱の中身に僅かに目を見開いた。
刃渡り十五センチ程の黒く塗装された肉厚で両刃の刀身。大きい

柄尻を除けば片手に丁度収まる程度の細長い柄。柄尻は紐などを通す為にリング状になっており、その穴はヴォルフの親指でも余裕で通りそうなほど大きい。
苦無（くない）と呼ばれる短剣だ。同じ形状をした物が三本、布張りの箱の中に収められている。
「昔、この村でハンターをやっとったモンがワシに作らせたものじゃ。……あ奴は取りに来なかったがのう」
老人は目を細めて遠くを見て呟くように言う。
「お主に使って欲しい。これの持ち主の代わりに、お主には皆と共に帰ってきて貰いたいんじゃ」
老人の言葉に神無達三姉妹は息を呑み、ヴォルフは黙って老人の目を見ていた。
「分かった。ありがたく使わせて貰う。そして誓おう」
ヴォルフは一度言葉を切ると後ろを振り向いた。
そこには神無、夏空、小冬がいた。彼女達の姿を目に焼き付けてから老人に向き直る。
「必ず戻る。彼女達だけじゃない。梓と椿、正太郎もだ」
ヴォルフの言葉に夏空達は嬉しそうな、感激したような花が咲いたような笑顔を浮かべ、老人は満足そうに目を細めると桐箱に収められた苦無を用意していた鞘に収めてヴォルフに渡した。
苦無はそれぞれが黒い革製の鞘に収められ、同じ革の帯で繋がっていた。
「頼むぞ。皆を」
「無論だ」
ヴォルフはそう言ってから苦無を受け取った。帯をそのまま身体に巻き付ける。右手で抜くには丁度良い位置だ。
「行こうか」
「うん！」
「はい！」
「ええ」

ヴォルフの言葉に三人は頷くと、共に訓練所の方へと向かった。
今日手にしたばかりの武器装備をいきなり実戦で使うわけにはいかないからだ。本来ならば訓練はお休みの日だったが、今日は別だ。明日に休めば良い。

訓練所には自主訓練なのか、正太郎達三人が既に集まっていた。
梓と椿は神無達三人の新装備に花を咲かせ、正太郎は以前と同じ鎧に身を包み、新たな武器を手にしていた。
ただ、それはヴォルフが予想していた槍（ランス）ではなく、討伐隊正式銃槍と呼ばれるガンランスだったが。
「……お前、何故ソレを？」
「おお！　良いだろコレ！　カッコイイよな！」
ヴォルフの指摘に嬉しそうに言う正太郎だが、ヴォルフ自身は胡乱気な目を向けていた。
「そいつは槍と違って扱いが難しいぞ」
ヴォルフはガンランスの欠点を挙げていった。
弾が尽きれば戦力が下がる。
切り札である竜撃砲は一度きりで替えが利かない。
一本の塊である槍と違って、ガンランスは多くの部品から作られた精密機械に近く、荒っぽい扱いに向いていない。理由は簡単。壊れるから。
「それでも俺はこいつを使いたいんだ！　俺は俺のやり方を貫きたい！」
「……そこまで言うなら勝手にしろ。ただし、訓練は今まで以上に厳しくする」
普通なら見捨てても良いかも知れなかったが、ヴォルフはそんな

選択肢は浮かばずに面倒を見る事にする。あの老人との誓いを破る訳にはいかないし、最初から破る気は無い。
「おうよ！」
「皆！　大変だよ！」
正太郎が気合の入った返事をすると、受付嬢の木葉が慌てた様子で訓練所に入ってきた。
「どうしたんだ？」
「さっき、トラが見たらしいの！　森の方で救援要請の狼煙を！」
その言葉で全員の顔に緊張が走った。
「トラはもうすぐ道案内の準備が出来るって！　だからすぐにお願い！」
ヴォルフはそれに頷くと訓練所を出ようとし……
「俺達も行くぜ」
正太郎に呼び止められた。
「その装備にまだ慣れていないだろう」
「そうですね。でも、ヴォルちゃん一人で行かせられません」
「さっきの誓いを忘れたの？　万一、アンタに死なれたら困る」
「そうだよヴォル君！」
ヴォルフの言葉に、夏空、小冬、神無が次々に反論する。
「武器にはまだ完全に慣れてなくてもよ、修行の成果ぐらいは見せられるぜ！」
「ヴォルフ君。お願い」
「ヴォルフさん。私も行きたい」
正太郎、梓、椿も訴えてくる。
「良いだろう。ただし、お前達は纏まって動け。俺は遊撃として動く」
「了解！」
正太郎が返事をすると全員が頷いた。
「準備できたニャア！」
トラと呼ばれたアイルーが、何人かのアイルーを連れて報告に来

る。
「行こうか」
ヴォルフがそう言ってトラに出発を伝えようとすると、神無がヴォルフの服を引っ張った。
「ね、ヴォル君さっきの誓いの事なんだけど……」
「あれがどうかしたか？」
「もう一度……いえ、ここで改めて誓いませんか？」
ヴォルフが聞き返すと、夏空が答えた。
「私達は必ず戻る。それはね……」
「私達全員で誓ってこそ意味があると思うの」
「思うの～」
小冬が言い始め、梓がその言葉を最後まで告げた。
「へえ。良いじゃんそれ。縁起を担ぐっつうかさ」
正太郎はノリノリのようだ。
今は一刻を争う時だ。だからこそ、ヴォルフは皆に振り返って言った。
「そうだな。なら神無、言い出したのはお前だからな、それらしく頼む」
「ええ！？　私！？」
ヴォルフの突然の言葉に神無は大いに驚いた。
「俺にはソレらしいやり方がわからないからな。任せる」
「う～ん」
神無は恥ずかしそうに皆を見渡していると閃いたようで、腰の後ろに納めたハイドラナイフを抜いて天に掲げた。
「良いですねえ～」
夏空は意図を察したのか、青熊筒を同じように天に掲げた。
「フフフ」
小冬は静かに笑いながら右手に二刀を重ねて持って、同じように掲げた。
「良いじゃない。こういうの一回やってみたかったのよね」

梓が弓を背から降ろし、矢筒から矢を一本採ると弓と一緒に右手に握って天に掲げる。
「何かカッコイイ」
椿は嬉しそうにハンマーを両手でしっかりと掲げる。
「良いね良いね！　燃えるじゃねえか！」
正太郎がガンランスを天に掲げる。
「……誓いをここに」
ヴォルフが言いながら鯉口を切り、刀を天に掲げる。
ヴォルフの刀が天に掲げられると、全員の武器が互いに重なり合った。
「誓いをここに！」
「私達は！」
「必ず生きて！」
「必ずここに！」
「戻ってくる！」
「絶対に生きて、帰るんだ！」
「誰一人、欠ける事無く」
立会人の許、ここに誓いは交わされた。たった今から彼等は本当の意味でチームとなった。そしてこれから待ち受ける多くのモンスターとの戦いに、繰り出していくのだ。
遠くから微かに咆哮が聞こえた。

誓いの言葉（後書き）

やっと投稿出来ました。一週間以内失敗！　一万文字突破！
ようやくプロローグが終わりました。ここまで来るのに長かったです。
ご感想、ご意見随時募集中です！
でわでわ！

森林での戦い。

森の中を一向は駆け抜けていた。
先頭にはアイルーのトラが、その後をヴォルフ、神無、小冬、夏空、梓、椿、正太郎と続いていく。
途中でケルビやガーグァに遭遇するが、今は彼等草食種を狩る時ではない。無視して通過する。
「まだ掛かるのかトラ？」
「まだまだニャア」
「持ち堪えられると良いんだがな」
ヴォルフは静かに呟くように言うと、後方を走る仲間達を背中越しにちらりと見る。
今の所はまだ大丈夫なようだが、このペースでの行軍が続けば彼等の体力は恐らく底を尽き、戦闘と救出どころじゃなくなる。
ヴォルフは改めて集団行動の難しさを知った。
「一旦止まれ。休憩に入る」
ヴォルフが減速しながら告げた。
「え？　どうして！？」
「このまま走り続けて疲弊しきれば救助どころじゃない」
神無の言葉にヴォルフは停止して周囲を確かめながら答える。モンスターの姿は無い。
「五分だ。その間に息を整え、少しでも体力を回復させろ」
ヴォルフはそう言いつつひとっ跳びで三メートル近い高さの木の枝に跳び乗ると、周囲を見回し始めた。
トラが木を登ってヴォルフの隣に立つ。
「方向は北西だな？」
「はいニャア」
ヴォルフは北西の方向を見るが、これと言って特に何も見えない。見えるのは天を突くような山々と、空を舞う鳥くらいだ。

（間に合うか？）
ヴォルフはそう思いながら、座り込んで休んだり水を飲んだり携帯食料を食べたりしている神無達を見る。
救助要請信号からどれくらい経っているか……それを考えると一分一秒経つごとに、要救助者の生還の可能性が低くなる。
山道で森の中というのはかなりの悪路だ。荷車運びのガーグァに牽引可能な道ではない。空でも飛べれば手っ取り早いのだが、そんなものは無い。徒歩で行くしかないのだ。
「ねえ、ヴォルちゃん？」
「休憩は良いのか？」
夏空が話しかけてきたので下にいる彼女を見れば他の全員がヴォルフを見上げていた。
「どうやったらそんな風に跳べるんですか？」
夏空が不思議で仕方が無い、とでも言うように尋ねてくる。
「高く飛ぶ。それを常に念頭に入れて毎日跳ぶ訓練をしてきた。……そうだな。成長の早い木でも植えて実践するといい」
夏空の疑問に対するヴォルフの返答は簡潔だったが、気の遠くなりそうな程長い話だった。
「そうですか～ちょっと無理そうなので私は遠慮しておきますね～」
夏空はそう言って水差に口を付けて水を少し飲んだ。周囲では大きな溜息を吐いている者や軽くジャンプする者がいた。
「？」
ヴォルフは彼女達が何をしたかったのか少し疑問に思ったが、すぐに目的の方向に視線を移した。追加の救援要請の信号は上がらない。
考えられる事柄は複数ある。信号が尽きた。交戦中・逃走中につき信号を上げる暇が無い。全滅した。などなど、考え出したらキリが無い。
交戦中にしても、せめて銃声でも聞こえないかと耳を澄ませた。だが、聞こえてくるのは真下からの声位のものだった。

日の差し込まない森の中、息を潜めている者達がいた。
ユクモ村に滞在していたハンターである朱美とその仲間達だ。そして、二人のハンターではない人物。
朱美は暗がりから少し顔を出して様子を伺う。視線の先には救援を要請する原因になったモンスターの群れがいた。
鳥竜種ジャギィの群れだ。三頭ものドスジャギィに率いられた大きな群れだ。
彼女は仲間と共に、数日前にユクモを出て狩りの標的を探していた。アオアシラ以上のモンスターを狩ろうとチームで決定したからだ。
しかし道中で逃げ惑う一向に遭遇したので救助を優先したのだ。
相手は複数のジャギィだった。ジャギイ数頭はいつもの事なので何とかなると思っていた。
だが、メスのジャギィノスが複数加わって更にはドスジャギィまで姿を現した……それも三頭同時にだ。
そして彼らが一斉に咆哮を上げ、瞬く間に『軍隊』が出来上がったのだ。ハンターは朱美を含めて四人……数の差が決定的だった。
そうなると逃げる以外に方法が無い。牽制射撃や閃光弾に煙玉、他多数の小道具を駆使しつつ逃走を試みたのだ。
一人が逃げる救助人に逃げる方向を指示する。一人が小道具や弾丸の準備をする。一人が接近してきたジャギィを直接攻撃する。朱美が小銃で牽制と狙撃を行って足を止める。即興とはいえ悪くない手だった。
しかし、朱美たちハンター達の健闘も虚しく一人、また一人とジャギィ達に仕留められる人々。朱美達の指示を聞けなかった者は例外なく犠牲になった。

そして今は何とかジャギィ達の目から逃れる事に成功したが、先頭を走っていた救助者の中年の女性が今度はアオアシラに出くわしてしまい大声を上げてしまったせいで、ジャギィ達に居場所がバレてしまったのだ。

運の悪い事にその人物はアオアシラの一撃で首を？ぎ取られるも、そこに出現したドスジャギィがアオアシラと『食料』の奪い合いを始めたので、隙を見て信号弾を打ち上げて何とか彼らの目を再び逃れる事に成功した。

しかし、別のドスジャギィ達が先回りしていたので隠れる以外に方法が無かったのだ。

この状況では迂闊に動けない。動いたり声を出したりすれば間違いなくジャギィ達が気付いてしまう。

「……拙いね。テツ、閃光弾と煙幕はあとどれくらいある？」

朱美が救助者の中年の男を隠すように防御体制を取っていた、剣士用レザーアーマー一式で装備を固めた若い男に声を抑えて尋ねる。

「閃光が三。煙が四。他と合わせると八と十二だな」

「アタシのと合わせっと十二と十五って事か……森を出るまでまだかなりあるってのに……」

それは一見すると多い数かもしれないが、子供を含めた救助者を四人も連れてジャギィ達の目を欺きつつ森を脱出するというのはかなり難しい。

彼ら四人なら何とかなるが、戦力外が四人……しかも子供連れとくれば、逃げる足すらも遅くなってしまう。

（間の悪い湯治客だねえ……護衛二人で十人がカバーしきれる訳が無いってのに）

彼ら湯治客が雇った護衛は行方不明らしい。たった二人で十人の護衛を勤めようとする辺り素人か、それとも護衛代だけ受け取って逃げたか……何れにせよ何の役にも立たなかった訳だ。

一応救援信号は出したものの、ユクモ村からこの辺りまでかなりの距離がある。

目の良いアイルーが常に観測台に立って常に見張っているとはいえ、ここまで救助班を連れて来れるかは微妙なところだ。間に合うかどうかも分からない。
「ママぁ……」
「大丈夫よ。大丈夫だから……」
不安を訴える幼い少年と、自身も不安を隠し切れなくとも子供を元気付けさせる若い母親の声に思考が遮られた。
赤みがかった髪を見た限り、この地方の人間ではないのは確かだ。
（全く。やる気を出させてくれるじゃあないか）
目の前で誰かが危機に瀕しているなら助けるべきだ。……朱美はそういう類の人間だ。迷っていたが、踏ん切りが着いた。
しかし、やる気云々はともかくとしてこの現状を確実に解決する方法が思いつかない。
手が無い訳ではないがかなり運に頼る事になる。敵の数を考えれば犠牲が出る可能性は高い。
だが、時間がある訳でもない。ジャギィ達の援軍が駆けつけて来るのは今すぐかもしれないのだ。
「腹ぁ括るかねぇ」
朱美はそう言って小銃の安全装置を外す。それを見た彼女の仲間達は彼女の号令に応える為に各々の武器を手に合図を待つ。
「キミ達にも腹を括って貰うよ。正直、博打になるがやらないよっかマシだと思う」
見回した救助者達の顔は不安気だったが、最早そんな事に構ってられる余裕は無い。寧ろ、体勢を立て直す時間があっただけ幸運なのだ。
「今からアタシ達は全力で奴等にブチ当たる。キミ達はここにいてくれ」
「え？　……お姉ちゃんは？」
少年が不安そうな声を上げる。
「ま、何とかなるんじゃないかとは思っているさ」

朱美はそんな少年の不安を少しでも和らげる為に、楽観的に言って見せる。
「お気をつけて」
「適当にやるさ」
少年の母親の声に答えながら、仲間達を見る……準備は万端だ。
朱美はそれを見ると腰の後ろのバックパックから色の違う小瓶を一つずつ取り出し、片方の開け口部分にある摘みを捻ると真上に投じ、もう一つも続けて投げる。
最初に投じられた瓶が周囲に響き渡る轟音と共に破裂する。『音爆弾』と呼ばれる、大きな音に弱いモンスターの聴覚器官を揺さぶる物だ。しかし、今回の用途は違う。
音爆弾の音に釣られたジャギィ達が一斉に音のした方向に視線を送る。その先には先程朱美が投じたもう一つの瓶が宙を舞っていた。
その瓶が目の眩む閃光を発し、周囲の景色を真っ白に染め上げる。
『ギャウウウッッッ！！！！！』
閃光を直視したジャギィ達が悲鳴を上げた。朱美の狙い通りだった。
最初に音爆弾を投げてその音で注意を引き、続けて投じておいた閃光弾を音爆弾に遅れる形で炸裂させて、その効力を最大まで引き出す。
「攻撃開始ィッ！」
『応ッ！』
朱美の号令と共に三人の狩人が各々の武器を一斉に構え、視界を封じられて頭を振るか闇雲に爪を振り回すだけのジャギィ達に突進し、朱美は手にした小銃を構え、一番遠くに見えたジャギィの頭を狙い、引き金を引いた。
放たれた弾丸は吸い込まれるようにジャギィの頭に直撃し、脳髄を撃ち抜いた。
「オルァッ！」
テツと呼ばれたハンターが鉄から削り出された無骨な大剣をジャ

ギィの首目掛けて振り下ろし、一撃の下に切り落とす。続け様に前へ踏み込みながら左から右へ掛けての横殴りの一閃を繰り出し、二体のジャギィを薙ぎ払う。
「セイッ！」
「ドリャアッ！」
振るわれる太刀と突き出される槍が的確にジャギィの首を断ち、喉を刺し貫く。
初手としてはまずまず、敵はまだまだ多い。倒れたジャギィ達には目もくれずにハンター達は生き残るべく次の獲物に攻撃を繰り出す。
無数の足音が近づいて来る。ジャギィ達の群れが追い付いてきたのだ。だが、上等だ！　とばかりにハンター達は各々の武器を構え直した。
「っしゃあ！　いくよ野郎共！　気合入れなあッ！」
『応ッ！』
目を回していたジャギィ達を片付け終えた彼らは朱美の号令で血の滴る武器を構えなおし、朱美は遠目に見えた最初のジャギィの群れに向け引き金を引きまくった。

「ん？」
木の上で周囲を見渡していたヴォルフの耳が微かな破裂音を捉えた。
音のした方向は南西。ここからでは木ばかりで何も見えないが、あれは間違いなく音爆弾の炸裂音だった。
「行くぞ。音が聞こえた」
ヴォルフは木から飛び降りて下で休んでいた面々に告げる。

「了解」
「分かった」
ヴォルフの声に神無達は一斉に立ち上がった。
「こっちだ。行くぞ」
ヴォルフが先頭に立って走り始める。当然彼等が十分に追い付けるスピードだ。
「ヴォルフさん。何が聞こえたんだニャア？」
隣に並ぶように走るトラが尋ねてくる。獣人族である自分が聞こえない音を捉えられた事が信じられなかったようだ。
「音爆弾の音だ。音の拡散具合からしてそんなに遠くない」
トラは大したことは無いとでも言うように語るヴォルフをみて、改めてこの人狼と呼ばれる男の凄まじさを思い知った。距離だけではなく無数の木々によって音が遮られているのにも関わらず、音爆弾の音を聞き取ったのだ。
人間よりも感覚器官が発達している獣人族が捉えられなかった音を、人間であるヴォルフ・ストラディスタは捉えたという事実は信じがたい話だった。
しかし、トラにはこの上級ハンターが嘘をつけるような人間には見えない。紛れも無く真実なのだろう。そして――――――
「近いな」
――――――彼のその言葉の直後、モンスターの悲鳴とも咆哮とも受け取れる声と共に銃声が森の奥から響いてくる。
「戦闘準備！」
ヴォルフの声で全員が各々の武器をすぐに構えられるようにしつつ、自然と隊列を整わせ始めた。

「このぉっ！」
振るわれる太刀がドスジャギィの首を捉えるが、その刀身が血に塗れている上に担い手に疲労が蓄積されてきたこともあって、その刃は浅く食い込むだけで止まった。
「ギャオオオッ！」
ドスジャギィがたった今自分を切り付けたハンターを睨むと、棘の生えた尾を振るってハンターを弾き飛ばす。
「くあぁッ！？」
尾の一撃を脇腹に貰った男は三メートルほど宙を舞って地面に叩き付けられた。地面を滑って止まった先には雌のジャギィノスが待ち構えていた。
「タク！」
「くっ！？」
仲間の呼びかけで状況を把握した男――――――タクは大口を開けて喰らい付こうとして来たジャギィノスの顎を左に転がって躱しつつ、腰の後ろに差しておいた手斧を引き抜いてジャギィノスの左足目掛けて振り下ろした。
「ギャワンッ！！」
足を半ばまで両断されかけたジャギィノスは悲鳴を上げながらも、すぐに自分の足に斧を落としたハンターに喰らい付こうと顔を向けるが、途端に顔目掛けて土が投げつけられる。目潰しだ。
目を封じられたジャギィノスの足から斧を？ぎ取ると、後方から一頭のジャギィが飛び掛ってくるのを視界が捉えた。
「くそ……っ！」
回避を試みるには遅く、タクはジャギィに組み敷かれてその乱杭歯が並んだ顎に喰らい付かれた。
「ぐるるるる……！」
しかし、喰らい疲れたのは鉄で補強された左腕だ。鈍い痛みはあっても簡単には喰い千切られはしない。そしてその隙を突く形で右手の斧をその頭に叩き付けて叩き付けて叩き付けまくる。

「このっ！　このッ！　この野郎ォッ！」
斧が頭に叩き付けられる度にジャギィが悲鳴を上げて血飛沫が宙を舞い、返り血が降り掛かるがそんな事に構ってられる余裕は無い。
ジャギィの顎から力が抜け、それを察知したタクは乱暴に腕を払ってジャギィを振り払って起き上がるも、三頭ものジャギィが自分を囲みその内の一頭が今にも飛び掛らんと膝を曲げているのが見えた。
「ちぃっ！」
「伏せなぁッ！」
思わず舌打ちするも後方からの仲間の声で思わず寝転がるように地面に倒れこみ、先程まで頭のあった位置を茶色い玉が通過してジャギィの顔に直撃して鼻の曲がるような異臭を撒き散らす。
「ギョワっ！？」
「ギャウンギャウン！」
「ギャウウウウウ！」
玉が破裂して異臭を放つ茶色の液体をぶちまけられたジャギィと、巻き添えを食らった他の二匹は走り去っていった。
「うえ……肥やし玉かよ」
卓也は異臭に顔をしかめながら思わず呟いた。
肥やし玉は文字通りモンスターの糞であり特に肉食種のソレは異常に臭く、これはそれに薬品を混ぜ合わせることで臭いをより強烈にしたもので、これをぶつけられたモンスターはその臭いを嫌がって逃げる者すらいるほどだ。因みに携帯時は土で薄く覆った上で薄布を巻き『取り扱い注意』と書かれている。
「こっちを頼む！」
呼び掛けにハッとなった卓也が振り向けば、目潰しがまだ効いているジャギィノスの後方で大剣を振るってドスジャギィと複数のジャギィとジャギィノスを牽制している仲間が目に入る。
「今行く！」
タクは転がっていた太刀に跳び付くと共に握り締めて立ち上がり、

手近なジャギィに向けて切りかかった。

「やばくなってきたか……」

朱美は大きな木を背に、小銃に弾丸を手早く込めながら呟いた。

目の前にはジャギィ達から自分を守るように槍と盾を構える仲間がいる。

しかし彼にもすぐ側でドスジャギィ達を相手に戦っている仲間達も疲弊し始めている。

そして、ガンナーである彼女にとって一番深刻な問題が訪れつつあった。弾切れが近いと言う事だ。

幸いなのは非戦闘員の湯治客達が隠れている所から出てこない上に為にまだ見付かっていない事くらいだ。多少の音くらいは出しているだろうが、戦闘で派手な音を撒き散らしいている為に聞こえようが無いだけだろう。

ボルトを押して初弾を装填する。

敵は槍兵の防御力と、それでも存在する僅かな隙を縫う形で放たれる弾丸と、装填時にはここぞとばかりに怒涛の反撃を繰り出す槍兵の攻撃力に手を焼いているようで、数を揃えつつも近付く事が出来ないでいる。

それでも均衡が崩れるのは時間の問題だ。

ジャギィ達の後ろから一頭のジャギィが、仲間達を飛び越えるほど大きくジャンプして朱美へと直接奇襲を試みるが、既に見切っていた朱美に胴体へ弾丸を撃ち込まれてそれが制動の働きをした為にジャギィ達の真上に落下する。

突然の事にジャギィ達の間にパニックが起きる。

「ダイゴ！」

「ああ！」

その一瞬の隙を突く形で、ダイゴと呼ばれた槍使いが自身の槍の柄を脇に抱えてしっかりと固定した上で盾と共に構え、大きな踏み込みと共にジャギィ達目掛けて突撃する。
「うおおおおりゃあああああああ！！！！！」
その一撃でジャギィ達は大きく体制を崩した。そこへ続け様に放たれた弾丸は無防備なジャギィ達を撃ち抜いて行く。
「せいやあっ！」
そしてダイゴは途中で回れ右をするように強引に制動を掛けつつ、右手に持った槍で残ったジャギィ達に横殴りの一撃を放った。
「行くよ！」
倒れていくジャギィ達を尻目に、朱美は新たな弾丸を込めながら走り始める。
新たな標的は、テツとタクが戦うドスジャギィを始めとしたジャギィの群れだ。
「擲弾用意！」
朱美が叫ぶような声を出しつつ、拳大の球状の物体に細長い棒の付いた物をバックパックから取り出しつつ、細長い棒部分を銃口に差し込む。
それを聞いたタクがドスジャギィに大降りの一撃を繰り出し、それをドスジャギィが躱した隙を突く形でテツが前に出て手にした大剣を地面に突き刺した。
それはドスジャギィから自分とタクを遮る壁のようだった。
「発射！」
朱美が先端に拳大の球を付けた小銃をドスジャギィに向けて引き金を引いた。先端に付けられた球が放たれる。
放たれた球は煙の尾を引きながらドスジャギィに直撃し、轟音と共に爆発した。
『ギャオオォォッ！！』
周囲を囲っていたジャギィ達も巻き添えを食らって倒れ、倒れなかった者も即座に防御体制を解いたテツとタクの剣によって倒れた。

「はぁ……はぁ……」
「片付いたか……」
タクが血まみれの太刀を振って血を払い落としてから、残った血を懐から取り出したボロ布で拭き取り、テツは自分の大剣に刺さった先程の擲弾の破片を払いながら呟いた。
擲弾の直撃を受けたドスジャギィは左前足を含めた肩から胸辺りまでを抉られていた……即死している。
「流石に火砲用の炸裂弾は違うね……高かったけど」
「気を抜いてる場合じゃない。早く行かないと新手がくるぞ」
朱美が自分の放った擲弾の威力に簡単の声を上げる側で、ダイゴが救助者の事を指して言う。
「そうだね。皆、出ておいで」
朱美が言うと、物陰に隠れていた湯治客達が姿を現した。
「一応片付いたけどまだ完全じゃない。すぐに出発するよ」
朱美はそう言いつつ湯治客達に近付きつつ、小銃に安全装置を掛ける。
その直後――――――
「ギャオオオオッ！」
――――――追い付いてきた二頭のドスジャギィが複数のジャギィとジャギィノスを連れて森の奥から現れた。ドスジャギィはアオアシラに付けられたらしい傷を負っていたが、先頭には支障がなさそうだった。
「……言ってる側からこれかい」
「やべえな」
「だが逃げられんぞ」
「ったり前だ。一般人だけでも逃げ延びさせるぞ！」
新たな敵を前にしてもハンター達は威嚇を繰り返すジャギィ達に向けて己の武器を構える。
「うっ！？」
小銃を構えた朱美が呻き声を上げた。

「どうした？」
「さっきの擲弾だね……あの反動で銃身に亀裂が入ってる」
これじゃ危なくて撃てないよ、と朱美は小銃のボルトを引いて薬室と弾倉内の残弾を取り出しつつ言った。
小銃上部の銃身には小さな亀裂が走っており、これでは撃った弾が狙い通りに飛ばないばかりか、破裂した銃身の破片が自分や仲間に降りかかる可能性が高い。つまり、使い物にならないのだ。
その顔にはガンナーとしての戦力を失ったことに対する焦燥感を隠し切れずに引き攣った笑みが張り付いていた。
「……せめてガキと客を守んな」
テツが前だけを見て言う。
「そうだね」
朱美は小銃の先端部の着剣装置に銃剣を取り付けながら返事をした。その顔にはもう焦燥感は無い。出来る限りのことをするまでだ、と、自身の役目を悟った者の表情だった。
ジャギィ達がゆっくりと間合いを詰めてくる。その表情は仲間を殺された事を怨んでいるのか、怒りを露にしているように見えた。
「来るぞ！」
タクの言葉に全員が身構え、ジャギィ達が一斉に身を低くして今にも突撃出来るような体制を取った――――――その直後だった。
僅かな風切り音と共に湯治客達の後方から何かが飛来してドスジャギィの額を貫いた。
力を失ったドスジャギィが倒れ伏し、突然の事にざわめくジャギィ達と呆然とする朱美達……そして――――――
「待たせたな」
と、何処からか飛んできたように地面に着地する、ユクモの狩人装束を身に着けた一人の長身の男が、背を向けたまま呟くように言った。

その左手には艶消しの施された細長い棒が握られている。鞘だ。
「ストラ……ディスタ！？」
朱美の呟くような言葉がやけに大きく森に響いた。
目の前に現れたのは人狼と呼ばれるハンター、ヴォルフ・ストラディスタだった。
「守りを固めて後は俺達に任せろ」
ヴォルフは肩越しに振り向きながら言った。

森林での戦い。（後書き）

お待たせしました。ナナシです。
ようやく投稿出来ました。
中途半端な所ですが、なるべく早く続きを書くのでお待ちください。

ご感想ご意見お待ちしてます。

全く話が進みません。出てくるのもジャギィばっか……ファンゴ位出しましょうかね？

修行の成果と……

「俺達？」
朱美はヴォルフの言葉の意味が分からなかった。しかし、その意味はすぐに理解することになる。
「朱美さん！」
神無を始めとした武装した一行が現れたからだ。
「大丈夫ですか？　怪我は？」
「成るほど『達』ってのはあんた達のことか。問題無いよ。それより気を付けるんだよ？　ドスはもう残り一頭だけでも、他がまだ数を残してる。あと、アオアシラが近くにいる」
朱美が神無に状況を説明すると神無は頷いて片手剣を手に立ち上がった。
「任せて下さい。まだ二週間ですけど、修行の成果をお見せします！」
神無の言葉と共に夏空が火砲を、梓が横に倒した弓に矢を三本同時に番えて構え、その両隣に小冬と椿が各々の武器を手に立つ。
その様子を見た残り一頭となったドスジャギィと、率いられるジャギィとジャギィノスの群れは喉を鳴らして威嚇する。
先頭に立っていたヴォルフが腰に差した刀に右手を沿え、その直後に音も無く前へ跳んだ。一足で敵の間合いまで距離を詰め、抜刀する。
僅かな鍔鳴りと共に擦れ違ったジャギィの首に線が走り、一瞬遅れてその線が切り目へと姿を変えて首がずれていく形で胴から放れて行った。
鮮血が迸り、事態を把握しきれないジャギィ達が混乱に陥り、その隙を突かれる形で二頭目、三頭目と一太刀で瞬く間に斬られて行く。
そこでドスジャギィが事態を察知して既に群れの中に入り込んだ

ヴォルフに攻撃を試みるが、ヴォルフは既に高く跳んでその視界から離脱していた。
ジャギィ達が跳んだヴォルフに反応して一斉に上を向く。この状況で跳ぶのは致命的なミスだ。着地点が敵に囲まれている以上、着地点にいた者を倒せたとしても他のが喰らい付くからだ。
だが、それは彼一人ならばの話だ。
「発射！」
神無の声が号令となって夏空のが轟音と共に火を噴き、梓の引き絞られた弓から三本の矢が放たれ、上を向いていたジャギィ達に襲い掛かった。
砲弾は固まっていたジャギィ達の足元に着弾して炸裂し、その爆風と破片が数体のジャギィを纏めて吹き飛ばし、三本纏めて放たれた矢はジャギィノス三体の頭、首、目をそれぞれが刺し貫いていた。
そこへ刀を最上段に構えたヴォルフが、ジャギィノスの正面へと降下しながら振り降ろす。
兜割りと呼ばれる剣技の用途のままに、ヴォルフの太刀筋は一部の狂いも無くジャギィノスの頭頂部から胴の半ばまでもを両断されて地面に崩れ落ちた。
「突撃！」
「はあああああああああ！」
「やあああああああああ！」
夏空が次弾を発射すると共に梓が二本の矢を放ち、更に小冬と椿が群れに向けて突貫する。
砲撃と矢によってダメージを受けるか混乱していたジャギィ達はその攻撃に咄嗟に反応できない。あるものは小冬の二刀に切り伏せられ、あるものは下段から襲い来る鉄の塊に顎から上を砕かれながら吹き飛んだ。
だがジャギィ達もすぐに体制を立て直して小冬達に反撃を試みるも、意図的に遅れて突入してきた神無の楯と正太郎の銃槍に阻まれて返す刃の如く、切り伏せられるか殴り飛ばされる。

そして始まる集団戦。囲まれた神無達四人だが、背中合わせの攻防を実に上手く活用している上に、側面からは炸裂弾からただの鉄の礫（つぶて）に切り替えられた砲弾と降り注ぐ矢によって追い詰められ、砲と矢の方に攻撃を試みれば遊撃要因であるヴォルフによって一刀のもとに斬り捨てられた。

跳んで上空から奇襲を掛けようにも、砲撃手の夏空と弓兵の梓はそれを常に警戒した上で狙撃している為に全く効果が無い。跳んだ所で砲弾で文字通り吹き飛ぶか、矢を受けて体制を崩して落ちた所を大楯に受け止められるか怪力を持って振るわれるハンマーで殴り飛ばされる。

囲んだ四人だけなら容易くても、そこに側面攻撃を行える射手二人と凄腕の遊撃要因が加われば、ドスジャギィが如何に統率を試みようと全く手が付けられない。それどころかドスジャギィ自身も遊撃要因の強烈な牽制の為に迂闊に動くことが出来なかった。

だがそこにも綻びはあった。

「そこだぁっ！」

正太郎が銃槍をドスジャギィに向けて引き金を引き絞る。

地に響くような轟音と共に銃口が火を噴き、放たれた弾丸は狙いから逸れてドスジャギィの首を掠めて後方へと飛んで行く。

「きゃあっ！？」

「うくっ！？」

しかし、突然の銃声に怯んだ神無と小冬がバランスを崩した。

不意に現れた好機にジャギィノスが裂けた大きな口を開き、鋭い乱杭歯が並んだ顎で神無に喰らい付かんと襲い掛かる。

「しまっ！？」

正太郎が自分の迂闊さを呪いつつも神無を守ろうと駆け出すが、今の自分の位置からではとても援護には間に合わない。

しかし飛来した黒い短刀が、神無に喰らい付こうとしていたジャギィノスの額に吸い込まれるように突き刺さり、もう一方で隙を見せた正太郎に反撃を試みたドスジャギィの腹部には、ヴォルフが手

にしていた刀が鍔元まで突き刺さっていた。
「ヴォルフ！」
小冬がヴォルフを呼ぶが、その時には既に一頭のドスジャギィが彼の背後を取って大口を開いて今にも噛み付こうとしていた。
対するヴォルフは自身の頭を噛み砕かんとしていたジャギィノスの顎を振り向きながら躱すと、ジャギィノスの首と胸元に手を添えるとそのまま一気に地面に叩き付けるように投げ飛ばした。
肉が地面を打つ生々しい音が響くと共に、ヴォルフは抜き放った苦無をまだ息のあったジャギィノスの喉に突き刺し横へ抉って致命傷を与えた。
「やあっ！」
そして椿の横殴りの一撃を受けたジャギィが吹き飛んだのを最後に、残ったジャギィ達は自分達が圧倒的に不利になったことを悟り、一目散に逃走していく。
「……片付いたぁ～」
「っ！　あいつまだ……！」
神無が溜息混じりに言うが、小冬が腹に刀が刺さったままのドスジャギィが起き上がるのを見て声を上げる。
刀の刺さった部分から血を滴らせながら歩くドスジャギィは、足元がふらふらと覚束なかったがまだ戦う気の様だった。
もう長くは持たないと悟ってはいるのだろう。だが、それでも一矢報いなければならないという、群の長たる誇りを宿した目をしてヴォルフを睨み付けていた。
「このやろ……っ！？　ヴォルフ？」
正太郎が銃槍を向けようとするが、ヴォルフはドスジャギィの前に立つ共に正太郎を『俺一人で充分だ』手で制す。
「……」
武器は構えたままだったが正太郎はヴォルフの指示通りに下がった。
対峙する一人と一頭。それは宛ら、互いの誇りを掛けた決闘のよ

うだった。
しかし、ヴォルフは無手だ。刀は相対するドスジャギィに刺さったままで、ヴォルフの手元には苦無が一振り。しかし、それは鞘に収められている。
ヴォルフは両腕を下げて何の構えも取らずに相手を見据えており、対するドスジャギィも歯を剥き出しにしながらも、ヴォルフを見据えている。
それを、神無達は固唾を呑んで見詰めていた。
沈黙がその場を支配する。耳が捉えるのは、各々の押し殺すような呼吸と早鐘のような心臓の音……そして――――――――小さな風が吹いた。
舞い落ちる一枚の木の葉。ゆらゆらと不規則に揺れ落ちる様は風流でもあり、自然と季節の儚さを示すようでもあった。
それがヴォルフに近付いて――――――――音を立てて爆ぜた。
「ギャォォォオオオオオオオオッ！」
その瞬間にドスジャギィは正に爆ぜたかの如く勢いでヴォルフへ突進した。渾身の一撃を持って頭を噛み砕かんと大きく開けた口がヴォルフに迫り――――――――――ヴォルフは既に刀の柄を右手で握り締めていた。
そして鈍い音と共に叩き付けられる拳。踏み込みと共に、肘と肩、そして腰の全ての動きが一体となった一連の動作で繰り出された拳の一撃。
打つは刀身の峰。その衝撃を全てに刀へと伝達し、ドスジャギィの胴を半ばから一直線に切り裂いた。
振り返るように抜かれた刃と共に、その軌道に沿って鮮やかな半円を描きながら鮮血が散って行った。
谷間のような切り口から鉄砲水のような鮮血が噴出す中、命を失ったその体はゆっくりと地面へと倒れていった。
崩れ落ちたドスジャギィに背を向けたままヴォルフは、静かに呟きながら刀を軽く振って血を払い鞘に収めた。

「夏空と梓は周囲を警戒。小冬と神無は二人を護衛に。神無は救助者の様子を診てくれ」
『了解』
勝利の余韻に浸ることも無くヴォルフは指示を出し、指示を受けた彼女達は一斉に行動に移った。
「さて……」
「分かってるよ。さっきの砲撃だろ？」
自分にだけ指示を出さずに残した事で、その意図を察していた正太郎は自身が招いた危機を自ら口にした。
「一度も訓練に用いなかった武器を実戦で使う事が、どれほど危険か分かっただろう？」
訓練で使うことの無かった武器の使用。取り分け銃槍（ガンランス）という特殊な武器はそうとう慣らさなければならない物だ。担い手自身も、共に戦う者達も。
「ああ。今回は今までどおり訓練で使ってた槍を使うべきだったんだ。そうすりゃあ、皆を危険に晒させずに済んだ」
「それで良い」
顔を歪めて悔しそうに告げる正太郎に、ヴォルフは簡潔に告げる。
「自分の非に、自分で気付き自分で認めて悔いる。それが出来ればお前はまだ伸びる。銃槍をこれからも使い続けると良い」
ヴォルフはそう言い残すと少し放れた所にあったジャギィノスの骸に近付いて、苦無を回収し始めた。
「……敵わねえな」
正太郎はヴォルフの言葉を脳裏で反芻させつつ、溜息混じりに呟いた。よくよく思い出してみれば、今回ヴォルフはやたらと自分達に視線を向けながら戦っていた。
それは訓練の成果を見極めるためだろうが、自分が仕出かすだろうミスに逸早く反応できるように様子を伺っていたのだという事が、正太郎は今になって理解した。
とても年下とは思えない、年長者のような振る舞いは流石はベテ

ランというか、今までの人生を戦いのみに費やしてきた者との違いというか……そういった物を、改めて知った。
「怒られてやんの」
「ぬなっ！？」
突然の背後からの呟きに正太郎は奇声を上げつつ跳び上がった。その拍子に背負った銃槍と楯の重量もあってかバランスを崩して尻餅をついた。
「ふ・ふ・ふ」
見れば小冬が意地の悪い挑発的な笑顔で、正太郎を見下ろしていた。
「小冬嬢……びっくりさせんでくれよ」
「嫌よ。つまらない」
正太郎は小冬の言葉に苦笑しつつも立ち上がり、彼女はそんな彼に興味を無くしたのか、後方でいつもの呑気な笑顔を浮かべた夏空の方へと向かった。
そんな小冬を見ながら溜息を吐くと、アイルーのトラが近付いてくる。
「お疲れニャ」
トラはそう言って背負っていた筒状の鞄から干し肉を出して勧めてくる。
「ありがとよ」
受け取った干し肉を噛みながら、次からの訓練に思いを馳せる。ガンランスを自在に使いこなす為の訓練の様子……の筈が先日の模擬訓練でボコボコにされた事を真っ先に思い出してしまい、憂鬱になった。
「ああ。本当に敵わねえや」
余談だが梓曰く……何やら呟きながら干し肉を食べる彼の姿は哀愁が漂っていたらしい。

「すまない。助かったよストラディスタ」
苦無を回収し終えたところで、朱美が礼を言いにきた。
「以前、俺も助けられた」
それに俺は今は仮住まいとはいえユクモに住んでいる。同じ地で暮らす者は助け合う物だ。
「俺もまた何処で危機に陥るか分からない。その時は頼む」
「あいよ」
俺の言葉に朱美は肩を竦めながら答えた。
「……ヴォルフ・ストラディスタ、だったか？」
朱美の隣に立っていた大剣を背負った男が尋ねてくる。
「ああ」
「俺は黒長一徹（くろながいってつ）だ。テツって呼んでくれ。それと礼だ。助かったよ」
「ああ。俺の時は頼む」
「人狼とか言われてる奴のピンチとか想像付かんがね……っとスマン。気を悪くしないでくれ。口が軽いもんでな」
一徹という男は強面に似合わずお喋りな性格のようだ。
「構わん。聞き慣れた称号《名》だ」
「そうかい。そう言えば、あいつ等を鍛えてくれているんだってな？」
一徹は救助者の怪我の有無を確かめている神無と、アイルーと何かを話している正太郎を差して尋ねてくる。
「大したもんだな。皆見違えたぜ。特に正太郎……随分と変わったな。ヘマをやらかすのは相変わらずだが」
一徹は何処か嬉しそうに正太郎を見て言った。
見た所正太郎と同年代だ。……どうやら正太郎はこの連中に付いて行けなかったから、門番をやるようになった訳か。

かと言ってこいつ等が悪い訳じゃない。当時の正太郎は自分を変える事が出来なかっただけだ。それでは見放されるのも無理は無い。
だが、この男は素振りから正太郎の事を気にしていたようだ。
「確かに強くはなった。だが、あんた達にはまだ追い付いていない」
「そう簡単に追い付かれたら困るけどな」
「そうそう」
一徹の言葉に朱美が相槌を打つ。それもそうだな。だが今回の件を機に、このチームは更なる高みを目指すだろう。特に一徹には競争意識を向けられている気がする。
追い付かれまいと焦らなければ良いんだが。高望みして大物に挑み、返り討ち……何て事になったら目も当てられん。
「ヴォルフさん！　アオアシラが！」
滅多に声を出さない椿の声がアオアシラの接近知らせる。
「怪我人を中心に円陣を組め！」
指示を下すと全員がすぐに救助者と怪我人の周りに集まる。アオアシラか……そう言えば近くに居ると言っていたな。先程までの騒ぎを聞いて現れたか……だが、ジャギィ達の動きの変化に気付いていない筈が無いのだが。
モンスター達は危機に敏感だ。取り分け天敵を持つ類は常に気を張って周囲に意識を向ける。
自分の勢力圏に入り込んだドスジャギィ達の異変に気付いたのなら、わざわざ近付こうとはしない筈だ。それともアオアシラは前に現れた固体のように、横取りやお零れ目当てに現れるのがアオアシラの生態か？
だが、アオアシラはドスジャギィに対して自身が優位に立てる点は膂力（りょりょく）位の物だろう。単なる力技で集団戦を駆使する群に戦いを挑むものか？
考えている内に円陣が出来た。そして椿が見たという方向に対し、俺が先頭に立つ。勿論、左右に夏空と梓の射出武器を持つ者を、後方には一徹ともう一人槍を持ったハンターを配置して万一包囲され

た際に対応できるように構える。
「来たか」
俺の言葉に全員が反応する。
木々の向こうからアオアシラが姿を現した。
……だが妙だ。しきりに後方を気にしているようだ。まるで――
――――――
「全員防御体制！　１２時方向！」
俺の急な指示の変更に全員が戸惑う。
「オイ！　どうなってんだよ！？」
朱美の仲間の一人、太刀を持った男が声を荒げた。俺は言葉を返さずに前に出た。
俺の姿を見たアオアシラは一度立ち止まると、左へと方向転換して去っていく。やはりな……
他の面々はアオアシラの行動が理解出来なかったようだ。単に大勢で待ち構えられて、諦めたとでも思っているのだろう。
「ん？」
小冬が声を漏らした。
「どうしたの小冬ちゃん？」
「……拙い」
「え？」
小冬は気付いたらしい。もう少し速く気が付ければ形にはなるのだろうか。
「ここ、拙い」
「ええ。嫌な予感がしますぅ」
「に、逃げないと……」
夏空と神無も気付いたようだがもう遅い。俺は腰の刀の鞘を握った。いつでも抜刀できるように――――――――そう。アオアシラは逃げていたのだ。自分が狙われていたのではない。相手の視界に入らない為に。
地面を打つ音が聞こえた。重い音だ。一定のペースで此方に近付

いて来る。近くに水溜りでもあれば波紋が起こるだろう。
「お、お母さん」
救助者の中の子供の声が聞こえた。だが、母親は何も答えない。声を出す精神的な余裕すら、一般人には存在しない。
そして、それが姿を現した。
「ジン……オウガ……！」
誰かの搾り出したような声が僅かに耳に入るが、そんな者は最早雑音に過ぎない。
碧の双眸が俺を捉える。間違いない。あの夜のジンオウガだ。
俺は陣の先頭から右に逸れるように歩を進めた。決して背後の者達への道を譲るわけではない。奴の目は――――――――――俺以外見えていない。
「ヴォル君……」
神無が何か言っていたが、瑣末事だ。今はただ……己の牙で語り合うだけだ。
不意に風が吹いた。強い風だ。激しく揺らされた木々が周囲に無数の落ち葉を流れるように散らし――――――――
「アウォオオオオオオオオオオン！！！！！」
「はあああああああああああっ！！！！！」
俺とジンオウガの咆哮でその全てが鋭い音を立てて破裂し、その直後には俺と奴は互いに交差していた。

修行の成果と……（後書き）

やっと更新できました。
スランプ中な為、上手く書けているのかどうか皆目見当も付きませんが、如何でしたか？
感想とご意見随時募集中です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6004t/

人狼と雷狼竜

2011年9月30日03時23分発行